実を結ぶ命

ゴットホルド・ベック編 著

がんにうち勝った
ドイツ少女リンデ



Gotthold Beck

FRUCHT FÜR JESUS

Ein volles, freudiges JA

実を結ぶ命

がんにうち勝ったドイツ少女リンデ

ゴットホルド・ベック編著

推薦のことば

私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。

（ローマ　8・38、39）

リンデが七月の初めに入院した時、その病気の経過がどのようなものになるか、誰にもわかりませんでした。私たちは、リンデを、二十才という年令で永遠のふるさとに迎えようと備えておられた主イエスの聖なるご計画については、何も知りえませんでした。

リンデが、昨年の八月二十日に、この地上での奉仕の生活を終えた時、主イエスと共になりたいという、彼女の切なる願いは成就されました。彼女は、主イエスのために実を結びたいと心から願っていました。そして、主は確かに、リンデを通して豊かに実を結ばれたのです。

その証しをして下さった方々としては、リンデの属していた「しゅろの木」のクラスの方々の名前をあげることができます。また、リンデと同じ病室にいた患者さん、医師、看護婦、さらにリンデが召される直前に日本からはるばる来て下さった親しい友人がたの名前をもあげることができるのです。

過ぎ去ったこの数ヵ月間、私たちは召されたリンデを通して、多くの方々が祝福されたことを心から感謝し、リンデを、この看護学校にお送り下さった主なる神の導きに、深く感謝するばかりです。目に見えない永遠の世界は、リンデが召されたことを通して、ますます身近かなものとなったのです。

しかも、主の祝福が、ドイツのみならず、日本においてもそのように豊かに注がれ続けていることを、多くの方から、いく度も聞くことができました。

いま、リンデの証しの本が、日本語で出版されるということは、私にとって大変大きな喜びです。多くの方々が、この本を通して、苦しみと人生の意味を問うだけでなく、死を滅ぼし、福音によって命と不滅を明らかに示された方、主イエスを体験する機会を得ることができますように心から願っております。

キルヒハイム看護学校　校長
エリザベス・ゲマインハート

一九八一年復活節
キルヒハイム・テックにて

まえがき

今から十数年前、私は国立国会図書館で聖書研究会の奉仕をしたことがあります。国会図書館の正面玄関には、「真理はあなたがたを自由にする」という聖書のことばが大きく書かれていて、私はここを訪れ、このことばに接するたびごとに心から感謝したものです。

一般的に言って、病人が自分の病状を知らされるのは苦痛なものです。また、医師や家族も、病人が助からない病気に冒されている場合、真実を伝えることは難かしいものです。しかし、病状を隠す、というようないわゆる思いやりは、本人のために何の助けにもならないばかりか、不安な心を解放することもできません。というのは、真理のみが自由を与えることができるからです。病人が、真実を見つめ、死を乗り越えて進もうとする時、心の自由が生まれるのであり、病状を偽って伝えることは、心情的にはよくわかることですが、やはり偽りであると言わざるをえません。

真理のためには、本当のことを話す勇気が必要です。それは冒険であります。

自分の本当の病状を知った者は、絶望します。しかし、そこから、死と恐怖の束縛から解放への真の戦いが始まるのです。

主であり救い主であるイエス・キリストが生きておられ、それゆえ絶望しなくてもよいという

ことを経験する人は幸いです。イエスは言われます。

わたしは、生きている。わたしは死とハデス（死者の国）の鍵を持っている。

このまことの神を信じることこそ、死からの解放と永遠の自由を意味します。人間は、岐路の上に立つ存在です。自分の人生は、もうやり直しがきかないのだろうか、まだ何らかの希望が残されているのだろうか、と自問する時、人は人生の重大な別れ道の上に立っています。そして、この重大な問いに対して、この本は次のように答えようとしています。「そんなに簡単に人生をあきらめないで下さい。生きているまことの神さまがおられます」と。

この方は希望を与える神であり、希望を失った人の助け主です。神は、絶望したうつろなたましいを、生きたまことの希望で満たすことができます。イエスを通して、この生けるまことの神を知るようになる人は、次のような経験をします。

私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方にくれていますが、行きづまることはありません。迫害されていますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。（Ⅱコリント 4・8、9）

イエスはまた、次のように力強く語りかけておられます。

あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしは、すでに世に勝ったのです。（ヨハネ 16・33）

私たちの愛する娘リンデは、自分ががんの末期症状にあり、回復の見込みがないと聞かされた時、次のように言いました。「それなら、まもなくイエスさまのみもとに行けることを喜びます。ただ、私が、イエスさまのために、あまり実を結ばなかったことだけが心の重荷です。でも私は心から感謝しています」。主イエスのために実を結ぶこと、これがこの世を去る最後の時までリンデの願い、また祈りとなりました。そして、その祈りが、それ以来いかにかなえられたかということは、ただ驚くほかありません。実を結ぶことについて聖書には次のように書いてあります。

主に信頼し、主を頼みとする者に、祝福があるように。
その人は、水のほとりに植わった木のように、流れのほとりに根を伸ばし、
暑さが来ても暑さを知らず、葉は茂って、日照りの年にも心配なく、
いつまでも実をみのらせる。（エレミヤ　17・7、8）

この本は、主イエスのために実を結ぶこと、つまり永遠のために実を結ぶという願いによって書かれました。神は次のように勧めておられます。

彼らの生活の結末をよく見て、その信仰にならいなさい。（ヘブル　13・7）

私は、この本によって、リンデに対する同情を得たいのではなく、病床のリンデを通して、神がどんなに豊かな栄光を現わして下さり、あらゆる患難、悩み、苦しみの中にあってもどのようにしてまことの希望を持たせて下さったかを知っていただきたいのです。

目次

推薦のことば
まえがき
リンデのアルバム

Ⅰ　死を見つめて――リンデの生涯――

一　死は勝利にのまれた　3
二　ルデヤ姉にならって　5
三　ドイツへの帰国　10
四　看護学校にて　13
五　希望かあきらめか　18
六　目的地に達した　28
七　葬儀の通知とリンデの遺言　34

八　葬式か結婚式か　36
九　多くの証言から　54

Ⅱ　あなたは、わたしを愛するか？――リンデの学び――

一　誘惑と試練　65
二　あなたは、わたしを愛するか？　82
三　聖書メモ　99

Ⅲ　光を見上げて――宗教から救いへ――

一　みこころに反する祈り　121
二　「宗教」と「啓示」　136
三　仰げ主を　148

基礎的なみことば
あとがき

I　死を見つめて——リンデの生涯——

ほむべきかな、大いなる業をなしたまいし神は。
イエスの血潮によってあがないとられた人類の救いは、
何とすばらしいものだろうか。
主イエスを信じる罪人は魂の救いを得る。
神の救い主イエス・キリストを受け入れる者のすべてに、
罪の赦しがある。
主の愛と導きは完全。
主の御手の内にある安らぎは何という喜びか。
喜びつつ天のふるさとに帰るとき、
喜びはさらに大きく、聖く、高く。
主をほめよ。主をほめよ。ハレルヤ、ハレルヤ。

一　死は勝利にのまれた

ある日、私たち夫婦は、集会の独身の姉妹たちの集いに招かれました。彼女たちは、私たちの銀婚式を記念して、贈り物をしてくれ、楽しい交わりの時を持つことができました。お茶とお菓子を囲んで歓談している時、ある姉妹から「二十五年間の結婚生活で、一番印象に残ったことは何ですか」とたずねられました。私はちょっと考えて「リンデの召されたことです」と答えました。

私たち夫婦は、六人の娘に恵まれました。上からハイデ、クリステル、ウスラ、リンデ、ブリギッテ、スーシーです。次女のクリステルは生後六ヵ月で召されました。そして昨年八月二十日午前三時、四女リンデも、突然がんのため二十才で召されました。親として、娘リンデの病気によって、人知れず涙を流しました。わが子が痛みのため苦しんでいるのを見ていながら、何もしてやることができないということは本当につらいことでした。しかし、神がリンデを召してくださった時、私たちは心から喜びと感謝に満たされ、主イエスを礼拝せざるを得ませんでした。

妻と私は、毎日一緒に祈り、すべての願いを主に打ち明けます。その時、まず私が祈り、そのあとで妻が祈ることになっていました。しかし、リンデが召された時、私たちはまったく同時に主を賛美しました。主の恵みと祝福、部屋を満たしている神の平安の中で、私たちはそうせざるを得なかったとしか言えないのです。

主の臨在がリンデの病室を満たし、リンデのなきがらが静かに横たわっていました。私たちがリンデを愛した以上に、主イエスがリンデを愛して下さいました。そして今や、リンデは、主のみもとにいることを、はっきり知りました。

午前四時、私たちは、車で病院からエヒタディンゲンの家に帰りました。車の中で、私たちは敵国にいるような気持ちに襲われました。世界は敵意に満ちていました。悪魔が明けやらぬ世界の闇を支配しているのだとはっきり感じるほどでした。リンデの病室を満たしていた神の平安に比べて、地上のすべてが色あせて魅力を失っていました。目に見えない霊の世界が私たちの現実となり、新たに主イエスのためにだけ生きたいという思いが車の中の私たちを支配しました。

世界は、今しばらくの間、神の許しによって、悪魔の支配に委ねられています。その結果、大勢の人々が惑わされ、真理に対して盲目にされています。人々は、この地上で心の満足と真の幸せを手に入れることができると思い込もうとしています。しかし、それは幻想です。神の御子、主イエスだけが、私たち人間の心に真実の満足を与えてくださるということを、愛するリンデとともに、読者の皆さまにお伝えしたいと願っています。

二　ルデヤ姉にならって

私たち夫婦は、一九五三年（昭和二十八年）に日本へやってきました。私たちは、日本で宣教師として働き、最初のドイツへの里帰りの時、リンデが生まれました。リンデが生まれた所は、西ドイツの小さな町で、ネッカー川のほとりにあるラウフェンという町です。この町にはプファルツグラーフェンブルグという古城があって、今でもラウフェンの町役場として使われています。町の真中には教会があって、これもネッカー川のほとりに立っています。

一九六〇年七月十九日、リンデはこの町の病院で生まれました。初め酸素吸入を受けなければなりませんでしたが、間もなく母親と一緒に元気に退院しました。退院して、しばらくして祝福式を行いました。ドイツでは、生まれた子供のために一人の婦人を選び、その婦人が両親とともに、その子の健（すこ）やかな成長と、神を知り神に祝福されることを祈る習慣があります。私たちは、ルデヤ姉にこの奉仕をお願いして、リンデのために祈ってくださるよう頼みました。この日以来、この世を去る日まで、ルデヤ姉は忠実に祈っていてくださいました。ここで少し、ルデヤ姉についてお話ししたいと思います。

ルデヤ姉は「アイドリンゲン姉妹会」に所属していました。妻と私は、一九四五年に初めて彼女と出会いました。それは終戦直後のことでした。当時は、まだバスや列車が走っていず、学校

も閉鎖されたままで、食糧も乏しく、多くの人が失業していました。物質・精神両面で人々は飢え渇き、人生の意味を求め始めた時代でした。そんな中で、ルデヤ姉は、アイドリンゲン姉妹会から、ルッツェンベルグという村に派遣されて、青年たちに伝道していました。ここでは絶えず修養会が催され、多くの人が、主イエスを自分の個人的な救い主として受け入れました。私たちも、この伝道の奉仕を通して、生き生きとした信仰に導かれました。その日以来、私たちは、霊的な母とも言うべきルデヤ姉と心から一つになることになったのです。当時、私たちが感動したのは、彼女が聖書のみことばから語ってくれた事柄というより、むしろ彼女自身から輝き出ていたもので、それは神の平安と主イエスにある喜びそのものでした。彼女は、私たちが初めて参加した修養会で「私は大切ではない」という主題で話してくれました。「私たちの身に起こることは大切でなく、また私たちがどんな生活をするのかも大切ではありません。大切なことは、ただ主イエスが私たちによって栄光を受けられ、多くの人の魂が、救われることです」という内容でした。

人は自発的に、そして意識して自分を否定しない限り、このような断固とした態度を取ることはできません。「私の思いではなく、主よ。あなたのみこころがなりますように」という祈りが生活の中で行動となる時、豊かな霊の祝福が与えられます。ルデヤ姉は、自分を大切にしたいと思う自我が、彼女自身を支配することを許しませんでした。それで、主イエスが彼女の心の中心となることができたのです。姉妹の柔和な表情、優しい瞳の奥には、はっきりした決断と意志を見ることができました。

リンデは、やっと二、三ヵ月になったばかりでしたが、私たちと日本に戻りました。最初の四年間は、漁師町であり、港町である茨城県の那珂湊で大きくなりました。空気は大変清らかで、私たちの住居からの見晴らしもよく、目の前に町と海が広がっていました。その当時、まだ庭らしいものも、芝生や植木もありませんでしたが、私たちの家で集会が持たれて、約八年間に百人以上の人々が主イエスを救い主として受け入れ、洗礼を受けました。洗礼は海や川で行いました。この洗礼式は忘れがたい思い出です。リンデは、そこで姉や妹たちと同じように成長したのです。そしてやがて、なぜ両親が日本にいるのかを彼女も知るようになりました。それは時間つぶしのためでも尊敬されるためでもなく、もちろん裕福になるためでもありません。主イエスだけが、私たちの罪を赦してくださる唯一のお方という福音が宣べ伝えられるためであり、これこそ、両親が日本にいる理由なのだということを。

今日、日本が必要としているものは、ヨーロッパの文化、思想、宗教などではありません。日本は、主イエスを必要としています。どんな技術の進歩も、巨万の富も、私たち人間の深奥の空虚を満たしてくれないことを誰でも知っているはずです。

一九六四年十二月一日、私たちは那珂湊から東京に引越しました。寂しい田舎から大都会に移ったものの、当時の住居はボロ家で、八ヵ所もの雨漏りがしました。しかし子供たちはここでもたいそうご機嫌でした。その後、集会所は二度広げられ、やがて現在の建物へと建て直されました。

一九六六年になって、私たちは、ドイツへ二度目の里帰りをしました。当時、リンデは六才でした。やがて、ドイツの滞在を終えて、日本に帰ってから、主イエスを救い主として信じ受け入

れました。リンデの救いの確信は、単なる知識や感情によるものではなく、ただ神のことばの上に確立されたのです。リンデは、幼い頃から姉や妹たちといっしょに、日曜学校に集いました。大いなる創造者であられる神の存在を信じ、聖書は彼女にとって一つの間違いもない神のことばとなりました。まだ幼かった頃、ルデヤ姉は、ドイツからリンデのために一冊の聖書を贈ってくださいました。

両親は子供たちに、主イエスのすばらしさを教える責任を持っています。幼年期は人の一生のうちで、最も豊かにみことばが蒔かれる純真な時期です。彼らには単純な信頼があります。理性はまだ大きな役割を演じていませんから、物事を疑うというようなことはめったにありません。両親は子供に十分な食物を与え、健康に育てればそれでよいと考えがちです。しかし、こういう安易な考えが間違っていることに気付く時、「万事休す」という実例が驚くほど多いのです。後年リンデは聖書を通して、悪魔の誘惑にうち勝つ土台が何であるかを知るようになります。彼女の救いの確信の土台になったのは、旧約聖書のイザヤ書のみことばでした。

恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。
わたしはあなたの名を呼んだ。
あなたはわたしのもの。
わたしはあなたを愛している。（イザヤ43・1、4）

主イエスは十字架の上で「完了した」（ヨハネ19・30）と叫ばれました。リンデは主イエスが、

「完了」してくださった、神にそむいているという人間の罪の完全な贖いを信じていました。罪の債務は、主イエスが支払ってくださいました。主が人間にとって「大切なこと」すべてを完了してくださった以上、もう人間が自分のカで解決しなければならないことは、何も残っていません。リンデは、素直に、成就された贖いのみわざに感謝しました。「私は永遠に主イエスのものとされ、私は愛されている」これが愛するリンデの確信であり、心からの喜びでした。

一九七五年一月五日、リンデは二人の婦人とともに、自分は主イエスさまのものとされたという自覚の表明として浸礼（全身を水に浸す洗礼）を受けました。浸礼は、彼女にとって古い自我の死と、主イエスに対する従順の表現であり、これからは、ただ主イエスのために生きていくという決意の表明でした。それからのリンデは、自分が救われただけでは十分でないこと、主は救われたすべての人を用いたいと願っておられること、そして、福音はすべての人々に宣べ伝えられなければならないことを、深く知るようになりました。

やがて成長したリンデは、軽井沢の修養会で、二、三十人の子供を引き受けて奉仕しました。赤ちゃんのおむつを取り替えたり、子供たちと寝て、二、三歳の子供がお手洗いに起きると一緒に行ってあげたりしました。子供たちもリンデが大好きで、福音を伝えるよい機会に恵まれていました。相手の心を理解して信頼関係を確かにしてから福音を伝えるべきである、ということを彼女は知っていたようです。リンデが、やがてドイツの看護学校へと去った後でも、彼女の名を聞くと目を輝かせる子供が少なくありませんでした。

ルデヤ姉が天に召された時、彼女の机の上には、リンデの写真が置かれていました。ルデヤ姉は、

最後の日までリンデのために祈って下さいました。私たちは、リンデの成長の陰には彼女の忠実な祈りがあったと信じています。リンデは、主イエスを体験として知り、さらにルデヤ姉にならって「私は大切ではない」という信仰の足跡にならうようになりました。

三　ドイツへの帰国

一九七八年七月二十四日、東京の大森にあるドイツ学園を卒業したリンデは、看護学校で学ぶために、妹のブリギッテとドイツへ渡りました。日本を心から愛していた彼女にとって、家族や友人と別れることはつらいことでしたが、ドイツでの勉強が終ったら、今度は宣教師として日本に戻り日本の友だちと一緒に町田市で伝道したいという願いを持って、日本を離れました。フランクフルト空港では、祖父のロルフ・ディーターと祖母のエリザベートが、車で出迎えに来てくれました。私たちの家は、フランクフルトから約二百キロ南にあるシュトゥットガルトのエヒタディンゲンにあります。フランクフルトからアウトバーンを通って、車で二時間ほどのところです。シュトゥットガルトは、ぶどう畑と森林の中にある大都会です。

リンデが三年間勉強して、看護婦となる決心をしたのは、将来、事務的な職場で働くのでなく人とのかかわりを大切にした生き方をしたいと願ったからでした。その願いを実現する道は、看

護婦になって、子供や病人の世話をすることだと考えたのでしょう。

リンデは、姉のウスラが勉強しているキルヒハイムの看護学校に入ることになっていました。ドイツでは看護学校に入学するには、予備訓練として六ヵ月間別の場所で働かなければならないことになっています。それは国の法律で定められているのですが、この訓練を通しての忍耐とか忠実といった人格形成が目的なのです。

リンデは、ミヘルスベルクで、クリスマスをはさんで九月から二月まで訓練を受けました。ミヘルスベルクは広く、緩やかに波打つシュバーベン・アルプの高原にあります。ミヘルスベルクの近郊にはガイスリンゲンという大きな町があり、この町はＷＭＦというステンレス製品の会社で有名です。日本のデパートでも、この会社の製品を見かけます。ミヘルスベルクは、自然の美しい、珍しい植物の多い土地で、広大な公園の中にはホテルのようなモダンな建物があり、ここで修養会が開かれます。リンデたち訓練生は、ここでいろいろな部署に配属されて、修養会に来ている人々に奉仕するのです。リンデの受持ちは台所でした。

この期間を通して、リンデは、どんな小さなことにでも、忠実に仕えることの大切さを学びました。大勢の人が住んでいる建物の中で、自分に与えられた仕事を忍耐強くやり通して、一日の規則正しい生活を、主イエスへの感謝のうちに過ごすためには、自分を無にすることが要求されます。もし、心の中で不平を言い、はるばる日本からドイツにやって来たことを後悔するようなことがあれば、すべてが無意味になってしまいます。つらいことがあることと、それを不平に思うこととは別です。つらいことを喜びをもって受けとめること、これこそ訓練であると言えましょ

う。要求されていることに自己を従わせることは、人生の偉大な訓練です。リンデにとって、喜びの根拠はみことばでした。問題に直面するたびに「わたしは決してあなたを離れず、またあなたを捨てない」（ヘブル13・5）という、主イエスのことばが彼女を力づけてくれました。主イエスが私とともにいてくださるという信仰が、自己中心的になりがちなリンデを慰めてくれたと思います。残念ながら、私はこの期間のリンデの生活を細かく知りません。

一月のある日、リンデは友だちとシュトゥットガルトのスケート場へ行きました。日本で彼女は一度もスケートをしたことがなかったのです。すすめられるままに、スケート・リンクに立ったのですが、すぐに転倒して頭を強く打ち、少し吐きました。そのため十日間入院しましたが、退院後もしばらく頭痛が続いたようです。

日本を離れ、ミヘルスベルクで一人になったリンデは、主イエスに頼るほかありませんでした。この期間中、彼女は好んで「ぶどうの木なるあなたのみもとにおらせたまえ」という歌を歌っていたそうです。「主イエスさまが私とともにおられ、私のうちに生きておられる」この確信が本当に自分のものとなる時、キリスト者はどこにいても喜びを持つことができます。ぶどうの枝が幹につながっているように、キリスト者は主イエスの体の一部です。主はおっしゃいました。

わたしは、ぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしも、その人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは、何もすることができないからです。（ヨハネ15・5）

冬のミヘルスベルクは雪が多く、その冬の寒さは相当に厳しいものです。訓練の終りが近づいた頃、リンデは次のように考えるようになりました。「一つの問題でも、自分で解決するのは大変難しい。大切にすべきなのは主の働きであって、私は幼な子のように主に信頼して、人のために生きてゆきたい」。こうしたリンデの霊的成長の背後には、ここで責任を持っているルツ・シャイブレ姉の影響がありました。寒い冬の間に、自然界の新しい生命が用意されるように、リンデはミヘルスベルクでの訓練を通して、将来彼女を待ちうけているであろう大きな試練に臨む備えをすることができた、と私は思います。

四　看護学校にて

一九七九年四月、リンデはキルヒハイムにある看護学校に入学しました。キルヒハイムは、ミヘルスベルクのあるシュバーベン・アルプの麓（ふもと）にあります。

キルヒハイムの看護学校は、ドイツでも屈指（くっし）の厳格な教育で有名な所です。この学校では、学生が一生懸命勉強しなければならないだけでなく、非常に厳しい規則を守らなければならないからです。土曜日から日曜日の夜にかけて自由時間が与えられますが、他はすべて共同生活なのです。遊ぶ余裕はなく、一年に一回、二週間の旅行があるのと、年に一度、二週間の休暇を取るこ

とが許可されるだけです。この休暇は自由に取っていいのですが、たいていはクリスマス期間にとっています。このように厳しいので、国家試験には多くの学生が合格します。

リンデは最初の日から、この学校の雰囲気が気に入ったようです。ドイツへやってきた目的をはっきり心に刻み、主イエスがともにいてくださるということを知っていた彼女にとって、この学校の規則は苦になりませんでした。それに、今やリンデは姉のウスラと同じ学校で学び、エリザベート校長先生の特別の配慮で、寮の六階の隣同志の部屋で共に生活することが認められました。（本来なら二年生のウスラは七階の部屋なのです）リンデにとってウスラと一緒に生活することは、心強かったに相違ありません。また学校の先輩としても頼りにしていました。

リンデは、夜遅くまで勉強しても、聖書を読む時間を確保しようと努めたようです。同級生の一人は、リンデが朝早く聖書を読むために起きていたと語ってくれました。

この夏、私たち家族はドイツに帰りました。八月には日本から何人かの兄弟姉妹がドイツを訪れました。この時リンデは二週間の夏休みを取り、久しぶりに会った日本の人々と楽しい交わりの時を過ごしました。八月末の一日を私たちはスイスのディアボレッツァ山で過ごしました。ディアボレッツァは、ヨーロッパで最もぜい沢なスキー場として知られているサン・モリッツの近くにあります。二九七三メートルのこの山の麓にはモテサジュ氷河が広がっていて、私たちはロープウェイを利用して山上駅まで上りました。山頂からはイタリアの山々が見渡せ、それはすばらしい眺めでした。はるかイタリアの山々を見ながら私は、天地を創造された神の全能と神の愛が私たちをとりまいている、という思いを禁じ得ませんでした。本書の表紙は、この時、妹のブリギッ

テが撮ったものです。いつものように明るいリンデでした。

十月には、最初の試験があります。この試験は、学生が看護学校での勉強と病院の訓練に耐える力があるかどうかをみるためのものです。リンデは、この試験にあまり自信がありませんでした。そこで、彼女は「イエスさまが私をこの学校で必要としていてくださるなら、必ずこの難しい試験を通してくださる」と信じ、「私はできるかぎりのことはします。でも最後のぎりぎりではイエスさまに信頼します」と祈りました。

リンデのクラスは「しゅろの木」という名でした。ヨハネの福音書十二章にはこうあります。

その翌日、祭りに来ていた大ぜいの人の群れはイエスがエルサレムに来ようとしておられると聞いて、しゅろの木の枝を取って出迎えのために出て行った。そして大声で叫んだ。

「ホサナ。祝福あれ。
主の御名によって来られる方に。
イスラエルの王に」（ヨハネ12・12、13）

ホサナ。キリスト者はよく笑うものです。リンデのクラスには、いつも明るい笑い声がありました。リンデの笑い声がクラス中に波のように広がっていきます。同級生たちは、今でも彼女のさりげないユーモアを忘れていません。

病気で進級できなくなった学生が、「しゅろの木」に入ってきました。その日、彼女はリンデにたずねました。「リンデ。クラスの人たちは私のことをこころよく受け入れてくれるかしら」リン

デは答えました。「もちろん大歓迎よ。でもあなたが『しゅろの木』でうまくやっていけるかどうかはあなた自身の心構え次第だと思うわ。私たちは、自分自身にうち勝つことを学んでいるの。あなたも同じことを学んで下さい」。

ある日、別のクラスが劇の練習をしていました。その劇の中には中国で伝道する一人の宣教師が登場するのですが、適当な衣装がなくてリンデに何か持っていないだろうかとたずねました。リンデが自分の洋服と日本から持ってきたものを提供しますと、クラスの人たちは「もったいない」と言いました。ところがリンデは「神さまのすばらしさを表わすために使うのですから少しも惜しくはありません。どうぞこれを使ってください」と答えました。その時からウスラとリンデは劇の練習のあるたびに出かけていくようになりました。そうすることによって二人は、目に見えないところでイエスさまに仕えたいと思ったのです。「ウスラとリンデは、どんな小さなことでもいつも喜んで奉仕してくれました」と、級友の一人が手紙の中で書いています。

また、リンデの召天の後、ある級友はこんなエピソードを書いてきてくれました。

「リンデはお祝いの飾りつけなど装飾にすぐれた才能をもっていました。そして機会があるたびに協力してくれました。でもだからといって得意になることはなくいつも控えめでした。人に喜んでもらえる雰囲気を作るためにリンデは努力しました。彼女は自分の賜物（たまもの）を主のために用い、それによって主に栄光を受けていただきたかったのだと私は思います。

また、ある時、みんなで食事の準備をしていました。大勢の人が一緒に仕事をすると色々な意見がでるものです。この時もそうでした。私はリンデが自分の意見を控えているのに気づき



1960年7月19日ラウフェン町の病院で誕生したリンデ。

リンデのアルバム



生後約10日目のリンデを祝福する会　シュトゥットガルト市内の家で。中央のルデヤ姉に抱かれている。

リンデの生まれたラウフェン町の病院。





リンデ 1 歳。那珂湊で。

リンデの祝福を祈って下さったルデヤ姉。▶



◀おまるで居眠りを始めたリンデ。

軽井沢鬼押出で遊ぶリンデ（左）とハイデ（中）ウスラ。





4 歳の誕生日のリンデ（右）。



2 歳。那珂湊の海岸で。



箱根の旅館で。ウスラ（左）と共に。



軽井沢で。4 歳のリンデ（右）とウスラ。

7 歳のリンデ。吉祥寺の古い家で。



那珂湊の家の庭で。姉のウスラ（左）と共に。





1975年1月5日、洗礼式の日。

婦人の友社の取材に応じて家族全員で。中央がリンデ。





11歳、振袖姿のリンデ。

いつもルデア姉の机上にあったリンデ（12歳）の写真。





軽井沢バイブルキャンプにて。前列左から４人目。

集会の男の子と遊ぶリンデ。





軽井沢バイブルキャンプで。中央左がリンデ。

いつも、臨時の母親役を。





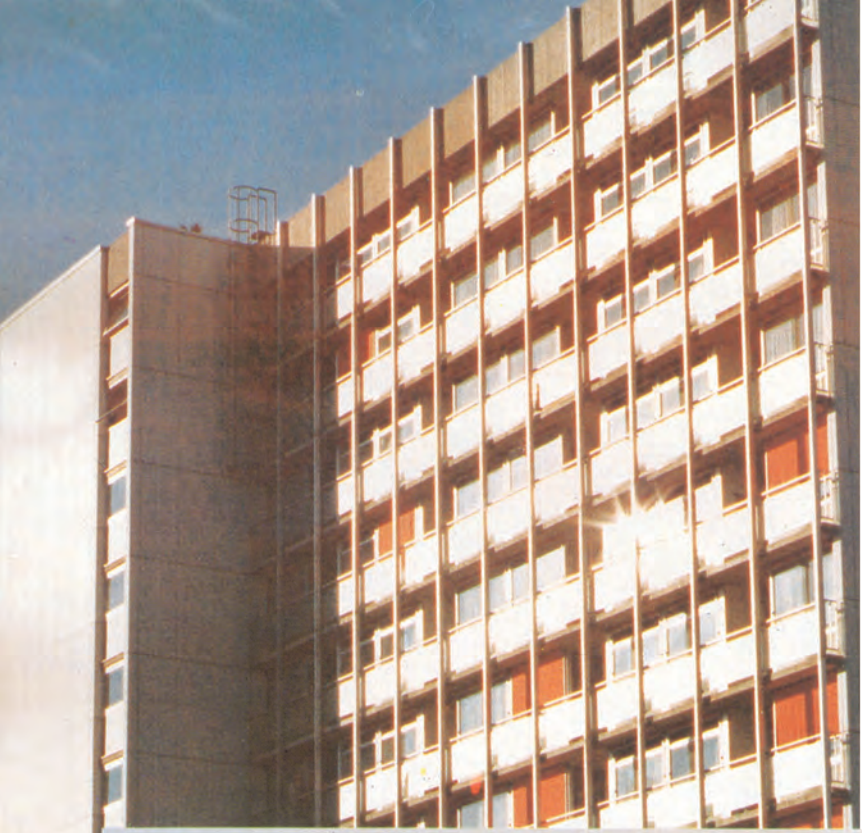
集会所の前で。エリコとナオミにせがまれて。

▼リンデの膝の上で多くの子供たちが成長した。

軽井沢で子供たちの面倒を見る。







キルハイムの寮。太陽の反射で輝いているのがリンデの部屋。



キルハイムの町。右手前は病院の一部。


HERZLICHEN
GLÜCKWUNSCH
ZUM GEBURTSTAG
SCHW. ELISABETH



看病する看護婦リンデ。

エリザベート校長先生の誕生日を祝うリンデ自作のポスター。▶

病床に横たわる身となったリンデ。



Kommet her zu mir alle, die ihr mühselig und beladen seid,
so will ich euch erquicken. Matthäus 11,28



いつも自然を見つめていたリンデ。その撮った写真。自筆のみことばは「すべて疲れた人。重荷を負っている人は、わたしのところへ来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」（マタイ11・28）

Ist jemand in Christus, so ist er eine neue Kreatur; das Alte
ist vergangen, siehe, es ist alles neu geworden! 2. Korinther 5,17



彼女が美しい花の自作写真によせたみことば「だれでも、キリストのうちにあるならその人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、すべてが新しくなりました」（Ⅱコリント5・17）

Herr Jesus, obgleich ich Dich noch nie mit meinen Augen gesehen habe, gilt Dir doch meine ganze Liebe, und Dir will ich mein volles Vertrauen schenken, obwohl ich Dich nicht persönlich vor Augen habe! Oh, mit welch unaussprechlicher, herrlicher Freude werde ich jubeln, wenn ich Dich sehen darf! Dann bin ich für ewig in Sicherheit!

Du bist die Auferstehung und das Leben. Wer an Dich glaubt, wird leben, auch wenn er stirbt, und jeder, der da lebt und an Dich glaubt, wird in Ewigkeit nicht sterben!

Das Gnadengeschenk Gottes ist ewiges Leben in der Gemeinschaft mit Jesus Christus, meinem Herrn!

Solange ich noch in diesem Leibe bin, bin ich noch nicht in meiner eigentlichen Heimat angelangt; sondern befinde mich in der Fremde, fern von dem Herrn. Ich tue hier meine Schritte im Vertrauen, und bin noch nicht zum Schauen gelangt. Aber ich bin getrost und möchte lieber diesen Leib verlassen und in meine himmlische Heimat gehen zum Herrn. Darum will ich alles dransetzen und voll Eifer sein, Jesus, meinem Herrn, wohlgefallen, bis Er kommt.

Meine Heimat und mein Ziel liegt im Himmel!

▲リンデの聖書の間から出てきたリンデの遺言。本文34ページ参照。

一日だけ帰室が許されたリンデ20歳の誕生日に。1980年7月19日。死の1ヶ月と1日前。







葬儀における主への賛美。



墓地での埋葬。

▶
天に召され、
魂のふるさとに
帰ったリンデ。

リンデの墓。



葬儀への招待状。

ICH habe dich je und je geliebt,
darum habe ICH dich zu mir gezogen
aus lauter Liebe!

7022 Echterdingen
Kelterrrainstr. 33

Wir sehen aber JESUS!

20 Jahre lang durften wir

UNSERE LINDTRAUD

bei uns haben. Nun ist sie uns vorausgeeilt und darf bei DEM sein, DEN sie gekannt und geliebt hat. Sie wußte sich geborgen in IHM und war bereit, "abzuscheiden und bei Christo zu sein, was auch weit besser ist." Wir freuen uns auf das baldige Wiedersehen.

Familie Gotthold und Minchen Bech

Die Beerdigung findet am Freitag, den 22. August 1980 um 13.30 Uhr in der Friedhofskapelle in Echterdingen, Plieninger Straße, statt.

Auf Wunsch Lindtrauds soll von Kranz- und Blumenspenden zu Gunsten des Saalanbaus in Tokyo abgesehen werden.
- Sonderkonto Saalanbau – Kreissparkasse Echterdingen 79 50 11, BLZ 611 500 23

病院で同室のメラニーと。



ました。彼女は自分の考え通りにしようとは思っていないようでした。意見の衝突が起こると彼女は静かに引きさがりました。それでも意見が一致しないので、リンデは笑いながら言いました。『おかしいわ。もうよしましょう。こんなことで争うなんて』。

それから、彼女の気前の良さは今も印象に残っています。でもそれは彼女が物の価値を知らないという意味ではありません。彼女には貴重なものを自分だけで持っていたいという欲がありませんでした。私のドアの前に贈り物が置かれていることがよくありましたが、そのたびに私は、リンデからのものに違いない、と直感するほどでした。リンデはすでに、朽ちることのない永遠の宝を集めることに成功していたのです」。

また、こんなこともありました。「しゅろの木」が遠足に出かけた時のことです。二時間ほど歩き、お茶の時間がありました。周囲の風景は大変すばらしかったそうです。しかし、帰り道は長い登り坂で、その上雨が降り出しました。リンデと級友の一人は、「頑張って歩こう」と言って互いに励ましあいながら、先頭を歩いていきました。二人は歌を歌いながら歩きました。「あなたが私を召してくださったその目標を、私の前に置かせたまえ。長くつらい道々、私をあなたのみ足跡からそらしたまいませんように」と。

長い時間歩いた二人はずぶぬれになっていましたが、「主イエスを見上げましょう」と言って励ましあいました。リンデは主イエスが、私たち人間のために歩んでくださった「道」について話しました。主イエスは全人類の苦悩をご自身の上に引き受けてくださり、エルサレム入城後、まもなく捕えられて、嘲られ、侮られ、そして捨てられたこと、それでもご自身を無にして口を開

かず救いの御わざを成しとげてくださったことについて話しました。主イエスを見上げることによって、二人は長い泥んこ道を歩き通しました。

五　希望かあきらめか

ヨーロッパのクリスマスは、日本の正月に当ります。リンデの学校でも、大多数の学生が休暇を取って、故郷へ帰ります。しかし一九七九年のクリスマスは、リンデには最も忙しい二週間となりました。彼女は夏の間に休暇を取ってしまったので、この期間中ずっと働かなければなりませんでした。仕事の合い間をぬって彼女はお母さんに誕生日のお祝いの手紙を書き送ったのです。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した。それゆえ、わたしはいつくしみをもって、あなたを引き寄せた」（エレミヤ31・3）

愛するママ。このみことばをもって、私はママに五十歳の誕生日のご挨拶を送ります。おめでとうママ！　主の豊かな祝福が新しい年の上にもありますように。右のみことばは、私が、一九八〇年のために与えられたものです。神の愛は永遠の愛。私は今日も、明日も、そしていつまでも、愛されています。「それゆえ、わたしはいつくしみをもって、あなたを引き寄せた」。

主が絶望状態にある私たちを見つけ出し、引き寄せてくださいました。これが救いです。その土台は、私たちの理解をはるかに超えた神の愛にあります。私に与えられたみことばはすばらしいですよ。

私のクラスの人たちが、クリスマス休暇から帰ってきます。私はとても待ち遠しく、みんなに会いたいです。私は夏に休暇をとりましたから、クリスマスは休みなしで働かなければなりませんでした。

ヨシコによろしく。忙しくて手紙を書く時間がありません。その代り、彼女のために祈っています。たくさん勉強することがあります。近いうちに一つのメッセージを準備しなければなりません。時間がとても必要です。私は今、パパのお仕事がよくわかります。そして、パパの気持がよくわかるようになりました。愛するママ、夏に……会うまで！　あなたのリンデ。

妻の誕生日は一月八日です。三月になると、リンデは私の誕生日のためにもみことばを送ってくれました。

「わたしは死んだが、見よ、いつまでも生きている。また、死とハデスとのかぎを持っている」（黙示録1・18）愛するパパ。誕生日おめでとう！　主の豊かな祝福を祈っています。日本での誕生日が楽しいものでありますように。右のことばを贈ります。あなたのリンデ。

夏七月に、長女ハイデがドイツで結婚することになっていました。私たちは、六月下旬に、ハイデ、スーシーとともに、ドイツへ行く予定でした。また、吉祥寺の集会から、幾人かの兄弟姉妹が少し遅れてやって来て、結婚を祝ってくれることになっていました。しかし私たちは、いつ発つべきか決めかねていました。私たちは、人生に行き詰まり、苦しみの中で救いを求めている人を大勢知っていました。この人々のために、一日でも多く日本で奉仕したいというのが、私たち夫婦の願いでした。そのような時、リンデからの手紙が届きました。私は、彼女の手紙の中に見い出した一言で、すべてを決定したのです。「私は、みんなに会えることがうれしくて、夜も眠れないほどです」。私自身の心の中に、娘に会えるという喜びが生まれました。

一九八〇年六月二八日、私たちは、西ドイツのフランクフルト空港で再会しました。フランクフルトからシュトゥットガルトへ往復四百キロ、四時間のドライブでした。車の中でリンデは実に陽気でした。私たちは何も知らなかったのですが、この時、すでにリンデは大変な腹痛を我慢して、私たちを迎えに来てくれたのでした。

私たちが到着した翌二九日、リンデは排泄物の中に黒味がかった血液を見つけました。彼女は姉のウスラに「私はがんだと思う」と告げました。「絶対に、誰にも言わないで」と念を押しました。

しかし、七月三日、ウスラはキルヒハイムの学校から電話でエヒタディンゲンの私たちに、そのことを伝えてきました。これを聞いて、私たちはすぐに病院へ行き、エリザベート校長先生と相談しました。同夜、リンデは彼女の働いていた病院に入院しました。

病院での検査は思ったより長引きました。妻はウスラに、今までリンデの様子に何か変わったことがなかったかと尋ねました。ウスラは、リンデがソファーから立ち上がる時、腰を真直ぐにすることができないで前かがみになって歩いているのを見て「どうしたの」と聞いたことがあったようです。すると、リンデは「日本のおばあさんの歩き方よ」と答えたそうです。それから、私たちがドイツへ着く一週間前に、四十度の熱が出たとのことでした。リンデは殺菌用のクレゾールで皮膚アレルギーになっていたので、手から雑菌が入ったのではないかと周囲の人たちは考えていたのです。それに、がんは発熱しないことが多いらしく、誰もリンデががんではないかと疑った人はありませんでした。

検査はいっこうに進みませんでした。リンデの腸は全く物が通らない状態でした。医師はがんだろうという診断を下していましたが、それを裏付けるための検査ができませんでした。方法は沢山あるらしいのですが、リンデの場合、何一つ役に立ちませんでした。しかし私たち夫婦は初めから、リンデががんであり、それも末期的症状にあるということを認めざるを得ませんでした。入院した翌日のレントゲン検査の結果を姉のウスラが見て、自分のテキストの写真と照合してみたのです。結果は明らかでした。私たちはこのことを初めから聞いていたのです。

入院した初めの頃、リンデは手術が終ると元気になり、同級生たちと北海のアムルム島（北フリジヤ諸島）へ修学旅行に行けると思っていました。今にして思うと不思議なことだと思います。まもなく天に召されようとしているリンデの病状は、私たち親の目にさえ耐えがたいものでした。しかし、若い娘にとって、そう簡単に死がやって来るとは想像できないことだったのでしょう。

両親のいないドイツで、肉体の苦痛に耐えながら、ついにウスラに真実を告げるまでの日を、彼女はどんな気持ちで過していたのでしょうか。妻は、リンデがすぐに自分の痛みを訴えなかったのは周囲の人たちに迷惑をかけたくなかったからだろうと思っています。それ以外に考えられないことでした。

もっと早く、リンデが痛みのことをウスラに伝えていたら、手術は成功し、助かったかもしれないという考え方もあるでしょう。しかし、二十歳のリンデにとって、全体の状況を把握することは難しいことでした。そのリンデの幼い部分、弱さに、主なる神の働きが現わされたのです。

いずれにせよ、当時のリンデのことを書くには、資料がほとんど残されていません。ただ、私がドイツへ帰国してから、私が見たことだけは、はっきりと伝えなければならない責任を感じています。なぜなら、そこに主の栄光が現わされていることを、私がこの目で見たからです。

増し加わる痛みと、いらだたしいほど進まない検査の中で、リンデはもう仲間と一緒にアムルム島へ行けないと感じていました。彼女はこの修学旅行をあきらめ、すべてを主イエスのみこころに委ねました。しかし新たな試練が与えられました。もしこの病気が長引けば、進級できず、大好きな「しゅろの木」のクラスを離れなければならない……これはリンデにとって衝撃でした。悪魔はリンデを絶望させようと、あらゆる攻撃をしてきました。確かに、それはしばしば、リンデの心に暗い陰を落そうとしました。しかし、そのたびに「主、わたしの神はわたしの闇を照らされます」（詩篇18・28）というみことばを彼女は体験しました。この進級の問題も、主の御手に委ねることによって、心から慰められていたようです。

この頃のリンデを知っている内科の看護婦さんが、次のような内容の手紙をくださいました。

「リンデは重い病気で苦しんでいましたが、その顔には平安があり、主の愛に輝いていました。病院で働いている私たちには、リンデの明るさを見ることは喜びでした。彼女は、ベッドでいろいろなものを作って、皆にあげました。ある日、私が彼女の部屋に入ろうとすると、リンデは、素早く手芸の材料を毛布の下に隠して、『まだ見ては駄目よ』と言って、ニッコリ笑いました。外科に移される前、私たちは、一人一人手作りの贈り物をもらいました。私は、彼女が自分で撮った写真と、みことばを書いた四枚の美しいカードをもらいました。リンデの心づかいは、私たちに、大きな喜びと慰めを与えてくれたものです」。

七月一七日。リンデは、短い時間でしたが、自分の寮の部屋に帰ることが許されました。リンデの部屋は大きな公園をはさんで病院の反対側にあり、歩いて五分ほどの所にあります。私たち家族もそろって、二日早い二十歳の誕生日を祝いました。リンデと二人になった時、私は彼女に病気が大変重く、難しい状態であることを伝え、ともに祈りました。外出の許可は、リンデの症状が悪化したため、誕生日のお祝いを二日早めて、秘かに別れをするためのものでした。

七月二四日。何の検査もできないままに、手術が行われました。エリザベート校長先生が手術に立ち会ってくださいました。私たちは、決してこの日のことを忘れないでしょう。私たちは、リンデと医者のために祈りました。すべてを神様の御手の中に委ねました。手術後、エリザベート先生は私たちに電話を下さいました。「リンデは、永遠のために成熟した実です」と。それは、リンデがこの世を去る備えができている、心の整理ができているという意味でした。エリザベー

ト先生の知らせは、私たちにとって本当につらいものでした。リンデの姉や妹たちは隣室にいましたが、みんな泣いて、誰一人話すことができませんでした。

手術後、私たちは外科医長から直接、「医学的に見て、回復の見込みが全くない」と言われました。そして彼は、誰が真実を伝えるべきか、あるいは、そもそも真実を伝えるべきかどうか、とたずねました。私はどう話したらよいか分からず、医長から伝えてくれるように頼みました。

それから、妻と私は特別診察室でリンデに会いました。リンデは私たちの顔を見るやいなや、「悪いところは全部とれましたか」と聞きました。私は、「リンデ……残念だけど、全部はとれなかった」としか答えられませんでした。看護婦の卵であるリンデは、私の返事から潰瘍が悪性であるばかりでなく、手術が遅すぎた、ということを悟りました。実際、病状のあまりのひどさに執刀医はほどこす術もないままに切り開いた腹部をそのまま閉じざるを得なかったのです。腹部全体ががんにおかされていました。

私たちは医長が約束を果してくれるのを待っていました。彼は、手術を受けて衰弱しているリンデにはショックに耐える力がない、という理由でなかなかリンデに正確な病状を説明してくれませんでした。リンデは、私たちに何度も、「本当のことを言って下さい」と頼みましたが、私たちは「あまりよくないようだけど、はっきりしたことは、外科医長が説明してくれますよ」と言うしかありませんでした。約束した以上、私の方から先に話せば医長に対して失礼になります。

手術後、医長は何度もリンデの部屋に来てくれましたが、本当のことを話す勇気がありませんでした。それは、彼が主イエスを知らず、この世の生がすべてであり、主の救いを知らなかった

からです。しかし、ある晩、とうとうすべてが明らかになる時がきました。

八月の初め、私はデュッセルドルフの集会へ行きました。ここから私は妻に電話をし、医長はリンデに真実を話してくれたかどうかたずねました。妻の答えは、「いいえ」でした。私は妻に、本当のことを言わないでリンデを苦しめることは、リンデにとっても私にとっても平安がない、と話しました。その日私が妻に電話した後、エリザベート校長先生から妻に電話がありました。その時、妻は私の気持を彼女に伝え、私たち夫婦はリンデに真実を伝えたい意向であると話しました。

その晩、エリザベート姉はリンデのお見舞いに行ってくれました。その時、リンデは姉妹に、「あなたがたはみんな憶病者です。校長先生、私は医長からでなく、あなたから本当のことを、聞きたいのです」と言いました。

リンデにとって、一番つらかったのは、宙ぶらりんのどっちつかずの状態でした。彼女はすでに自分ががんであることを知っていました。しかし、まったく望みがないということは、まだ知りませんでした。リンデは、エリザベート先生の答えによって、不確実性から解放され、召されることをそれまで以上にはっきりと意識して、その準備をしたかったのです。そのために、どうしても本当のことを知りたかったのです。こんなリンデの心情を、エリザベート先生はよく理解して下さいました。先生はリンデの頼みを拒むことができず、またその日の妻との電話を思い出して、リンデにすべてを語ってくださいました。真実だけが魂を自由にします。リンデは一言、こうたずねたそうです。「パパとママは、そのことを知っていますか?」「知っています……」

「それなら、私は、まもなくイエスさまのみもとに行くことを喜んでいます。ただ私が、主のために少ししか実を結べなかったことが、とても残念です」とリンデは心から言うことができました。

その日の夜、妻はリンデを見舞って、彼女があまりにも明るく元気でいるのに驚きました。妻はリンデが、いまやすべてを知ってしまっており、しかもなお、これほどの慰めを受け、解放され、幸せであり得ることが信じられないほどでした。

神はリンデが再び日本に帰って、町田市で福音を伝えることを許されませんでしたが、リンデは、神の思いが自分の思いよりもはるかに高く、すばらしいということを信じ、主イエスに愛され、守られていることを心から喜んでいました。リンデはかつて、自分のノートに「人格者とは死を直視することのできる人です」と記しました。また、リンデ自身も主イエスを通して、死を直視することになりました。

こうしたリンデの態度が周囲の人々の心を動かしました。リンデと同室だったネーゲル夫人は自分のことしか考えることのできない人で、入院して来た時は、自分の病気のことしか頭にないという状態でした。しかし、夫人はリンデを通して人生を深く考えるようになりました。夫人は自分の罪を告白し、主イエスの救いを感謝するようになりました。彼女の人生はその時から、まったく変えられました。

トイフェルさんという神から遠く離れている婦人も、リンデの態度に心を動かされました。トイフェルさんは、リンデが激しい痛みに苦しみながらも、希望と喜びに満たされているのを見て

こみあげる涙をおさえることができませんでした。彼女が別の部屋へ移っていく時、リンデは、「トイフェルさん。イエスさまは、あなたを愛しています」と呼びかけました。トイフェルさんは困惑して言いました。「あなたがイエスさまのところへ行ったら、私からもよろしく伝えてくださいね」この婦人は他にどう答えたらよいのかわからなかったのです。その後、この婦人の顔は別人のように明るくなったと聞いています。

ある晩、夜勤の看護婦さんは、リンデが、「主イエスさま。あなたのなさることは完全です。どうか、この部屋に入ってくるすべての人を祝福して下さい」と祈るのを聞きました。リンデは残された短い時間の中で、主イエスのために実を結び、人を主のみもとへ導きたいと願いました。

自分の病状を知らされた時、リンデは二、三日で主のみもとに行けるものと思い、またそう望んでいたようです。しかし、事態はそれほど早く進みませんでした。彼女はある時、私にたずねました。「どうして私はすぐに天国に行けないの」私は、「リンデ。おまえはもう少し待たなければなりません。イエスさまがお呼びになるまで」するとリンデは、「どうしてイエスさまは、早く私を呼んでくださらないのでしょう」と言いました。

リンデは次のように言ったことがあります。「私のために看護婦さんたちは苦労しなければなりません。パパの伝道旅行の計画は全部だめになり、両親は毎日病院に来なければなりません」。

しかし、リンデは主の恵みによって、自分の思いは大切でない、主の思いがなりますように、と祈るようになりました。また、次のようにも祈っていました。「主イエスさま。私は、あなたがよしとされる時までこの地上で頑張ります。どうかすべてのことを通して、あなたのために、実

を結ぶことができますように」。

日本から八人の兄弟姉妹がドイツに着く日が近づいていました。このような状態で、訪問客を歓迎することは、彼女にとって容易なことではありませんでした。彼女は苦心して「ようこそ。よくいらっしゃいました」と書いたカードをつくり、病室の入口に貼りました。

六　目的地に達した

「しゅろの木」の修学旅行の前日、クラスの人たちが病室を訪問してくれ、次のような歌をお別れに歌ってくれました。「太陽なるイエスは輝く光、壁を貫く喜びです。主なる神に不可能はない。主は、私に良くしたいと望んでおられる。ただ主によってのみ私たちは幸せとなり、主のみもとに安らぐことができる……」。リンデも同級生たちも、この地上で再び会うことはないと思っていました。しかし、彼女たちは、やがて主イエスさまのみもとで永遠に一緒になれることを確信していました。でも、若い多感な彼女たちにはこの別れは生やさしいものではありませんでした。毎日、アムルム島から沢山の手紙がリンデのもとに送られてきました。ある日、次のような聖書のみことばが送られてきました。

神が私の味方であることを私は知っています。（詩篇　56・9）

神のみことばは、リンデにとって慰め、力でした。リンデは、主イエスが自分の味方であることを確信していました。毎日、痛みと強い薬によって、もう自分で手紙を読むことができず、私たちが読んでやりました。特に、聖書のみことばがリンデを力づけたのです。

私の心の思いが神のみこころにかないますように。
私自身は、主を喜びましょう。（詩篇 104・34）

主イエスは私たちのために生きておられる、イエスさまは、地上に私一人しかいないかのように、私を愛していてくださるということを知っていたリンデは、苦しみの中にあっても「私自身は、主を喜びましょう」という決意に忠実でした。彼女は、主に完全な信頼を置いていました。また、主が、決して失望させない方であるということを知っていました。

点滴に混ぜられた痛み止めのために、リンデはほとんど目を開けていることができなくなりました。しかし、いつも「私は神の栄光を見る」と信じていました。そして、このような衰弱した状態の中にあっても、リンデは一つの願いを持っていました。それは、私が日本から持っていったスライドを見ることでした。私は吉祥寺の集会における主の働きと家庭集会の様子を撮ったスライド約四〇〇枚を、ドイツでの伝道のために持って行きました。リンデはそのことを知っていました。

リンデの心は、再び帰ることのない日本に向けられていました。ある日、リンデは私に、どうしてもスライドが見たいと言いました。私は「リンデ、スライドを見るには一時間以上かかるん

だよ。ちょっとだけでも目を開けているのがつらいおまえには無理だよ」と言いましたが、リンデは聞きいれませんでした。私は無理とわかっていましたが、スライドを映写しました。ここに奇蹟が起こったのです。リンデは初めから終りまでスライドを見通しました。

スライドを見ながら、リンデは泣いていました。愛する日本の子供たち、大勢の友だちや知り会いの人々、また、まだ主イエスを知らずそのために彼女が何年も祈り続けてきた人々を目のあたりに見て、涙をおさえることができませんでした。

死ぬと知っても泣かなかったリンデ。彼女にとってこの地上を去ることは、主イエスとともになることであり、喜びでした。しかし、そんなリンデも多くのなつかしい顔を見た時、こみあげてくる涙をどうすることもできませんでした。

リンデは、永遠の天のふるさとについて話してもらうと、幼な子のように喜びました。ある日アイドリンゲン姉妹会の一人の姉妹が、カードを持って見舞いに来てくれました。その夜リンデは、アムルム島のエリザベート校長先生に電話をした時、このカードの言葉を読みました。

「もう少しの時です。その時、勝利が与えられます。
その時、すべての戦いは止みます。その時、私はいのちの小川を楽しみながら、
とこしえに、イエスさまと語り合うことができます」

二日後、校長先生から次のような手紙が届きました。

愛するリンデ。あなたはまもなく主イエスのみもとへ行きます。そのことを、あなたが嘆き

悲しんでいない様子に、私たちは嬉しく思っています。もし悲しむなら、それは他の人にとって重荷となるからです。あなたが永遠に主イエスと語りあうことを許され、それを待ち望んでいることを、私たちも嬉しく思っています。そうしたあなたの態度は、私たちが奉仕することに、また私たちがこの世を去る時のためにも、大きな助けとなります。

私たちは、あなたを失いません。ただ、あなたの方がひと足先きに行くだけです。私たち、およびあなたの同級生たちは、あなたと同じように、主に仕えたいと願っており、主イエスのみそば近くにいたいと願っています。

建築家で集会場のデザインの仕事をしているリンデの友人は、リンデに回復の見込みがないと聞いて、「しかし私たちはイエスを見る」という言葉を書いたカードを持って、見舞ってくれました。このカードはリンデの枕元に飾られました。みことばがリンデを絶えず励まし、力づけてくれました。

私は知っているからです。それは、私がどういうばあいにも……生きるにしても死ぬにしても、私の身によってキリストのすばらしさが現わされることを求める私の切なる願いと望みにかなっているのです。私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。実はそのほうがはるかにまさっています。（ピリピ　1・19、20、21、23）

リンデは死が決して最後でないことを確信していました。死ぬことは天の故郷に帰り、永遠に主イエスとともになることです。

主イエスとともに歩む人は、痛みながらも喜ぶことができます。痛み止めの薬によって、絶えず、眠けと戦わなければなりませんでしたが、一度も不平を言わなかったリンデは、主の恵みをほめたたえる器となりました。目を開いている時は、聖書を読んでもらうか、祈っているかのどちらかでした。

人間的に言えば、リンデは深い闇、望みなき状態にいましたが、彼女は預言者ミカの確信を自分のものにしていました。

やみの中にすわっていても、
主が私の光であるからだ。（ミカ　7・8）

主イエスはリンデの支え、希望、平安、喜びでした。リンデを訪ねてくれた方々はみな、「主イエスは生きておられる。リンデにとって臨在したもう主イエスがすべてである。ここに永遠がある」と感じました。苦痛、呼吸困難にもかかわらず、神の平安はリンデから一度も離れませんでした。

わが神の大いなる平安。何という静けさでしょう。
主は私のすべての思い煩いを取り去って下さる。
あらゆる罪を洗い聖めて下さる。

リンデの死が近づいた時、エリザベート校長先生はリンデにたずねました。「あなたはウスラにどんな言葉を残したいのですか」。リンデは「主があなたの助け手となります」と答えました。また、妻はリンデにたずねました。「リンデ、パパとママがここにいることがわかりますか」リンデはうなずきました。妻がさらに、「リンデ、ほかには誰がいますか」と聞くと、「主イエスさまです」と答えました。

最後の夜、苦しみはリンデにとって耐え難いものとなりました。リンデは、「主イエスよ。主イエスよ」と繰り返し言い続けていました。それから、リンデは念願の目的地に到達しました。リンデは主イエスのみもとに帰りました。

何とすばらしいことでしょう。
主の愛によって御国（みくに）に運ばれた私。
その私は、永遠に、主の栄光をほめたたえる。
主よ、あなたの導きは何と幸いなのでしょう。

八月二十日午前三時、リンデは私たちの腕の中で召されました。花婿なる主イエスといっしょになるために、リンデは急いで主のみもとにとびたちました。妻と私は、主がリンデをみもとに召してくださったことをともに感謝しました。リンデが、主イエスのみもとに行くことを、この上もなく喜んでいましたから、私たちの心は軽やかでした。

七　葬儀の通知とリンデの遺言

リンデが召されたことを知らせるカードに、私は彼女の標語を載せました。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した。
それゆえ、わたしはいつくしみをもってあなたを引き寄せた」（エレミヤ　31・3）

それから次のことばを加えました。

「しかし、私たちはイエスを見る」

二十年間、リンデは私たちに託されました。いま、リンデは私たちよりひと足先に天のふるさとに帰り、リンデがよく知り、心から愛してやまなかった主のみもとにいることを許されています。リンデは、この世を去る用意ができていました。また、この世を去って、キリストとともにいることの方が、はるかにすばらしいと確信していました。私たちは、まもなく再会できることを喜んでいます。

リンデが召された後、妹のスーシーはリンデの聖書のあいだにはさまれた一枚の封筒を見つけました。その内容は、私たちにとって一種の遺言と言えるものでした。

主イエスさま。たとえ肉眼であなたを見ていないにしても、

私は心からあなたを愛しています。
そして、たとえ個人的にあなたを見ていないとしても、
私はあなたに全き信頼をおきます。
この目であなたを見ることが許される時、なんとすばらしい、
言葉にならない喜びで、歓呼の声をあげるでしょう。
その時、私は永遠に安全な場所におかれます。
あなたはよみがえりであり、いのちです。
あなたを信じる者は死んでも生きるのです。
そして、生きているあなたを信じるものは、だれでも永遠に死ぬことはありません。
神のたまものは、私たちの主イエス・キリストとの交わりにおける永遠のいのちです。
私はまだ、この肉の体にとどまる限り、本当のふるさとに到達していません。
私はまだ、主から離れている旅人のような状態におかれています。
私は主と顔と顔とを合わせていませんが、信仰によって歩み続けています。
しかし、私は安らかです。
願わくば、この肉の体を去って私の天のふるさとへ行き、主のみもとに行きたいと思います。
ですから私は、主が来られるまで、主に喜ばれるように、
すべてのことを一生懸命にやりたいと思います。
私のふるさとと、私の目標は、天にあります。

八　葬式か結婚式か

一九八〇年八月二十日、リンデは天の故郷に帰ることを許されました。リンデの病室は空部屋になり、住居として用いていた寮の部屋も整理されてしまいました。彼女は、もはやこの地上にはいないのです。

しかし、この地上に残された人々が、彼女の死を通して実を結ぶようになるために、私たちの中のリンデは、今もなお語り続けています。葬儀の後、その雰囲気の明るさを感じて、参列者の一人が思わずこう言ったのです。「一体、今日は何があったのですか。葬儀ですか。それとも結婚式ですか」と。日本の代表的キリスト者である内村鑑三は娘の葬儀の時、「これは葬儀ではない。私のルツ子は、今日花婿であるイエスさまの花嫁となったのです。これはルツ子の結婚式です」と大きな声で叫びました。これを聞いた、矢内原忠雄、藤井武、その他の大勢の参列者たちは、一生忘れることのできない感銘を受けたということです。

キリストは死を滅ぼし、福音によって、いのちと不滅を明らかに示されました。

（Ⅱテモテ　1・10）

「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげは、どこにあるのか」神に感謝すべきです。神は私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくだ

さいました。（Ⅰコリント　15・55、57）

私は、自らリンデの葬儀の司式を取り行ないました。それは参列者の一人の方が言ったように結婚式と呼ぶにふさわしいものでした。そのことをわかっていただくために、式の次第をご紹介したいと思います。なお、他の章と一部内容が重複するかと思いますが、あえて、そのままにしておきます。以下、「」の中は、私の言葉です。

式は、まず祈りによって始まりました。

「愛する主イエスさま。あなたが、今ここに集う私たちの真中にいてくださり、私たちの心を賛美と感謝で全く満たしていてくださることを心から感謝します。特にこの数日間、あなたの大いなる御(み)わざを現わしてくださいましたことを感謝します。

今日の集いを通して、私たちが、あなたご自身が甦(よみがえ)りであり、命であられることを知って感謝します。あなたは『わたしを信じる者は、死んでも生きる』と言われました。

今、私たちのリンデが、あなたのみもとにいることを信じて、感謝いたします。さらに、主イエスよ。あなたが、私たちの心を支配し、御自身を豊かに体験させてくださり、私たちの心に、ほんとうの喜びと満足を与えてくださる方であると教えられ、ただ感謝するだけです。

主の御名によって祈ります。アーメン」

祈りが終ると、参会者の全員によって、聖歌六四一番が賛美されました。

「リンデが、ドイツに帰国する前に集っていた、吉祥寺キリスト集会の中高生クラスからよせられた弔電をお読みいたします。

『神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。（黙示録　21・3、4）

私たちは、愛するリンデが、天に召されたことを聞きました。今、私たちの心には、深い痛みと悲しみがありますが、やがて天国で再会できます。ですからこの痛みは一時的なものです。ハレルヤ主を讃めよ』」

そして、リンデが召される五時間程前に、リンデの枕元で歌ってくださった歌を、同級生の皆さんが賛美してくださいました。

主なる神は、すべてのすべてとなられる。
その時、もはや苦しみも悩みも涙も迫害もなく、弱い者に対する抑圧もない。
その時、主は死の力を滅ぼし、もはや孤独な者もいない。隣人を軽蔑する者もいない。
その時、いかなる罪によっても引き裂かれない。

いかなる病気によっても衰弱させられない。
もはや、いかなる重荷にも圧迫されない。
その時、あらゆる問いは過ぎ去り、あらゆるあこがれは静められ、
あらゆる生活の苦しみや切迫から解放され、永遠に満たされる。
その時、主なる神は、すべてのすべてとなられる。

「愛する皆さん。私たちは、今日悲しむために集ったのではありません。主をほめたたえるために、ここに集っているのです。主イエスは、賛美を受けるにふさわしい方ですから。数千年前、ヨブは、主を賞賛して、次のように言いました。

主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。（ヨブ記　1・21）

ヨブは、全財産、子どもたち、助け手である妻、友人、健康、これら一切のものを一瞬のうちに失いました。それにもかかわらず、ヨブは、神への不平不満を言わず、主なる神の完全な愛を信じて疑いませんでした。彼は、主なる神の導きを理解することができませんでした。しかし、神を崇拝し続けることができたのです。同じく、ヨブ記にはこう記されています。

私の造り主である神は……夜には誉め歌を与える……方。（ヨブ記　35・10）

預言者ミカは、次のように証ししました。

私は……やみの中にすわっていても、主が私の光である。（ミカ書　7・8）

リンデもまた、次のように証ししました。「私の病気が、たとえ直らなくても、闇の中にすわって、どのような逃れ道を見い出すことができないとしても、主イエスは、私にとってすべてのすべてなのです」。もし、リンデがこの場にいるなら、彼女はこう言うでしょう。『御国での主イエスさまとの生活はすばらしいですよ。あなたも天国に入りたくありませんか。イエスさまを信じて、従ったことが、今、報われました』と。

主イエスを、まだ個人的に知らず、主イエスさまを心から愛することのない人、主イエスのため実を結びたいという願いを持たない人の人生は何とみじめなものでしょう。生ける神は今日も夜にほめ歌を与えようと望んでおられるのです。私は、聖書の中の『使徒の働き』に記されているパウロとシラスのことを想い出します。

真夜中ごろ、パウロとシラスが神に祈りつつ、賛美の歌を歌っていると、ほかの囚人たちも聞き入っていた。（使徒　16・25）

今日もなお、真夜中（絶望的状態）にあって、祈りと賛美を神に捧げる時、私たちの周囲にはそれに耳を傾ける多くの人がいるのです。夜には、ピリピの獄舎が夜のとばりの暗闇に閉ざされていたように、パウロとシラスの心の内にも絶望の闇が覆ったのです。なぜなら、彼ら二人は正しい道を歩みました。彼らは、忠実に主イエスに従っていました。また彼らは、最も良

い目標を持っていました。それに、ただ主イエスの栄光が現わされることだけを願っていたからです。しかし、その結果は、牢獄の中でした。

時は夜、あたりは暗闇が支配していました。彼らは獄舎に入れられる前鞭（むち）で打たれました。当時、鞭打ちの刑は、最も恐ろしい残酷なものとされていました。皮の鞭の中には、鉄の釘が縫いこまれていて、打たれると背中が裂けたのです。その後、彼らは、暗闇と暗黒が支配している牢獄に投げ込まれました。

この時の二人には『なぜ、このようなことになるのか』という深刻な、しかも答えなき問いが湧き上ったことでしょう。『私たちは、なぜに鞭打たれ、投獄されるのか。ただ主イエスに仕え、福音を宣べ伝えたい、と願っただけではないか。それなのに、こんなひどい目に会い、恐ろしい暗闇に投げ込まれるとは。主イエスは、どうしてお許しになるのだろうか……』

夜、暗闇、絶望……。

これらのことは、耐えぬかねばならず、忍び通さねばなりません。二人の囚人は、力なく、望みなく、哀れなものでした。彼らは、一片の勇気もなくしてしまったのです。しかし、ただ一つだけ、できることがありました。彼らは主なる神の御手に自らの運命を委（ゆだ）ねたのです。そして、祈りました。すると、考えられないことが起こったのです。ついに、闇が光に変わったのです。とはいっても、獄舎は以前と同じく、まったく真暗でした。でも、彼らの心と霊は、闇（絶望状態）の中で神のご臨在を体験して、輝き出したのです。そして、パウロとシラスの二人の囚人は、何と、喜びの声で賛美の歌を歌い出したのです。

彼らの心の中に光が生じました。鞭打たれた傷跡は生々しく、痛みは増し加わり、相変わらず足枷につながれ、裂けた背中の痛みは疼いていたことでしょう。しかし、今までと状況は一変したのです。彼らは『なぜなのか?』と問うことを止めました。彼らは、自ら運命を理解することができませんでしたが、神の臨在を体験した時、疑問は信頼に取って代わったのです。彼らは、ただ、彼らの主なる神は完全な方であり、主なる神の導きもまた完全だということを確信しました。

主なる神を愛する者は誰でも『すべてのことが相働いて益となる』ということを知っています。私たちの主なる神は完全な方であり、主なる神の導きも、また完全ですから、一時的には不安で耐え難いようなこと、理解不可能なことがあっても、後になると『私たちは、主の最愛の子であるばかりでなく、主が常に最善のものを私たちのために備えていてくださる』ということが、わかるようになるのです。ですから、この二人の囚人は、暗闇の獄舎の中で主なる神を礼拝することができました。賛美の歌声が獄舎に響いたのです。

外的には何の変化もなかったのですが、彼らの目は主なる神に対して開かれたのです。苦しみの人主イエス、私たちの罪のため身代りとなって屠られた主イエスに対して、新たに心の目が開かれたのです。主イエスは、あたかも避雷針のように、私たちが受けるべき神の怒りを、ご自身に受けてくださいました。主イエスは、私たちの罪のため、罰せられ、呪われ、罪そのものとされて、十字架上で死なれました。この主イエスこそ、賛美と感謝を受けられるのにふさわしい方なのです。

絶望の真夜中に賛美と感謝を捧げることができるのは、人間の力を遥かに超えるものです。人の力の及ばない所で、聖霊なる神は成してくださいます。聖霊が成してくださる時、不可能なことは可能となるのです。その時、人は再び祈ることができ、主イエスの御手に自らを委ねることができるのです。人は『私は、なぜあなたがこのようにお導きになるのか、もはや知ろうとは思いません。また、何ものをも要求したいと思いません。なぜなら、あなたが、すべて最善をなしてくださるからです。また私は、この状態を変えてくださいとも願いません。しかし、唯一のことを願います。どうか、あなたの御臨在を現わしてください』と祈ることができるのです。

このような態度を主なる神に対してとることは、何と祝福に満ちた賜物でしょうか。主なる神に、いろいろなものを求めるのではなく、ただ主ご自身をよりよく知りたいと願うことこそ大切なことなのです。

主よ。私はただあなただけを慕います。あなたのほかに何もいりません。

あなたは私にとってすべてです。

たとえこの身が尽き果てるとしても、あなたのほかに、私はだれをも望みません。

リンデへの私たちの願いもまた、『主よ、リンデにとってあなたの臨在がすべてとなり、彼女があなたをよりよく知ることができますように』ということでした。そして、神はすべてのことをご計画通り完成なさるということは、真実でした。ですから、こう確信できるのです。涙にくれ、絶望的な状況にあっても、主なる神の御手がその背後に働いておられるのですから、

平安の中に居ることができるのです。主なる神は、そこに臨在し続けられます。後になって、主なる神の働きが、いかに的確で誤りのないものであったかが、よくわかります」

ここでふたたび、リンデの同級生と看護婦さんがたによる賛美の歌が歌われました。

あなたはほんとうに、すばらしい人生を与える方です。
このみ約束のために、あなたご自身を無にしてお捧げになりました。
あなたは意味と目的を持った人生を与えて下さり、滅びから救って下さいます。
そして、新しい出発点を与えて下さいます。
あなたは、あなたと共にある人生に導き入れて、私たちの視野を広くして下さり、
その目標を示して下さいます。
あなたと生きる人生は、私たちを悩みから助け、悩みを通してあなたを見上げるよう、
導かれます。それで、悩みこそ益となるのです。
あなたのうちに留まる者は、もはや自分のために生きるのではなく、
あなたの愛により動かされ、あなたのために実を結ぶのです。

「リンデは私たちにとって、主に召された二人目の子です。次女のクリステルは二十五年前に生まれ、半年で主のみもとに召されました。その時、クリステルの墓石に、『ここに上(のぼ)れ。黙示11・12』と、刻みました。人間は病気で死ぬのではなく、主なる神が呼ばれる時、死が訪れる

のです。リンデは、天に帰ることを許されました。

彼女は十八歳の夏、日本にいる両親のもとを離れて、ドイツに帰りました。ドイツの看護学校で勉強したリンデは、霊的にも大きく成長し、私たちは親としてみても、その成長には驚かされました。彼女は、複雑な事態を見抜く洞察力を身につけました。そして、他人に理解されても、されなくても、自分の立場と信念を明確に言い表しました。リンデは自分の心を開け放していたので、主に働く余地を与えていたのです。それで主は、リンデにお語りになることができたのです。彼女の心からの願いは、主イエスのために生きることであり、主のために全生涯を捧げることでした。

主イエスはなぜこんなに早く、彼女を天の故郷へと召されたのでしょうか。私たちにはわかりません。でも、ただこれだけは言えそうです。リンデは天国のために、十分備えができていたと。私たちもやがて、彼女と天で再会する日が来ます。今はほんの短い別れです。私たちも早く主イエスのみもとに行きたい、と願っています。

そしてまた、残された私たちが『彼女の死とは私たちにとって、どんな意味を持つのか』と自らに問われているのです。主イエスを受け入れていない方にとっては、悔い改めて福音を信じるための招きであり、主イエスを受け入れている者には、真剣な献身と明け渡しと、さらに自己放棄への招きだと思います。

彼らの生活の結末をよく見て、その信仰にならいなさい。（ヘブル　13・7）

まだ救いの確信を持たず、死後、イエスのみもとで栄光に包まれることを心の底から確信できない方には、次のように問いかけられています。一人一人が罪を悔い改め、罪と債務を主イエスに告白して、私たちの身代わりとなってなし遂げられた救いの御わざに対して、感謝しましょう。本当の悔い改めの証明として主イエスに従い、人生の支配権を明け渡そうではありませんか。主イエスへの真の献身の人生を送る者は、決して後悔しません。リンデは、自分の絶望的な病状を知らされた時、このように祈りました。『主イエスさま。病気のために感謝いたします。あなたは真の医者であり、私を健康にすることもできます。しかし、あなたがそれをなさるかどうかはどうでもいいのです。病がいやされない時、私はただ、あなたのみもとに行けることを喜びます。主イエスさま、私は用意ができております。私を伴って、すぐにみもとに連れて行ってください』と。

リンデは、いつも周囲の人々に喜んでもらいたかったのです。健康な時から、収入の大部分を隣人のために使いました。主イエスが、まもなくおいでになるのに、どうしてお金を貯める必要があるのでしょうか。自分が召された後まで、お金を残す必要はない、というのが、彼女の考えだったのです。リンデの考えは、間違っていませんでした。このことで、今、天の御国で彼女は何も後悔していないでしょう。彼女は祖父に、こう話しました。『おじいさんが私のために貯めてくれたお金は、吉祥寺集会を広げるために使ってください。必要なら遺言状を書きましょう』。また、姉や妹たちには、「私の衣類はみんなで分けてください』そして彼女らしくユーモラスに、『けれど、喧嘩しないでね』と、付け加えました。このようにして、彼女は自分の本

やカメラも分け与え、小さなことがらの中にもなお、彼女の愛を表わし、人々に喜んでもらいたかったのです。

また、彼女は、自分の病がいやされるようにとは決して祈りませんでした。それよりむしろ周りの人々のために祈っていました。入院して間もない頃、彼女の隣のベットにいた婦人は、『リンデが私に与えてくれたものを、私は言葉で言い表わすことができません』と語りました。この婦人は悔い改めて、救いの確信を持つことができました。ほかの人にも、病床のリンデを通して、多くの神の祝福が与えられたと証ししてくれました。しかし、自分の事に関しては、『主イエスさま。私たちが、あまりに愚かで、さ細なことにくよくよすることを許してください』と祈りました。さ細なこととは、自分の健康であり、自分の幸せでした。

リンデをよく知っている看護学校の人たちは、彼女が他の人より喜んだり、笑ったりすることを知っていました。いつも、彼女の口からユーモアが飛び出してくるのです。死の床で、彼女はしばしば、絶えざる痛みと注射のため汗だらけでした。私たちは、彼女の苦痛を少しでも和らげようといろいろなことを試みました。最初は、日本の扇子で、次には薄い聖書注解書で扇(あお)いでみました。『扇子の方がいい？聖書注解書の方がいい？』と、風の具合をたずねると、彼女は、『どっちもいいけど、聖書注解書の方が内容的にはいいみたい』と、ほほえんで答えました。

付き添うことが許された短い時間でしたが、リンデとともにいる時、私たちは彼女にとって天国の方が、目の前のこの世より、はるかに現実であることをはっきり感じました。毎日、病

室を訪問すると、彼女はいつも、ぜひ聖書を読んでくれと、このことだけを願うのでした。薬のため視力が衰え、聖書の細かい文字を読むことができなくなっている彼女でした。このような状況の中で、神のみことばが力となり、助けとなり、喜びとなっている者は幸いです。

リンデの苦しみを知った私の母は、こう言いました。『一番いいのは、私が入院して、リンデの隣りに寝て、代りに死ぬことですよ』しかし、リンデはすぐに『だめよ。おばあさんより私が先よ』と答えました。リンデにとって、死は、いとうべきもの、いやなものではなく、天国に行くことを許されているという特権を意味していたのです。彼女はベッドの中で、よくこう尋ねました。『いつまで私は、ここにいなければならないの?』私たちは、『主イエスさまが、あなたを呼ばれるまで……』と答えると、彼女は『今すぐにでも呼んでくだされればいいのに』と言いました。そして、『私が先に天の故郷に行って、みんなのために一番よい住いを探しますね』などと、明るく言っていました。

また、彼女は、五週間以上、何も食べることができませんでした。そのため、大好きな日本のごちそうを、よく想い出していたようです。『天国に行ったら、先に召されたクリステルと一緒に、お寿司ご飯を食べるんだ』とも語っていました。彼女は、やがて天の御国で、自分の知っている人々に会うことができると信じて喜んでいました。

召される数時間前、リンデは、しきりに『主イエスよ……主イエスよ……』と、苦しい息の下で言い続けました。

リンデの一番好きな聖句は次のものでした。

彼は痛めつけられたが、それを忍んで口を開かず、
ほふり場に引かれて行く小羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、
彼は口を開かない。（イザヤ書　53・7）

この聖句に記されている小羊、苦しみの人である主イエスを、リンデはよく知っており、心から愛しており、この主イエスに仕えたかったのです。

リンデは目的地に到着しました。私たちはきょう、リンデに別れをするのではありません。彼女はすでに地上にはおらず、主イエスのみもとにいるからです。想像をはるかに越えた栄光につつまれて、主のみもとにいることを許されているのです。私たちは、彼女と共に心から喜びたいものです。彼女は皆さまに対してもう一つの願いを持っていました。ヘンデルのハレルヤを聴いていただきたいということです。ハレルヤによる、主の賛美をご一緒に聞こうではありませんか」

ヘンデルのハレルヤが、スピーカーからテープで流され、式場いっぱいに響きました。続いてリンデの同級生と看護婦さんたちが、彼女の好きだった「太陽なるイエス」という歌を、心をこめて歌って下さったのです。そして、式は、最後の祈りによって結ばれました。

「では祈りましょう。主イエスさま、いまリンデが、あなたのみもとで顔と顔とを合わせてあ

いまみえることを許され、感謝いたします。

主よ。あなたはリンデをお救いくださるために、ご自身を捧げて犠牲になってくださっただけでなく、切なる愛をもってみもとに引き寄せて下さったことを心から感謝します。

いま、彼女はあなたの栄光を直接拝することを許されておりますが、これこそ、はかり知れない大いなる恵みです。

あなたは、天と地を創造する前からリンデを愛し、救いの計画を成就してくださって、彼女の心の目を開いて、あなたの限りない富を明らかにして下さいました。

きょうここに集ってくださった一人一人の想いが何であるかはあなただけがご存じです。私たちの中には、まだあなたを知らず、救いの確信を持っていない方々がおられます。主よ、リンデが召されたことを通して、その方々が魂のふるさとに戻り、あなたを信じ受け入れることができますように、顧みてください。どうかその方々が、この世のものに魅力を感じなくなり、イエスさまだけを必要とすることができますように、お導きください。

私たちは、あなたが間もなく来られることを知っております。あなたにひたすら従っていくことができますように、助け導いてください。あなたの御名だけが崇められますように、私たちすべてをお用いください。

私たちがあなたを愛し、あなたに仕えることを許されておりますことを心から感謝いたします。私たちの心のうちに、あなたをよりよく知りたいという思いをお与え下さいましたことを感謝し、尊き御名によってお祈りいたします。アーメン」

式が終ると、花につつまれ、棺に納められたリンデの遺体は、墓地へと運ばれました。遺体が墓に着いた時、リンデの同級生と看護婦さんたちは、次の歌を賛美して下さいました。

今まで死は、すべての者にとって最後のものだった。たとえどんなに墓がきれいに飾られでも。しかし、私たちの主は生きておられ、切に望む者に、主は出会って下さる。

私たちは、むなしい言葉を信じなくてもよい。主イエスさまの約束は成就した。主こそ、いのちの君、また勝利者である。主が呼んでくださる時、私たちの体も復活する。

だから、私たちは主のために生き、ただ主にのみ仕え、主にのみ従おう。

来たるべきお方が、すべてを明らかにする。主こそ裁き主。また王の王。

喜べ、墓は空だ。主はよみがえられた。死は力を失った。イエスこそ主である。

墓の前で、聖書が朗読され、感謝の祈りが捧げられました。

今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。（ローマ　8・18）

今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。私はこう確信しています。死も、いのちも、……私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。（ローマ　8・1、38、39）

もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。（ローマ　14・8）

私は知っているからです。それは、私がどういうばあいにも……死ぬにしても、私の身によって、キリストのすばらしさが現わされることを求める私の切なる願いと望みにかなっているのです。私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。実はそのほうが、はるかにまさっています。（ピリピ　1・19、20、21、23）

私たちはいつも心強いのです。そして、むしろ肉体を離れて、主のみもとにいるほうがよいと思っています。そういうわけで、肉体の中にあろうと、肉体を離れていようと、私たちの念願とするところは、主に喜ばれることです。（Ⅱコリント　5・8、9）

「主イエスさま。あなたがリンデをみもとに引き寄せて下さいましたことを、感謝いたします。リンデが麗しい国の王と、遠く広がった国を見ることを許され、永遠にあなたに仕えることを許されまして感謝いたします。

主イエスさま。あなたが引き続き私たちに語りかけて下さいますこと、また私たちがあなたのために用いられる器とさせていただけますように。それこそが、私たちの切なる願いである

ことを感謝いたします。
主はその御目をもって、全地をあまねく見渡され、その心が、ご自分の心とまったく一つになっている人、主を心から愛する人、自らのことを考えず、ただ主が栄光をお受けになることだけを考えて生きる人々を求めておられます。
どうか私たちが、すべてをあなたに明け渡すことができますように。そして私たちの生涯を通して、あなたがご栄光を現わしてくださいますように。
尊き御名によってお祈りいたします。アーメン」

そして、はるばる日本からやってきて下さった兄弟姉妹の主への賛美の歌声が、リンデの墓に、墓地全体に、そして大空に響きました。

シャローム、シャローム。また会う日まで。
シャローム、シャローム。神の恵み、ゆたかに、ゆたかに……。

九　多くの証言から

一九八〇年九月五日、私と家族、それに吉祥寺キリスト集会の八人の兄弟姉妹は、再び日本に帰ってきました。私たちは、リンデが天に召される間、吉祥寺集会のみなさんの温かい祈りにより支えられ続け、また、ドイツでも日本でも、主へのご奉仕を通して直接主からの慰めを、豊かに体験しました。そうした中で、特に私たちに感謝と喜びを与えてくれたのは、ドイツの姉妹がたから送られてきた手紙でした。リンデの同級生たち、医者や看護婦さんたちが知らせて下さったリンデのありし日のエピソードは、私たち家族にとって、どんなに慰めとなったことでしょう。中でも特に感動させられたのは、マリアという看護婦さんからの手紙でした。私は、彼女とは、直接お目にかかっていないのですが、彼女はリンデの手術後二週間というもの、毎夜付き添って下さったのでした。感謝と共にここにご紹介したいと思います。

親愛なるベック兄姉様。リンデが手術を受けてから二週間、彼女の世話をすることができたのは、私にとって大きな恵みでした。彼女は若くて、豊かな能力と主の賜物を持っていました。そして、将来は、日本で、主のためにご奉仕したいと言っていました。しかし突然、彼女は天に召されたのです。私はなぜ神がこのような大いなる悩みと苦しみをお許しになるのかと問わ

ざるを得ませんでした。確かに、神の思いは私たちの思いとは異なり、天が地よりも高いように、私たちの思いよりもはるかに高く、神の導きはすばらしい、そのことを信仰をもって喜んで受け入れることの大切さも知っています。しかしリンデは私にとって大切な人でありました。

リンデの手術後、一週間ぐらいたったある晩のこと、私が痛み止めの注射をするため病室に入ったところ、彼女はまだ起きていました。ベッドのそばには、一枚のカードが飾られ、次のような慰めのことばが書いてありました。『永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した。それゆえ、わたしはいつくしみをもって、あなたを引き寄せた」私が声を出して読んであげると、リンデは『マリア、これは今年与えられた一年間の標語です。そしてこのみことばがまもなく成就されようとしています』と言ったのです。そう言った彼女の顔は喜びに輝いていました。主はリンデに、天国の備えをすでになさっていたようでした。

若い人の身体を蝕むがんは、激痛をともないます。その痛みの中にあっても、リンデは、神さまの守りの中で、主イエスを着ていたようでした。ある晩、私が薬を持って病室へ行くと、お母さんが、病院で開かれる学び会のため、早目に来られて、彼女のそばに付き添っていらっしゃいました。リンデはお母さんを促して、集会に早く出るようにと言っていました。私は、あと四十五分もあるので、『あと少しいてもらってもいいのに』と言うと、リンデはお母さんに断固とした口調で『もう私のところには十分いて下さったわ。早く集会に出てください』と言いました。それはリンデの心の戦いから出た言葉でした。彼女は、お母さんに限りない愛と、尊敬の心を抱いていましたが、自分のために周囲の人たちが迷惑することはもっと苦しかったので

しょう。

しかし十九歳の少女のことです。こんな可愛らしいエピソードもありました。

病気になる前、彼女はパジャマを買いに町に出かけました。でも、気に入ったパジャマが高かったので、買うのをあきらめて、その代金を福音を伝えるために用いたのです。ところが、リンデが病床につくと、ある看護婦さんがあのリンデの欲しかったパジャマとまったく同じものをプレゼントしてくれました。その時のリンデの驚きようといったらありませんでした。それは、十九歳の無邪気な少女の笑い顔でした。

また、彼女の聖書も、私には驚きでした。聖書の文章にはアンダーラインが整然と引かれ、余白にはびっしりとメモが書き加えられていました。リンデの心の中心にはこの聖書のことばがあったのです。

そんな中にも、彼女の痛みは激しくなり、一日一日が汗みどろの戦いとなりました。それでも主の全能の力の前に痛みすらも受け入れて平安と喜びに満ちたリンデの姿は、主の栄光のみを表わしていたのです。そのあまりに平安な様子は、ある若い医者にとって偽善的な態度とすら見えたようです。彼は多くの患者を診察し、若いがん患者、死を迎える人々の姿を十分知っていたので、とてもリンデの姿が真実のものとは受けとれなかったのでしょう。彼の疑問は当然でした。もしリンデの平安が自分の力に頼っているものでしたら、この絶望の中ですべてが消え去っていたでしょう。しかし、リンデを支えていたのは、神からの確信と天国への永遠の希望でしたので、そのことを彼に説明すると、彼は真剣な表情で病室から出て行きました。

そして最も感動的だったのは、リンデの同室の、ネーゲル婦人が、主イエスを救い主として受け入れたことでした。その夜の巡回の時、ネーゲル婦人は、私を見つけて、リンデの筆跡で、『イエスさまに忠実な信仰生活を続け、いつもイエスさまを第一として下さい』と、献辞が書きこまれている本を見せて、主イエスを受け入れた喜びを語ってくれたのです。それが、一粒の麦、死の中での実りの第一号でした。

リンデは口癖のようにこう言いました。『私の病気が役立つなら、それは最も大きな喜びであり、また願いです』。

最後にもう一度、あなたがたのリンデを通してすばらしい経験をさせていただいたことを心から感謝します。彼女は今も、永遠のことを考えながら一日一日を生活するようにと私を励まし続けているのです。　　アイドリンゲンにて　　主にあって　　マリア

また、日本で、病床にあるリンデのスライドや8ミリをお見せし、カセットテープをお渡ししたところ、多くの方々からお便りをいただきました。その一つをご紹介します。

ベック様。リンデが愛し通したイエスさまを、私も信ずることができて心から感謝いたしております。こんな小さな信仰の私をも一緒に神の子供としてくださいましたから、感謝いたします。主イエスさまと歩む人生は何とすばらしいことでしょうか。リンデの姿を通してそう思いました。私の信仰はとても弱く細い糸のようです。どうぞこれからもずっと導いてください

ますように。そしてイエスさまに結ばれて決して離れないようにして下さいと祈っています。

この地上の生活が終わる時、リンデのように死にたいものです。くじけ倒れそうになる時、リンデを思い出してきっと笑顔に戻ることができるでしょう。リンデが愛したイエスさまを、もっともっと、心から愛することができますように祈っております。主にあって

まだ私はお目にかかったことはないのですが、あるサナトリウムの若い患者さんは、リンデのテープを聞いて、次のような感想を寄せて下さいました。

拝啓突然お手紙を差し上げますご無礼をどうぞお許しください。失礼ながら日本語で書かせていただきたいと思います。大森さんからあなたの作られたカセット「リンデの召天と葬儀の記録」を拝借して、あなたと娘さんのリンデのことを知りました。あなたの声には実感がこもっていて、とても説得力がありました。今でも、毎晩くり返しくり返しカセットを聞いております。何度聞いても感動が薄れません。

自己紹介が遅れましたが、私は尾島と申すものです。すでにイエス様を受け入れ、信じております。現在、サナトリウムに入院中です。しかし、今はもう、病気が早く治るようにとは決して祈りません。ただ、他の人々の幸福のため祈るだけです。私にとって死ぬことは非常に楽しいことです。（中略）あなたの娘さんが天国で楽しく暮らしていらっしゃることと、確信しております。では、いつかお会いできますならと祈る次第です。お元気でさようなら

また、その夏ドイツに出かけて、リンデの病床を見舞い、葬儀に列席してくださった方々が、証しをして下さいました。デザイン会社を経営する飯守恪太郎氏は、次のように語って下さいました。

「私とベック一家との交わりは、家が近所ということもあって、早くも十年になろうとしています。しかし、親しく交わりを持つようになったのは、私と妻が主イエスを救い主として意識的に受け入れ、吉祥寺キリスト集会に集うようになってからです。そして、今度のリンデの召天のことは、ただ同じ集会の一員として以上に、二人の娘たちの心からの親しい友人の死でもあったため、感動的なできごとでした。私たちがどのようにリンデの状況を知り、私たちも祝福の中に導かれたか、たどってみたいと思います。

七月十日朝八時、私たちが朝食をとろうとしていると、電話が鳴りました。『もしもし、恪さん、ゴットフォルドです。おはようございます。実はリンデが病気なのです……』ドイツは真夜中ごろです。ベック兄からの電話はシュトゥットガルト近郊にある彼の自宅からか、病院からか分かりませんでした。それは、ちょうど自動車による人身事故を知らされた時のショックと不安に似ていました。『きょうは、そちらは木曜日ですね。いつもの祈り会で祈っていただきたいのです。まだくわしくは分からないけれど、来週大きな手術をすることになりました。みんなで祈ってください』『はい、わかりました。きょうの祈り会で祈ります』『たぶん、がんではないかもしれないけれど……この十日間多くの検査をしたのですがよく分からないのです。二十四日に腹部を開いてみることになりました……』三分間くらいの会話でした。

次の週の木曜日には、手術の結果を知らせる電話がありました。こちらは夕方の五時頃でした。『もしもし……がんでした。全体に広がっていて手の施しようがなかったので、そのまま閉じました。手遅れで医学的にはまったく絶望だということです。意識ははっきりしています。皆さんに続けて祈ってくださるように、くれぐれもお願いしてください』。

その日の夕食の時、妻や娘たちの目がうるんでいました。

私たちは、八月上旬から九月上旬まで、ドイツ各地の人々やキリスト集会の人々に会うためのキャラバン伝道旅行に参加する予定でした。そして、町田市の星淑子姉、白木みどり姉、それに私たち家族（息子一人、娘二人）は、八月十二日、成田からその目的をはたすべく予定通り出発しました。

三十三時間の飛行の後フランクフルト空港に着くと、ベック夫妻と娘さんたちが、私たちを迎えて下さいました。リンデの病状の容易ならぬにもかかわらず、ご家族と私たちの気持は、不思議なくらい静かでした。お宅までの二時間のドライブの車中でも、神への圧倒的な感謝と平安が支配していたようでした。召しを待つ彼女を見て思ったことは、私たちの目的は主イエスであり、イエス様は私たちの感じているよりも近くにおられ、礼拝せざるを得ないということでした。

彼女は、子供のような信頼と従順によって静かにベッドの上で目を開き、熱のためピンク色の頬に微笑を浮かべて、一人一人に挨拶をしました。私は思わずこう言ったのです。『日本にいるみんなのために祈って下さい。私たちは、あなたを心から愛しています』と。彼女は大きく

何度もうなずいてくれました。彼女の態度には、よく病人に見受けられがちな同情やあわれみをさそうようなものは、何もありませんでした。彼女の瞳は全身で神の御顔を見続けていて人間の同情など入る余地がなかったのでしょう。

帰国後、私の二人の娘たちは、来たるべき日に天国で彼女との永遠の再会を待ちつつ、日常生活でも以前とは違った張りとリズムを持って過ごしているようです。私たち夫婦も言葉ではうまく表現できないのですが、目ざす目的地が身近に感じられ、今日明日という一日一日がそのための準備であると思うようになったのです。愛する御方の前で恐れかしこむしもべでありたいものです。私は、黙示録の『さあ、花嫁はその準備ができたのだから』という一節が好きです。花婿なるイエスは、花嫁である私たちをご自分の血潮によって受け入れて下さるという確信と平安の上にたって、日々生活をしています」

そのほかにもたくさんの証言があります。しかし大切なのは、この小さな器を通して、主が大いなる御わざを私たちの心の中に行なっていて下さるということです。そして、私たちが天に召された時、今より以上に主の御わざとその愛の偉大さを知り得るでしょう。その日を待ち望んで心から喜ぼうではありませんか。

Ⅱ　あなたは、わたしを愛するか？——リンデの学び——

リンデは一年半の間、看護学校の「しゅろの木」のクラスで過ごしました。この期間の後半、リンデは自分からすすんで聖書の学びをしたいと申し出ました。彼女は、二度の学びをしましたが、この学びを読むと、私たちは彼女が重い病気をどのように受けとめたか、また、彼女の闘病生活における霊的状態がどうであったかを知ることができます。

一　誘惑と試練

最近、私は市川市に住んでいる、あるキリスト者の両親のところで、リンデについてのスライドと映画を見せました。その時彼の父親は、「これは神の実在を証明する有力な証拠だ。まさにダイナマイトのようなものです」と言いました。

また、ある知りあいの婦人は次のように言いました。「私も、リンデが信じたこのイエスを、信じることに決心しました」。

リンデは、主イエスのために実を結びたいと、切に願っていました。自分の健康や自分の幸せでさえも彼女にとってはとるに足りないことであり「ただ主イエスだけが栄光をお受けになれば私はうれしい……」と考えていたのです。これが、彼女の病気に対する受けとめ方でした。

いまや、この証(あか)しは豊かに実を結びつつあります。多くの人々が主イエスを求めるようになり主イエスについてたずね、主イエスをまことの救い主として信じ、受け入れるようになってきたのです。

何回か日本に来たことのあるドイツの友人は、私たちがリンデの葬儀をすませて日本に戻ってくる直前、再度私たちを訪ねてくれました。その時彼は、「リンデが喜んで死ぬことができたのはいったいなぜだったのだろう。彼女がそれほどまでに、この目に見える世界から目を離し、見え

ないものに目を注ぐことができたのは、どうしてだったのだろう」と言いました。

この問いに答えるために、リンデ自身の「聖書の学び」をみることにします。この学びは、彼女が一九七九年十一月二十日、キルヒハイムの看護学校で、同級生たちの前で発表したものです。これを読むと彼女がごくありふれた少女だったことがわかります。私の手もとに残されたリンデのノートを見ると、彼女は学びをはじめるにあたって、次のような記録を残しています。

「人格者とはなにか」

人格者とは、何のために生き、何のために死ぬかを知っている人。
人格者とは、神に対する自分の罪と債務を認め、それを告白できる人。
人格者とは、単なる人間的なものに動かされず、真理をたずね求める人。
人格者とは、感謝されなくても、へりくだって奉仕できる人。
人格者とは、他の人の中に良いものを見い出す人。
人格者とは、死を直視することのできる人。

リンデの学び一　誘惑と試練

私（注、リンデ）がなぜ誘惑と試練というテーマを選んだのか、その理由を説明することは大変むずかしいことです。ただ私たちは、日常の信仰生活において、しばしば困難に直面し、それが信仰の真価をためす神の試練か、それとも、悪魔による罪への誘惑なのか識別しにくいという

経験をします。誘惑や試練を経験したことのないキリスト者はいません。

私はこれから、イエスご自身が悪魔の誘惑にあわれたこと、またイエスはその誘惑にうち勝たれ、悪魔を退けられたことをもとにして、この「学び」をすすめたいと思います。

私は、「誘惑と試練」というテーマを５つの項目に分けてみました。

１　神に対する不信頼。主なる神を信頼しないことは、神を試みること、すなわち罪である。
２　信仰の試練。主なる神は、人間が神に対して真実であるかを試される。
３　悪魔による誘惑。主なる神の赦しのもとにおける悪魔による罪への誘惑。
４　助け主イエス。
５　主イエスから提供されている武器。私たちは、どのようにして、イエスからの助けをいただくことができるか。

以上の５つの項目について、少しくわしく考えてみることにします。

１　神に対する不信頼

誘惑の一つに、神を信頼しない罪があります。私たちが神の全能に信頼せず、疑いをいだくなら、それは知らず知らずのうちに神を試みているのです。

私たちは、さらに、彼らの中のある人たちが主を試みたのにならって主を試みることはないようにしましょう。（Ⅰコリント　10・9）

イスラエル人が……「主は私たちの中におられるのか、おられないのか」と言って主を試みた。（出エジプト記　17・7）

これらのみことばによって明らかなように、主を信頼せず疑うことは、主を試みることです。これは「神に対する挑戦」です。さらに言えば、神を脅迫することです。「私たちをすぐに助け出してくれないようなら、もうあなたとの関係を望みません」という脅迫なのです。

そのような状況においては、「私の思いではなく、主なる神さまのみこころがおこなわれますように」と祈れるかどうかが疑問となります。このように祈ることは、私たちにとって最もむずかしいことです。そのわけは、私たちが自分勝手に生活したいと望んでいるからです。

しかし、神から離れて、自分勝手に生活することは、人間にとって最も愚かしいことと言えるでしょう。神の目には私たちはちいさな存在です。ただ全き愛と恵みのゆえに、神は、罪の奴隷となって苦しんでいた私たちを救って下さったのです。

主イエスにとって、不可能なことは何ひとつありません。主イエスはどのような状況にあっても、真剣に求める者を助けることができる方なのです。この全能の主に対して「こうすべきだ、ああすべきだ」という者は禍（わざわ）いです。私たちは主イエスに要求したり、命令すべきではありません。それは悪霊です。もし、そのような自分勝手な生活を始めるなら、その人はすぐに自分を苦しめることになります。つまり、悪魔の誘惑に陥る結果になります。

私たちが誘惑に陥る原因は、苦しみ、恐れ、怒り、欲望などです。私たちは、これらの危険な

状況について、主イエスに打ち明け、くり返し祈り、また誘惑に陥らないように自分自身に警告し、勇気づける必要があると思います。なぜなら、主イエスだけが、私たちを悪魔から守ることができるからです。

私はこれらのことをみなさんにお話しするまえに、「たんなる理論や抽象としてではなく、自らの体験として証しできるようにして下さい」と祈りました。それに対して主イエスは豊かに答えて下さいました。事実、私はいろいろな経験をしました。つらいことも悲しいこともありました。あのような経験をしなければならないと知っていたら、私は自分の願いを主に祈ったりしなかったかも知れません。

しかし、そのことを通して、私は主のご臨在を非常に身近に経験しました。その結果、「私は主イエスのものである」ということがよくわかるようになり今もその確信が喜びの源となっています。

試験勉強中の心の動揺も、一つの経験でした。看護学校で勉強し、卒業することが、非常に困難に思え、「私の目標が高すぎるのだろうか」と考えこんでしまったことがあります。頑張って勉強しましたが、「私にはどうしてもできそうにない」と絶えず思い悩むようになってしまったことがあったのです。

主イエスにとって不可能なことはなく、すべての力がイエスに与えられている、ということは知識としてはわかっていましたが、実際に、体験的に知るまでは大変でした。

あの頃の私は、自分自身に失望して、学校をやめるべきか、それとも、主イエスに信頼して勉強を続けるべきか、という選択の前に立たされていました。そのような時、私は、主に完全には

信頼しないこともありました。

しかし、赦しを与える神はなんとすばらしい神でしょう。主イエスは、私が主に信頼できるようになるまで、忍耐強く待っていて下さいました。いろいろな経験を通して、「人間は、自分の努力で神の恵みと賜物を獲得することはできない。また、そのような人間は、神の祝福である恵みと賜物をだいなしにしがちである」ということも分ってきました。

私たちが信頼しないとき、主はどんなに悲しまれるでしょう。私たちは、主の栄光をほめたたえたいと願っていますが、どうすれば、主をほめたたえることができるでしょうか。それは、私たちキリスト者が主に依り頼むことによって初めて可能となるのです。

主なる神が全能であり、つねに私たちとともにおられることを知りながら、困難に直面すると神の臨在とまったき愛を疑うことは罪であり、神を試みることにほかなりません。神を試みるということは、知識としては知っていながら、神の力を認めようとしないことであり、神の救いと、救いの意志を本気にしないことです。その結果が不信仰と不従順です。要求や命令をもって主に近づく者は、主を侮る者です。それに対して、主に信頼し、主にすべてを明け渡し、主を崇拝する者、それこそ主をほめたたえる者です。

2　信仰の試練

あなたがたの神、主は、あなたがたが心を尽くし、精神を尽くして、ほんとうに、あなたがたの神、主を愛するかどうかを知るために、あなたがたを試みておられるからである。

あなたがたの神、主に従って歩み、主を恐れなければならない。主の命令を守り、み声に聞き従い主に仕え、主にすがらなければならない。（申命記　13・3、4）

試練の目的は、神と私たちの関係が明らかになることです。神は私たちがほんとうに、心から神ご自身を愛しているかどうかをためし、私たちの信仰がもっと成長するようにしてくださいます。ですから、これは次の 3の項目でみるような悪魔の誘惑による信仰の脅かしとは別のものです。

信仰が本物になるためには、神に試みられる必要があります。今日、私たちを、聖書のみことばに基く単純な信仰から引き離そうとする悪魔の働きがなんと多いことでしょう。私たちの信仰は、ややもすると、不純なものになってしまいますから、神は信仰のためしとして、苦しみや悩みを用いられます。

主にしっかり結びついて、日々の生活を送っている人には、誘惑の危険と戦う備えが、できています。心から神に信頼する人は、神をすべての上にある支配者として認めており、幼な子が母の胸でいこうように、神のことばと約束のうちにやすらぎます。このような信仰をもった人こそあらゆる試練を経験させられるものです。すなわち、神は誠実な方ですから、主イエスの再臨の日に、しみも汚れもない者として神の前に立つことができるように、私たち信じる者を訓練してくださるのです。

誘惑におちいる危険を防ぐには、自分自身を見ず、自分の力だけに頼って努力するのでもなく

「自分」から目をそらし、いつでも主ご自身を見上げていなければなりません。主イエスの弟子であるはずの私たちは、神が信仰の訓練として与えようとしておられる試練を避けてはいけないのです。むしろそのことによっても、主なる神をあがめ、試練を信仰の成長の手段として喜んで受けとめるべきです。私が今日までに経験した誘惑や試練は、私が誘惑に対する抵抗力を持っているか、私がキリスト者であることが困難の中にあってもなお本物であるかどうかを、いく度もテストしてくれました。

私は試練のなかで、主イエスが、ひとしお身近な存在であり、実在される方であるということを経験しました。これからも、さまざまな試練を通して、より深く、神ご自身の中に根をおろし神に信頼することができると信じます。主イエスは、私たちを誘惑から守り、この世からきよめ分かつために、人間には理解しがたい試練をお与えになるのです。しかし、神はキリスト者に対して、決して過大な要求をなさいません。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えて下さいます。

（Ⅰコリント　10・13）

なんとすばらしいことではありませんか。学校の試験の場合には、すべての学生にまったく同じ試験問題が出されますが、主がくださる試験の場合は、一人一人にふさわしい課題を与えて下さいます。これこそ主のあわれみのしるしです。主なる神は、苦しみの時に私たちを助けて下さり、

みこころにかなう時、その苦しみから救い出してくださいます。あなたの生活の事情がどのようなものであれ、神があなたに与えてくださるものを、決して拒否しないようにして下さい。私たちに与えられるものを、神の子として喜んで受けとめ、それに耐えていくとき、神はそのような信仰を大いに喜んで下さるのです。神の試練から逃避しようとせず、理解できないようなことも、主の栄光のために耐えていくことが大切です。

3　悪魔の誘惑

悪魔はキリスト者を攻撃し、その信仰を弱めようとして懸命に働きかけてきます。また全力で神を攻撃しようとします。悪魔はいろいろな誘惑によって、私たちキリスト者が神のみこころに反することを行なうように誘惑してくるばかりではありません。私たちが新生によって神から与えられたもの、すなわち神のために用いられるという特権をも再び失わせようと狙っているのです。悪魔は、私たちが神のための奉仕に役立たないものとなるように、あらゆることを試みています。それに対して私たちは、よりいっそう主イエスに結びついた生活をし、主に用いられるものになることによって、悪魔を退けることができます。

人間は、だれでもさまざまな誘惑を経験します。その人の性質に応じた誘惑を受けます。悪魔は私たちの弱点を熟知していて、その点を徹底的に攻撃してくるのです。孤独であるとき、悩み苦しむとき、痛みにうめくとき、あるいは祝福されてうぬぼれているとき、このようなとき悪魔は攻撃してきます。

私たちが主のための奉仕をするときにも、戦いと試練がやってきます。ただしそれは、奉仕が不完全、不十分であるためではありません。主を愛し、まごころから奉仕をしているときこそ、悪魔とのあいだに激しい戦いが生じるのです。

地上における主イエスの生涯は、絶えざる悪魔の誘惑の連続でした。主イエスは、私たちが、悪魔の誘惑に対していかに抵抗すべきかについて一つの模範をお与えになりました。すなわち、神のみことばに依って立つことこそ、悪魔に対する主イエスの武器でした。

私は校長先生の言葉を思い出します。校長先生は、「祈ろうとすると、いつも電話がかかってくる。それは悪魔の攻撃です」とおっしゃいました。

本来なら、悪魔から攻撃されるキリスト者は喜ぶべきです。というのは、神に用いられ、祝福されているキリスト者にのみ悪魔は攻撃の目を向け、彼をうち倒そうとしてくるからです。

さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。（ヤコブ　1・2）

試練に耐える人は幸いです。耐え抜いて良しと認められた人は、神を愛する者に約束された、いのちの冠を受けるからです。（ヤコブ　1・12）

主はサタンに仰せられた。「では、彼のすべての持ち物をおまえの手に任せよう。ただ彼の身に手を伸ばしてはならない」（ヨブ記　1・12）

主はサタンに仰せられた。「では彼をおまえの手に任せる。ただ彼のいのちに触れるな」
（ヨブ記　2・6）

これらの聖句から明らかになるように、悪魔は人間を誘惑することを神に願い出て許されたのです。悪魔の目的は、キリスト者を神から引き離すことです。これに対して、主なる神のご目的は、私たちをよりいっそうご自分の近くに引き寄せて下さることです。神は試練を通して、ご自分の近くに引き寄せたいと思っていらっしゃるのです。

私たちが忘れてならないことは、誘惑されることが悪いというのではなく、その誘惑に対してとらなければならない態度と決断がどうであるか、ということです。

神ご自身が私たちの受ける誘惑の程度と限界を決定されます。たとい神が悪魔に誘惑を許しても、それは信仰をためすためであり、神の栄光のために許されるのです。

これに対して悪魔の狙いは、キリスト者を惑わすことです。しかし、悪魔はすべて自分の思いどおりにできるという訳にはいきません。最終的には、悪魔の誘惑も神の御手のうちで行われるのです。つまり、悪魔といえども神のご計画からはずれたことを行うことはできません。

主ご自身は、私たちキリスト者を悪へと誘惑なさることはありません。主は、私たちが試みによってだめになることを望んでおられません。ですから主は、私たちが罪を犯すようにと、試みるようなことはないのです。

キリスト者は、困難が信仰の成長のために、なくてはならないものであることを知っています。しかし、知ってはいても、実際に困難に出会うと、それが決してなまやさしいものではなく、厳

しいものであることを経験します。私たちはさまざまな試みを、当然のこととして受けとめて積極的に立ち向かおうとする態度がとれないため、しばしば、長期にわたる圧迫によって、霊的に弱くなってしまい、危険な状態におかれます。

主イエスの再臨、天においてキリスト者の受ける栄光を待ち望む者だけが、今の時代の困難に正しい態度をとることができます。そして敵が攻撃し、苦しめ、不安にするとき、「主イエスよ、どうか勝利を与えたまえ」と祈ることができるのです。

4　助け主イエス

主は、ご自身が試みを受けて苦しまれたので、試みられている者たちを助けることができになるのです。（ヘブル　2・18）

主イエスは、試みによって苦しめられたとき、人間が誰もあじわったことのない恐るべき誘惑を経験されました。主は人間のあらゆる弱さをもっていらっしゃいました。しかも、悪魔の誘惑にうち勝たれました。ですから、私たちもまた、いかなる状態にあっても、主に助けを求めることができるのだと思います。

主がいつ助けてくださるか、その時を決定するのは私たちではありません。それは主イエスに委(ゆだ)ねられていることがらです。ただ主イエスご自身のみことばが、いつでも、必要なときに助けてくださると、約束しています。

私たちキリスト者には「心配」というものがありません。神の目から見るとき、大切なのは、自分の力でやりとおさなければならない「人の計りごと」ではなく、神ご自身が成し遂げようとしていらっしゃる「神のご計画」です。私たちのうちで、誘惑にうち勝とうとして努力しても、人間的な力によって成功する人は一人もいません。神の救いのご計画に信頼しましょう。

私たちは、神の敵である悪魔を見る必要はありません。彼は、たしかに超自然の力をもっていますが、見るに値しないものです。ただ主イエスだけを見上げることが大切なのです。というのは、主イエスもまた、地上におられたとき、父なる神だけを見上げておられたからです。勝利者なるイエスは、私たちにも勝利を与えたいと思っておられます。

主は、敬虔な者たちを誘惑から救い出し、不義な者どもを、さばきの日まで、懲罰（ちょうばつ）のもとに置くことを心得ておられるのです。（Ⅱペテロ　2・9）

5　主イエスから提供されている武器

まず必要なことは、自己中心の思いを否定し、すべてを主イエスに明け渡すことです。そうすれば主の霊が自由に働くことができます。しかし、その結果、悪魔が完全にうちのめされ、信者がまったく警戒を解くことができるようになる、というわけにはいきません。悪魔は、絶えず主を第一にする信者を攻撃してくるのです。誰でも一度は敗北を経験することになります。

しかし、その時こそ、私たちは勝利者なるイエスを仰ぎ見つめるべきです。また、次のことを認識すべきです。すなわち、私たち罪あがなわれた者は、罪の持つ力から解放され、死の力、悪

魔の力からも解放されているのです。「救いを与えるのは、ただわたしのみである」と神は言われます。

身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。（Ⅰペテロ　5・8）

悪魔が歩き回っているというのは、外側をぐるぐる歩き回っているということです。悪魔は信者の心の中にたやすく入ることができません。しかし、誰かが主イエスから離れるのを待っています。なぜなら、そのとき悪魔は入りこむすきを見つけることができるからです。

ただ主イエスを見上げることによってのみ、勝利がもたらされます。勝利は、私たちが主を信じるときにのみ確保されます。すなわち、主と結びついているとき、つねに勝利が保証されているのです。

これらすべてのものの上に、信仰の大盾を取りなさい。それによって、悪い者が放つ火矢を、みな消すことができます。（エペソ　6・16）

主が、私たちの方に近づいてくださるから、私たちも主に近づくことができるのです。すなわち、主が恵んでくださるから、私たちは大胆に祈ることができるのです。

誘惑に陥らないように、目をさまして、祈っていなさい。（マタイ　26・41）

提供される武器とは、すべてを主に委ねて祈る祈りのことです。私たちは、悪魔の誘惑にあうとき、いそいで主のみもとにいき、助けを求めなければなりません。そのとき、悪魔は私たちに対してどうすることもできず、立ち去らなければならないのです。

祈るということは、主イエスとの交わりをもつことです。祈りによって主との交わりをもつと主の力をいただくことができ、最後の目標にいたるまで、あらゆる重荷に耐えぬくことができます。耐えることの秘訣、それは主に全く服従することです。なぜなら、こうした神へのまったき従順は、悪魔を無力にするからです。

キリスト者は、提供されている神の武器で身を固め、絶えず目をさまして、祈ることが大切です。自分の力だけで悪魔に対抗しようとして努力しても何の役にも立ちません。悪魔に立ち向かうことができるのは、神の武器を身につけたときだけなのです。信者は誰でも悪魔の超人的な力にさらされていて、私たちが予想もしないときに攻撃されます。ですから、信仰の戦いには、日々、神の武具であるみことばと祈りを用いなければなりません。信者が恐ろしい悪魔の攻撃に立ち向かうことができるのは、神のみことばと祈りによってであり、それは神の恵みによる、ということを覚えていただきたいと思います。

キリスト者は、主に依り頼みます。主から離れると無力です。自分自身の無力を知っている者は主のみもとへ行きます。主が私たちを守ってくださるからです。

今まで、私たちは「誘惑と試練」というテーマで考えてきました。その背後にある根本問題は主イエスが私たちを通して栄光を現わすことができるか、あるいは、主のみ名が汚されるか、と

いうことです。最後にもう一ヵ所聖書を読んでみたいと思います。

神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。（ローマ　8・31）

ここで一つの重大な問いを考えて下さい。いったい、あなたの場合、神は味方なのでしょうか。神が自分の味方であることを知っている人だけが、喜び、希望をもち、慰められ、そして、主に信頼しつつ未来に立ち向かうことができます。

主イエスに与えられた名は、「インマヌエル」すなわち「神ともにいます」あるいは「神はわれわれの味方である」という意味です。自分の罪と債務をみとめる人は赦されます。自分の罪が赦されている、という確信をもつ人にとって神は味方です。このような人には、何が起こっても完全に守られる、という確信が与えられます。「神は私の味方である」という確信こそ、すべてに優って大切です。

あなたは今日まで、神があなたのことをどのように考えておられるか、真剣に考えたことがあるでしょうか。残念ながら、大多数の現代人は、他の人が自分のことをどう考えているか、ということにしか関心をはらいません。その結果、不安に満ちた、実りなき人生を後悔することになるのです。

心の目で神の偉大さを見るとき、この世のすべてのことがらは、取るにたりないものであることがわかります。その時、人は、いかにしたら神を喜ばすことができるか、と考え始めるのです。これこそ、勝利の秘訣です。

リンデは以上のように発表しました。この中には彼女が本当に経験したものもあったでしょうし、そうでなかったものもあったでしょう。いずれにせよ、彼女が神のことばを真理として信じ神を心から信頼していたことは疑う余地がありません。彼女は自分が不治の病であることを知ったとき、抗しがたい誘惑と試練を経験しました。そしてそれを通して、次のことを理解しました。

1　自分は主イエスに信頼することを神から許されており、今、主イエスに信頼する心の準備ができている。主イエスを信じる者は絶望することがない。

2　主イエスはいつでもキリスト者の最善を考えていて下さり、自分の病気を通しても最善を行って下さる。

3　主イエスは、すでに十字架上で悪魔に勝利をおさめられた。自分が幼子（おさなご）のように主に依り頼むとき、死も恐れるにたりない。

4　どんなときにも、主イエスは自分のそばに臨在しておられ、完全に守られている。

5　神から提供されている武器は、悪魔から自分を守り、さらに悪魔を攻撃するのに十分だ。

あなたがたを、つまずかないように守ることができ、傷のない者として、大きな喜びをもって栄光の御前に立たせることのできる方に、すなわち、私たちの救い主である唯一の神に、栄光、尊厳、支配、権威が、私たちの主イエス・キリストを通して、永遠の先にも今も、また世々限りなくありますように。アーメン。　（ユダ　24、25）

二　あなたは、わたしを愛するか？

リンデが自分で考え、それをきれいに書きあげた聖書の学びは、二つだけしかありません。その一つの学びが前章の「誘惑と試練」であり、今一つが「あなたは、わたしを愛するか？」です。「誘惑と試練」によってもリンデの信仰は動揺せず、それを通して彼女は主イエスをよりよく知っていったのです。このようにして彼女はますます主イエスを愛さざるを得なくなりました。

リンデは主イエスを「罪を赦す方、罪の力から私たちを解放する方」として体験しました。ここで注意すべきことは、主について知ることと、主ご自身を知ることとの間には、大きな相違があるということです。つまりリンデは、主イエスを体験的に知るようになったので、主イエスを愛さざるを得なくなったのです。そして主イエスに対する愛から、彼女は全生涯をかけて主イエスに仕えたいと願うようになったのです。

年をとると、人間の心の中にあるものがあらわになるとよく言われます。長年の間、表面に出なかったものが年をとるにつれて、すべてあからさまになるので、年寄りと一緒に生活することは難しいと言われています。

しかしもっと確かなことがあります。すなわち、人間が死に直面すると、その心の中にあるものがすっかりあからさまになるということです。つまり、本当に心の支えを持っているかいない

か、未知の世界へ入って行くのか、あるいは、自分は永遠に主イエスと共にいるという確信によって喜ぶことができるかどうか、といったようなことがらが、明らかになってくるのです。

彼らの生活の結末をよく見て、その信仰にならいなさい。（ヘブル　13・7）

私たちがリンデの生活の結末を見ることは、つまり、彼女が「私は不治の病を持っている。手のつけられないほどがんで冒されているから、間もなく死の暗い谷間をどうしても通らなければならない」というこの事実をいかに受けとめたかを、見ることにほかなりません。リンデは自分の病気を次のように受けとめました。

「私」は勇気を失いません。たとい「私」の外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。今の時の軽い患難は、「私」のうちに働いて、測り知れない重い永遠の栄光をもたらすからです。「私」は、見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。

「私」の住まいである地上の幕屋（今の肉体）がこわれても、神のくださる建物があることを「私」は知っています。それは、人の手によらない、天にある永遠の家です。「私」はこの幕屋（今の肉体）にあってうめき、天から与えられる住まいを着たいと望んでいます。

（Ⅱコリント　4・16～5・1、2）

これから、もう一つのリンデの聖書の学びを見ることにしましょう。これは彼女が、天に召される二、三ヵ月前に同級生の前で行なったものです。

リンデの学び二　あなたは、わたしを愛するか？

きょうの主題は、主イエスが、弟子のペテロに三度たずねられた問い「あなたは、わたしを愛するか？」ということです。これは決してないがしろにしてよい問いではありません。また、私たちが「主イエスを愛するか愛さないか」というこの問いも、どうでもよいことではありません。この一言にこそ、人間存在のすべてがかかっているからです。

主を愛さない者はだれでも、のろわれよ。（Ⅰコリント　16・22）

ここで私たちは、二つのうちどちらかを選ぶ重大な選択に直面します。私たちは、主イエスの愛を受け入れるか、それとも拒むかのどちらかです。主イエスの愛を拒むことは、神の赦しを拒むこと、永遠のいのちを拒むことになります。その結果は、その人が、現在から永遠にわたってのろわれ続ける者になるということになるのです。

人間は誰でも死後、神の裁きの時、その座の前で必ず、次のどちらかの言葉を聞きます。「さあわたしの父に祝福された人たち。世の初めからあなたがたに備えられた御国を継ぎなさい」または、「のろわれた者ども。わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火に入れ」と。

そこで、4つの項目について、考えてみましょう。

1　「あなたは、わたしを愛するか?」という真剣な問いからくる痛みによって生じるところの真の悔い改め。
2　聖霊によって、信者は神の愛を持つ者となるという大いなる事実。
3　主イエスに祝福された者は、祝福を与える大切な使命を持つこと。
4　主の小羊を飼いなさいという命令。そして、この項目は、さらに、愛の必要、愛の行動、愛の覆う能力、愛による祈り、の四つに分けて考えることにします。

1　真の悔い改め

「あなたは、わたしを愛するか?」と、主イエスは、いつペテロに言われたのでしょうか。それは、主イエスがペテロを、弟子としてお呼びになった時ではなく、ペテロが、主イエスを拒んだ後でした。

　すると彼は、「そんな人は知らない」と言って、のろいをかけて誓い始めた。
（マタイ　26・74）

この恐るべき罪の後で、主イエスはペテロに向かって、「あなたは、わたしを愛するか?」とたずねられました。主イエスは、ペテロに向かって、漠然とした愛についてたずねられたのではなく、具体的に「あなたは、わたしを愛するか?」とおたずねになったのです。主イエスを拒んだことによって、ペテロは、主イエスが深く悲しんでおられることをよく知っていました。ですからこの問いは、ペテロの心に深い痛みをひき起したのです。また、ペテロが主イエスを拒んだ

ことによって、主イエスの心にも痛みを与えたのでした。

もちろん主イエスは、ペテロが本当にご自分を愛しているのかどうかご存知ないためにおたずねになったのではなく、ペテロが主イエスを三回も拒んだことによって、どれほどそのお心を痛ませたかを、ペテロに分らせるために、このようにおたずねになったのです。

ペテロはこのイエスの問いによって、あまりにも深く心を刺し通され、もはや完全に砕かれた状態に置かれたのでした。主イエスは、このペテロを回復させるために、何という忍耐、何という確信、何という配慮をお持ちになっていたことでしょう。主イエスは、適切な時期が到来しないうちに、あのような質問をなさるようなことは決してありません。

私の場合もそうでした。最も適切な時を選び、私に向かって「あなたは本当にわたしを愛しますか」とおたずねになりました。主イエスは、私、が、主イエスを愛することを期待しておられ、また要求しておられるのです。主イエスは、私の奉仕や能力や時間よりも主イエスに対する私の愛を望んでおられるのです。

私もまた主イエスからこのように問われた時、深い心の痛みを覚えました。私が経験したこの心の痛みは、あまりにも大きかったので、そのほかの心配や不安は、すべて消えてなくなってしまったほどでした。私は今まで、主イエスをほんの少ししか愛しませんでした。私はもっともっと主イエスを愛したいと思いました。私は、主イエスを、すべてのものに優って愛していると言いたかったのです。

しかしその瞬間にわかったことは、主イエスが本当に望んでおられるのは、この問いによって

私の心が砕かれることでした。主イエスは、私の肉のうちに、良いものが何一つ宿っていないということ、そして朝から晩まで、全く自分勝手な生活をしていることを私が知るようになるそのことを望んでおられたのです。したがって、主イエスに完全に明け渡された生活こそ、一番大切であるということに私は気がつきはじめました。

そこで私は次のように自問しました。主イエスに対する私の愛は、いかなる困難な時にも変わることのないものなのだろうか。主イエスに対する愛とは、主イエスだけを見つめるという、私と主イエスとの間には、何一つ介在することが許されないものなのであろうか。つまり主イエスを愛する者にとっては、主イエスだけがすべてのすべてとなり、その他のものは、ほんのさ細なものになるということなのです。

このようにして人間は、主イエスに引き寄せられ、あらゆる問題の重荷から解放されていくことができるのではないでしょうか。

主イエスに対する愛は、すべてのものに優って一番大切なもの。私は義務感や功利性からではなく、ただただイエスを愛するということにだけもとづいて行動しているだろうか。もし人間が他のある人を本気で愛するならば、その人を忘れるようなことはないはずです。というのもその愛が、すべての根底にあって、すべての言動を規定するからです。そのように私たちは、主イエスを愛すべきではないでしょうか。主イエスに対する愛を、生活の中心に置かなければなりません。ですからパウロは、

主を愛さないものは、のろわれよ。（Ⅰコリント　16・22）

と、言わざるを得なかったのです。

主の現われを慕っている者には、だれにでも義の栄冠を授けて下さるのです。

（Ⅱテモテ　4・8）

と、あります。義の栄冠を授けられることは、私たちが、主の現われを慕っていることによって実現されます。主を愛さない者は、主の現われをも慕いません。

主イエスに対する愛によって、私たちは、裁きの日に喜んで主イエスを迎えることができるのです。愛は裁きを恐れず、その報いとして、主イエスと、顔と顔とを合わせ会う時を、待ち望んでいるのです。

ペテロもまた、悔い改めと回心によって、自己追求的な生き方から解放され、本当に主イエスを愛する者となりました。

なぜ私たちにとって、自分の持っているものを捧げることが、それほどむずかしいのでしょうか。その理由は、主に対する私たちの関係が正しくないからです。マタイの福音書十九章二十一節から二十二節には、金持ちの青年のことについて記されていますが、彼は、主イエスよりも、自分の財産を愛したのです。私たちが真心から主を愛する時、持っているすべてを主イエスに捧げることが、最大の喜びとなります。このように捧げた後には、取られて損をしたというような思いはまったくなく、ただ喜びに満ち溢れるのです。主イエスに対する愛を大切にしない者は、彼の弟子となるにふさわしくないばかりか、その資格もありません。主イエスを第一にしない者、すべてにまさって主イエスを愛さない者は、哀れな者です。

その人は、主イエスを愛する者に与えられる祝福を逃してしまうからです。主イエスはペテロに三度もおたずねになりました。ペテロは悲しくなりました。主イエスは、私に対しても、何度もおたずねになったのです。私のために示してくださった主の十字架上の御わざを、私が心の底から痛みをもって感ずるにいたるまで、問い続けられました。主イエスは、私がペテロと同じように、「主よ、あなたはすべてをご存知です。私があなたを愛しているということをも、あなたはご存知です」と答えることができるまで、問い続けられました。主イエス、あなたは私の心の奥底をご存知です。私はあなたに、何も申しあげることがありません。

私たちは愛しています。神がまず私たちを愛して下さったからです。（Ⅰヨハネ　4・19）

私は、主イエスを愛さざるを得ません。なぜならば、私は、主イエスが十字架上で死んでくださり、甦（よみがえ）ってくださったことを通して、はかりしれない罪の赦しと、限りない愛をいただいているゆえ、主イエスから離れることができないからです。

主イエスは、私たちにも、「あなたは、わたしを愛するか？」とたずねておられます。私たちはこの問いに対して、冷淡に、無関心にしていることができるのでしょうか。もしそうであるならば、それは私たちが、主イエスをまだ知らないということの証拠です。しかし、この問いによって、悔い改めに導かれるならば幸いです。

2　神の愛を持つ者

次に、聖書によって、キリスト者は神の愛を持つ者となるという大いなる事実について、考えてみましょう。

私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。（ローマ　5・5）

私たちが聖霊を受けると、主イエスは私たちと一つになってくださり、その結果、主の愛が私たちを通して明らかにされます。まことの回心が行なわれるとその時、愛する能力も与えられます。すなわち聖霊を通して、神の愛が与えられるのです。個人的に体験された神の愛にこたえて主イエスを愛する愛こそは、本物なのです。人は、愛を学ぶことはできません。ただ神ご自身だけが、私たちに愛を教え、愛を経験させることがおできになるのです。

本当に愛を知った者は、十字架について語らざるを得ない、という歌があります。まことの愛を知ろうと思うならば、主イエスの十字架のもとにいって下さい。主を求める者は、主を見いだすようになり、主を見いだした者は、主を愛さざるを得ないのです。

ペテロはこのまことの愛を、主イエスのご生涯と十字架の死を通して知るようになりました。ペテロは、主イエスの問いによって、救う愛を実際に体験したのです。いまやペテロのうちにはまったく新しいものが生まれました。すなわち、自信に満ちた思いではなく、主に対する燃えるような想いが生まれたのです。主イエスに対する愛が、それほどまでにペテロの心を満たしたのでペテロは主に対して「はい。私はあなたを愛します」と答えざるを得なかったのです。

いまやペテロは、主イエスに根ざし、主イエスによって燃え立たせられた愛を持つようになりました。神の愛こそ、人間が経験することが出来る最大の力、また最高の特権です。

私たちの心のうちに注がれた神の愛とは、次のような愛です。自分のことをまったくかえりみず、主イエスのためにすべてを捧げ、犠牲にする愛、そして価値なき者へ、重荷を負っている者へ、負債ある者へ、さらには敵に対してさえも注がれる愛です。それは、十分に応えることも感謝することもできないほどの大きな愛です。崇拝しつつ、私たちが、主イエスを見つめれば見つめるほど、また、主の愛を考えれば考えるほど、主に対する感謝に満ちた愛によって、私たちの心は燃え立たせられて、どのような状況のもとにあっても徹頭徹尾、主イエスに信頼できるようになるのです。その時私たちは聖霊によって支配されるようになり、神の愛をもって愛するようになれます。

3　祝福を伝える使命

祝福された者は、祝福を与える者になるという大切な使命について考えてみましょう。

別な言葉で言えば、主イエスを信じる者は、主の愛を通す管（くだ）となるべきです。しかし、多くのキリスト者は、いつも愛を取るだけで、何一つ他の人に与えることをしません。なぜならその人たちは、主イエスと正しく結びついていないからです。私たちが、主から祝福を受けると、自分では気づかなくても、必ず他の人の祝福となるのです。もしそうでなければ、私たちと主との結びつきが、何者かによって妨げられているのです。私たちの使命は、主イエスと完全な結びつき

を保つことです。なぜならその結果、他の人が主に対する飢え渇きを持つようになるからです。私たちは、主イエスとの結びつきによって、あらゆる束縛から解放されます。

主に対する愛は、あらゆる力の源であり、主に奉仕する原動力です。この完全な結びつきから生み出されている愛の前に、不可能となるものは何一つありません。そしてこの愛は、すべてを信じる愛、すべてを待ち望む愛となり、主イエスに対する愛のゆえに、滅びゆく魂を救うためにすべてのことを行なうことができるのです。私たちが、神の愛に満たされることなく、神の愛を他の人に宣べ伝えないなら、主のために全世界を獲得することはできません。

私たちは、主イエスの愛によって動かされるべきです。しかし、主イエスの愛を現わす者は、非常にまれな存在となってしまいました。主イエスに対する愛は、私が神の子であるということの証拠です。主イエスに対する愛がなければ、私たちは真理を宣べ伝えることはできません。主なる神は、私たちのために考えられないほどの愛を備えておられます。その目的は、その愛が、私たちを通して他の人たちに伝えられるということです。

この主の愛を、他の人にも与えられることができるようになるためには、私たちがこの愛を体験的に知る、つまり信仰によって自分のものとしなければなりません。

愛のうちに歩みなさい。（エペソ　5・2）

愛のうちに歩む、ということは、信者が時々しか、「互いに愛し合いなさい」という神のいましめを実行せず、時々しか、主イエスの愛を覚えないというようなことではないのです。愛のうち

を歩むということは、主イエスの深い愛を常に覚えているがゆえに絶えず主に喜ばれたいと切に願うことです。私たちが、自分自身から目をそらし、ただ、主イエスだけを見つめる時にのみ、主なる神の愛は、私たちの生活を通して現わされるのです。

主イエスに対する愛によって私たちは平和を持つ者となります。すなわち、主イエスご自身が私たちの平和となってくださるのです。主イエスに対する愛は、忍耐をもたらします。それは他の人の困難を共に担い、耐えていく能力です。主イエスに対する愛は、隣人ばかりではなく敵に対してさえ親切になることを通して現わされます。また、まことの愛は誠実です。なぜならそれは、真実な神ご自身がその源だからです。御霊のもたらす愛は、主イエスの性質、特にその「柔和」なご性質です。

4　主の小羊を飼いなさい

主イエスは、ペテロの愛を確認した後、自分の受けた愛を他の人にも与えなさいとおっしゃいました。主イエスに対するペテロの愛は、他の人に仕える愛によって明らかにされました。

主のみわざをおろそかにする者は、のろわれよ。（エレミヤ　48・10）

ペテロは、自分が経験した愛、つまり主イエスの愛を、他の人々にも分け与えるべきでした。ですから主は、「わたしの小羊を飼いなさい」とペテロに言われたのです。次にもう少しくわしくこのことを考えてみましょう。

その一つは、「愛の必要性」です。

だれに対しても、何の借りもあってはいけません。ただし、互いに愛し合うことについては別です。（ローマ 13・8）

互いに愛しあうということは、決して完成されることのない、終わりのない義務であり、またどれも「私はもう充分に愛したから、これ以上愛する必要がない」ということができないことなのです。主イエスの愛は、満ち溢れる泉の流れのように豊かなのですから、私たちの愛もまた、豊かに流れて行くべきです。

愛は決して絶えることがありません。（Ⅰコリント 13・8）

私たちは絶えず愛し続けるべきです。愛することは、主なる神のみ心です。主は、私たちに愛する力をお与えになっていなかったなら、「愛しなさい」と命じられなかったはずです。人間は、自分自身を愛するように、主イエスと他の人々を愛する時、最も大いなる喜びと満足とを経験するのです。だからこそ主イエスは「愛しなさい」と私たちに命令して下さるのです。私たちはこのイエスの命令に従うことができます。なぜなら私たちは主イエスの愛を経験したからです。

私たちは、主との正しい関係を持っているなら他の人とも正しい関係を持つことができます。すなわち私たちは、他の人を愛することができるのです。主イエスは、ご自分が重荷を担い、忍耐し、悩み、苦しみ、死んでくださったことを通して、真の愛がどのようなものであるかを、私

たちに示してくださいました。ですから、自分の力で愛そうとすべきではなく、まず主イエスによって愛されるべきです。

あなたがたに新しい戒めを与えましょう。あなたがたは互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、そのように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。もしあなたがたの互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。（ヨハネ 13・34、35）

私たちが互いに愛し合うことこそ、最も良い伝道の秘訣であり、また、主のために実を結ぶ秘訣なのです。私が、病院で一緒に働く同僚の看護婦さんを、心から愛することができなければ、主に対する私の関係は、どこか、おかしいに違いありません。患者さんたちは、私たち看護婦が主イエスの弟子であることを知ることができず、その結果、主イエスご自身を見いだすこともできないでしょう。私たちが一緒に生活しながら、互いに心から愛しあい、重荷を負いあい、赦しあい、助けあい、相互理解しあわないならば、すべては、力のないものとなります。ですから私は、主イエスが愛してくださったように、愛しているかどうかを、吟味しなければならないと思います。なぜなら、人間は、神の愛でもって、愛されることを期待しているからです。だれでも、愛されたいと願っています。人間が、最も必要としているものは、愛され、愛することにほかなりません。

愛の力によって、克服され得ない障害物は、ひとつもありません。しかし、それは神の愛でな

ければなりません。人間の愛は、比較にならないほど、小さなものにすぎません。そして主に対する真の愛、また人間に対する真の愛は「正しい行ない」「永遠に残る実」、そして「イエスの栄光」をもたらすところのものです。また他の人に真剣に受けとめられるものです。けれどこの愛は、自分がいつも確保しておくことのできるような持ち物ではありません。「私はもう充分な愛を持っている」と思いこむようになる時こそ、本当は、真の愛を持っていないことを暴露しているにすぎません。真の愛は、聖霊によって与えられるものであり、聖霊の導きに服従するとき初めて、その愛は私たちを通して働くのです。

次に、「愛の行動」について考えてみましょう。

キリストの愛が私たちを取り囲んでいる。（Ⅱコリント　5・14）

主イエスが働いてくださって初めて、愛が生まれ、愛が現われるようになるのです。そして神の愛の現われとは、主イエスの死にほかなりません。「この愛が、私を圧倒しました」とパウロは書いています。すなわち私たちは、神の愛によって囲まれ、保たれ、そして動かされるのです。愛が私たちに押し迫っているのです。ここで、取り囲まれている、あるいは押し迫られているという言葉は、主イエスが私たちを支配しておられるので、私たちはもはや、自分勝手なことができない状態に置かれている、ということを意味しているのです。聖霊によって信者に与えられた神の愛は、決して絶えることなく、どのようなことがあっても愛し続けることができる愛です。主の愛によって動かされている者は、主に結びついている者であり、その結果、自分勝手なこと

ができず、愛さざるを得ない者とされているのです。

さらに、愛は多くの罪を覆う、つまり「愛の能力」について考えてみましょう。言い替えるなら「他の人を、あるがままの状態で受け入れ、愛する」ということです。その人に欠点がなくなり今の状態が変えられるまでは愛さないというように考えるなら、それは悪魔の勝利です。あるがままの状態でその人を愛すべきです。主イエスの愛をもって人を愛することは、あるがままのその人を受け入れ、それからその人をまだ見ていない目標へと導いていくことを意味しています。

主イエスはかつて、ペテロがご自分を拒み、恥ずべきほどにみじめな状態におちいることを、知っておられましたが、それにもかかわらずペテロをお見捨てになることはなさいませんでした。そして最後まで愛し適されたのでした。真の愛とは、このようなものなのです。

最後に、「愛による祈り」を考えてみましょう。

主イエスに対する真の愛は、真剣な祈りとなります。ただ、真に愛する者だけが、祈りのききとどけを経験します。愛する者は、いつも祈りの課題を豊かに持っています。神は、私たちが他の人のために祈ることを通して、その人に祝福を与えてくださいます。私たちが、他の人のために真実な愛をもって祈るなら、その人はたとい私たちを憎んだりのろったりしていたとしても、私たちの友なのです。愛する者は、いかなる時にもまず主と語りあい、それからその人と話しあうのです。

主に対する愛がなければ、私たちは決して、主イエスのおられるところに行くことができません。天国に行こうと思えば、まず、この地上で主イエスを愛するべきです。主イエスを愛する者は、

主イエスを待ち望み、主イエスの再臨を喜んで期待しているのです。

ここまで、リンデは同級生の前で学びを行いました。リンデは、ただ主なる神の恵みと憐みだけに依り頼みました。ですから彼女は、祝福されたのです。リンデは自分のうちに、良いものは無いことを知っていました。すべて、自分自身の人間的な努力は、敗北に終るとわかっていました。それゆえに、彼女は意識して、主イエスに全幅の信頼を置きました。彼女は、人間の前を歩んだのではなく、主なる神の前を歩みました。ですからリンデは主の祝福をいただいたのです。

十字架におけるイエスは、全人類の罪と債務を、すべて、ご自身の上に引き受けて下さいました。しかし、このイエスは、甦り(よみがえ)を経験なさいました。主は生きておられ、すべてを支配しておられます。この主イエスに属するものとなることこそ、最高の幸せです。

人間に信頼し、肉を自分の腕とし、心が主から離れるものはのろわれよ。

（エレミヤ　17・5）

主に信頼し、主を頼みとする者に祝福があるように。その人は、水のほとりに植えられた木のように、流れのほとりに根を伸ばし、暑さが来ても暑さを知らず、葉は茂って、日照りの年にも心配なく、いつまでも実をみのらせる。（エレミヤ　17・7、8）

人を恐れるとわなにかかる。しかし主に信頼する者は守られる。（箴言　29・25）

三　聖書メモ

よく知られたドイツの歌の一節に、次のようなものがあります。

神のみことばは、真理であり、永遠（とこしえ）に立つ。
たとい山は揺れ動き、国民（くにたみ）は倒れようとも。
神のみことばは、真理であり、すべての悩みにおける慰めである。
また、みことばこそ永遠に至るまで、私たちの証しの灯（ともしび）である。

リンデは神のみことばに依り頼み、支えられました。このみことばから、彼女は力、慰め、導きを与えられました。看護学校では、聖書に関する授業はありませんでしたが、彼女は自分で熱心に聖書を読みました。なぜなら、彼女はみことばなしに、人生を正しく歩むことができないということをよく知っていたからです。彼女が非常にきれいに書いた聖書メモは、リンデが内面的に何を経験したかを示しています。そしてまた、彼女が人生の悩み、苦しみ、困難に対して、どのような態度を取っていたか、さらには、主イエスが彼女の現実であり、彼女にとって、すべてのすべてであったことがわかります。

以下に、リンデが書き残した聖書メモをご紹介いたします。

リンデの聖書メモ

あなたがたが主なる神に従順に従うならば、他の人たちも祝福されます。ある人々は口が重く主のために語るべき時、非常に困ってしまいます。その時、主が私たちの舌を造って下さったということ、また、私たちの態度によっては、造り主の名をけがすことになるので注意しなければいけないこと、を知る事は大切です。口が重いのは、おしゃべりほど問題ではありません。口数が少ないのは、おしゃべりよりもはるかに多くの祝福のもととなるのです。もし主なる神が私たちとともにおられるなら、私たちは雄弁でなくても、説得力や話術に欠けていても、多くのものを持っています。主のご臨在は、力を意味します。もし主が私たちとともにおられるなら、私たちは超人間的な力を持っているのです。ですからためらわずに主イエスについて語りましょう。

私の人生におけるすべての変化は、決して変わることのない主からやってきます。主なる神はしばしば、主が高めたいと思う人々をまず最初に低くなさいます。主の道は常に最善の道です。私たちが砕かれれば砕かれるほど、ますます私たちは栄光へと高められます。主よ、あなたは私を打ち砕いて下さり、私の惨めさと罪とをはっきりと分らせて下さいました。どうか、この経験を祝福して下さいますように。

私の人生の目標は、主なる神をほめたたえることでしょうか。主なる神は言われます。「わたし

をたたえる者を、わたしはたたえよう」と。私は、しばらくの間、人間からの誉れを受けないかもしれません。しかし、私が主のみこころを行なうことだけを大切にする時、主は私をたたえて下さいます。主なる神は、私たちの従順によってたたえられます。

すべてのことを、主がお定めになります。たとえば、主が私たちに六つの困難を定めておられるならば、その六つの困難は必ずやってきます。しかし六つ以上ではありません。主が私たちに七つの困難を定めておられるならば、その七つの困難によっても私たちは打ちのめされません。まだ、救い主であり慰め主である主イエスを知らない人々は心配するでしょうけれども、私たちはその心配や恐れから解放され、主を見上げることが許されています。私たちは、あたかも地獄の深みに落とされるような、深い憂うつに陥ることがあるかもしれません。しかし、私たちは、そのような状態にとどまっている必要はありません。主は私たちをお忘れにならず、敵の手に渡すようなことはなさいません。希望のうちに安んじましょう。確実なことは、私たちが死や暗やみや絶望の代りに、いのち、光、解放を経験する、ということです。

自分自身が悪いと正直に認める人々を、主なる神は必要としています。なぜなら、そのような人々だけが主なる神によって用いられるからです。神の前に自らを低くすることが大切なのです。

重荷は確かに重いものです。しかし、どうかその重荷を全能なる神にゆだねて下さい。その重

荷は確かにまだあなたの上におかれていますが、あなたひとりだけの上におかれているのではありません。というのは、あなた自身主イエスによって担われているのですから、その重荷はあなたにとって祝福となります。なぜなら、その重荷を通して、あなたは大いなる主イエスの恵みと憐れみを経験することができるのですから。どうか今日、あなたのすべての悩みを主に打ち明けて下さい。そうすればあなたは解放された者となり、あなたの重荷を担って下さる大いなる主イエスのほめ歌を声高らかに歌うでしょう。

「私には、友だちも助け手となる人もいません」とあなたは言います。しかし、それは幸いなことです。主なる神が、あなたの友また助け手となることを望んでおられるからです。どうか主イエスを呼び求めて下さい。主はあなたの叫びを聞き、あなたを救って下さり、豊かに恵んで下さいます。この恵みに富みたもう主なる神を体験的に知って下さい。主は、私を決してお捨てになりませんでした。その主は、あなたをも決してお捨てになりません。どうか、へりくだって、求める気持で主イエスのみもとに来て下さい。そうすれば、主は必ずあなたの助け手となって下さいます。主イエスは王ですから、あなたを欠乏させるようなことはなさいません。

主なる神は、私たちが大いなる祝福を求めることを望んでおられます。私たちの必要は、私たちが主に近づくことを余儀なくさせます。私たちの弱さは、私たちが主の助けを求めることに役立つはずです。不安というものがあるからこそ、私たちは、ちょうど子供が父親をしたうように

助け手である神を呼び求めるのです。主は祈りを聞き届けて下さいます。

主に対するゆるがない信頼こそ、私たちの一生を特徴づけるものとなるべきです。主はいつも私たちに最善をなして下さいますから、他のものが私たちを損なうこともお許しになりません。私たちの神は、未知の将来をも知っておられる主です。私たちはどんなことが起ころうとも、主なる神を信頼する決心をしています。最悪のことが起ころうとも、私たちは主なる神を信頼します。主は、すべてのものに勝っておられます。ですから、私たちは恐れる必要がありません。主は生きておられます。

あなたはすでに、自分自身を犠牲にする備えを持っていますか。捧げ物の上に下る火を恐れてはいけません。また自分自身に同情しないで下さい。主なる神は、主の喜ばれない、あらゆる欲と結びつきから、あなたを解き放ちたいと望んでおられます。この火の試練のあとには、もはやあなたを圧迫したり、悲しませたりするものは、何一つありません。あなたも、主なる神も、すべての目に見えるものを超越しているのですから。

多くの苦しみは、主に仕えるようにと私たちを導きます。というのは、私たちはこの世には生きがいのあるものは何一つない、ということを知っているからです。しかしそれと同時に、将来の世界に対する希望が、私たちに熱心、勤勉、自己否定をもたらします。うまくいっているとき

はかえってこの世の楽しみのために、私たちは将来のことを真剣に考えなくなり、なまぬるい、怠惰な快楽を求めるようになってしまいます。おお主よ、私たちは、私たちの苦しみや悩みに対して、あなたに感謝します。というのは、それらの苦しみや悩みは、私たちを常に目覚めさせてくれるからです。

主イエスは、鉄のかんぬきをへし折ります。確かに、主はそのことをして下さいます。どこにいても、なにものかに束縛されている人たちは、闇から光へ、束縛から解放へと導かれます。主イエスは、まことの自由を提供しようと、束縛されている人々に告げ知らせておられます。あなたが、今、まさに苦しみ、疑い、恐れのきずなにつながれて悩んでいるとしても、そのあなたを主は解放して下さいます。あなたに自由を与えることこそ、主イエスの切なる願いです。あなたは自分の力で、自分自身を解放することはできません。しかし、主はそれをして下さいます。どうか主に信頼して下さい。そうすれば、主はあなたの解放者となって下さいます。鉄のかんぬきがあっても、主なるイエスを信じて下さい。そうすれば、悪魔といえども、あなたを抑えることはできません。今、あなたが主イエスと、主の豊かな恵み、主の救う力を信じたいと心から願うなら、罪も、絶望も、あなたを束縛することはできません。

まことのキリスト者は、主なる神を恐れます。ですから神の守りと祝福をいただくことができるのです。キリスト者の住居（すまい）は、愛の場であり、聖なる訓練の場、そして光の場であるべきです。

すべてのことにおいて、光のうちを歩みましょう。職場において、他の人を判断する場合、日々の歩みにおいて、常に光のうちを歩みましょう。なぜなら、正しい神は、正しくない行動を祝福できないからです。

私たちは、まず主イエスを求め、愛すべきです。というのは、主はそのとき必ずご自身を現わして下さり、私たちに限りなき愛を与えて下さるからです。すでに若い時から、主イエスとともに歩んでいる人々は、幸せ者です。早く求める者は、確かに早く見い出す者となります。自分の生活の中で主イエスを第一とする者は、幸いです。何物も、いかなる人も、主イエスと比べ得るものはありません。

主なる神のみことばは、何と尊いものでしょうか。みことばは、あらゆる病気や傷に対する薬です。主は言っておられます。「勇気を出しなさい。恐れてはいけません」と。多くの人々は、さまざまの困難によって打ちのめされてしまっています。しかし、本当にその必要があるのでしょうか。私たちの不安は、根拠のないものではないでしょうか。私たちの苦しみは、永遠の幸せをもたらすものではないでしょうか。あらゆる不安の原因は、私たちの不信仰です。恐れは弱さを伴います。私たちは思い煩いによって、全能なる神を汚すことになります。神を汚すものから遠ざかりましょう。心配は不必要です。私たちの心配は誰かのために役立ったことがあったでしょうか。何か思い煩ったことによって助かった経験を持っているというのであれば、どうぞ大いに

心配して下さい。しかし、そのことが証明されないかぎり、恐れることをやめ、雄々しくあろうではありませんか。

大切なことは、私たちが信仰によって物事を見ることであり、すべてこの地上の目に見えるものを、はるか下の方に見るということです。そうすれば、私たちはもはやこの地上の目に見えるものに束縛されず、神の立場から物事を判断することができるようになります。その時、この地上における私たちのすべての心配は、なんと、さ細なものになるでしょう。私たちは常に上にあるもの、主イエス・キリストを思うべきです。あなたがたはこの世のものではない、と主イエスは弟子たちに言われました。このようなしっかりとした信仰に基づくとき、私たちを惑わすこの地上のすべてのことがら、一時的な目に見えるさ細なことがらにとらわれず、主を見上げることができるのです。私たちは、なんとしばしば、どうでも良いことに囚(とら)われ、さ細なことを思い煩っていることでしょう。この地上には、キリスト者の住居(すまい)はありません。あなたは本来キリスト者としては、この世のものではないのです。この地上にある限り、私たちは旅人であり、御国に召されて初めて、本当のふるさとに安らうのです。

あなたが自分自身はみじめであり、ふしあわせであると感ずる時、ひざまづいて祈りのうちにゲッセマネで悩んで下さった御方、すなわち主イエスのことを思い出して下さい。そうすれば、あなたは、「自分の悩みは主イエスの悩みに比べて、取るに足りないものです」と言わざるを得な

いでしょう。十字架こそ、不幸からのただ一つの逃れ道です。十字架につけられた方を見上げることは、幸せをもたらします。主をより良く知ることのできる人は、もっとも幸せな人です。

どうか、主があなたに対して今までですでにして下さったことを、考えて下さい。主は、あなたに、主の恵み、力、忠実さを体験させて下さいました。あなたはなぜ、今、主に信頼しないのですか。あと数ヶ月後に、主イエスは再臨なさるかもしれません。また、あなたが召されるかもしれません。その時まで、主イエスを信頼し続けようではありませんか。絶望するとき、どうか主イエスのことを覚えて下さい。そうすれば、あなたは慰められます。

主なる神は、あなたがいかに若く、そしてあなたの知識や人生経験がいかに少ないかご存知です。しかし、主があなたを遣わそうとされる時、あなたは主の招きを退けてはなりません。神はあなたの弱さを通して、ご自身のご栄光を現わしたいと思っておられます。主は私と語られるとき、私を強めて下さいます。私が自分の時間を怠惰に過ごすことは、みこころではありません。主が私を強めて下さいますから、私は恐れず、喜んで主に従います。そうです。主よ、あなたが私を遣わして下さったのです。ですから、私はあなたの力により頼みながら従います。あなたのご命令どおりに私は従います。あなたは私を通して勝利を得たいと望んでおられますから。主なる神により頼む者は、神のご臨在を経験します。闘いと試練の時がやって来るとき、神は常に私たちのそばにいて下さいます。

生けるまことの神は、真剣な祈りに対して、必ず答えて下さる、と約束しておられます。神は主を呼び求める人々のために、すばらしいことを備えていて下さいます。まだ一度も見たことがないようなもの、夢にも見たことがないようなことを、主は祈り求める人たちのために実現して下さいます。主は驚くべき恵みによって、私たちを祝福したいと願っておられます。主なる神は私たちが主に呼び求めることだけを望んでおられます。ためらわず、喜んで私たちの願いを主に申し上げましょう。

神に敵対するこの世は、ダニエルの三人の友人を燃える炉の中に投げ込むことはできましたがただ一つのものを、この三人から奪うことはできませんでした。すなわち、それは神との交わりです。そしてこの燃える炉の火は、普通の時よりも、七倍も熱くされましたが、主はともに燃える炉の火の中に入って下さいましたから、炉の中には、三人ではなく、四人いたのが見えた、と聖書に記されているのです。これこそ、キリスト者の心の奥底にある喜びの秘訣です。すなわち主との交わりがあれば、それだけで十分なのです。本当のキリスト者は、それ以外のものを決して必要としません。

お互いの間にある憎しみや隔りを克服するための話し合いは、どうしても必要なものです。他の人との関係が正しくない限り、どんなに祈り、聖書を読んでも、それは意味がないだけでなく重荷であり、罪です。

主イエスによって生かされ、満足させられることを経験できるのはどのような人でしょうか。それは、思いにおいても、言葉においても、行いにおいても、ただ主だけを喜ばせたい、という切なる願いを持っている人です。

キリスト者が試練によって打ちのめされ、失望してしまうなら、また喜んで患難に耐えるための恵みを主に求めないなら、またいつも主にあって喜ぶことができるための上からの力と慰めを天の父なる神に求めないなら、結局そのキリスト者は、主を拒み、主のみ約束を真剣に考えていないことを、自分の行いによって表わしていることになるのです。主なる神を信じている人は、次のように言うことができます。

しかし、私は主にあって喜び勇み、私の救いの神にあって喜ぼう。（ハバクク　3・18）

人間は、自分自身の努力で自分自身を救うことができません。しかし、救っていただくことができます。主イエスを受け入れることができるのは、その根本において、主なる神が私たち人間を受けいれてくださるからです。私たちが主なる神の救いを拒むとき、それはひとえに、私たちの責任です。おぼれかけている者に救命具が投げられ、そのおぼれかけている人が救命具をつかみ、しかも全力を振りしぼってその救命具にしがみつき、そのことによって命びろいをした人は「私は自分を救った」と言うことはできず、「私は救われた」と言わなければなりません。それと同時に、その救われた人は、次のようにも告白するにちがいありません。「私は全力を振りしぼって救

命具にしがみつかなかったならば、その結果死んだとしてもそれはまったく自分自身のせいだったでしょう」と。救われたということは、恵みです。しかしおぼれ死ぬことは、自分のせいです。すなわち債務です。回心もまた、行いではなく、恵みです。しかし滅びてしまうことは債務であり、まったく自分自身のせいなのです。

キリスト者は、常に、料理に塩が用いられるように、地の塩として、周囲の者に影響を及ぼす使命を持っています。塩である、ということは大切なことです。その使命を満たしたいと思う者は、溶けてなくならなければなりません。すなわち、自己否定なしには、私たちは主の証人とはなりえません。

主イエスに対するまことの愛の証拠は、自分をまったく無にすることです。私たちの献金や犠牲を知っているのは、人間ではなく、ただ主お一人であるべきです。私たちが捧げるものは良い行いではなく、愛による献身と信仰の表われです。

主なる神は、私たちが必要とするだけの抵抗力を、どんなに困難な状態においても、必ず私たちに与えて下さると、私は確信しています。しかし主は、私たちが自分自身にではなく、ただ、主なる神にのみ依り頼むようになるため、その抵抗力をあらかじめ与えることは決してなさいません。このことを本当に信ずるなら、将来に対する不安はすべてなくなるはずです。

まことの神の子は、絶えず勤勉で喜んで働く人間であるべきです。天の父なる神との信仰のきずなは、隣人との愛のきずなが確立され他人との関係が整えられているときにのみ存在します。

絶えず祈ることは、新しいいのちの本当の証拠です。ただし、祈るとは、朝晩二、三分だけ祈ることを意味するのではなく、生活そのものが祈りによって動かされることを意味しています。このような日常生活は、主なる神との対話であり、この対話は絶えず永遠に続きます。死によってさえ、この神との対話は中断されません。

主イエスは、確かに超人間的なことがらを要求しておられます。しかし、人間に不可能なことでも、神には可能です。すなわち、主にあって可能であり、主により頼み、主に結びついていることによって、不可能が可能となります。人間は無であり、神はすべてです。人間は何もできず神は全能者です。キリストにある豊かな神の富は、ただ自分自身を大切にせず、無にし、なにも持たず、自分自身では何もできない人にのみ、約束されています。

主なる神は、みことばによって全世界を創造なさり、またみことばによって全世界を今日まで保っておられます。その同じみことばによって、主イエスは私たちを今日も助けて下さいます。みことばで新しいいのちを呼び起こして下さり、絶えず肉体とたましいと霊に働きかけて下さいます。このみことばを受け入れる者は、新しくされ、主イエスに似た者に造り変えられます。

主イエスは、弟子たちがただ主イエスだけに結びつき、しかも、完全に結びついていることを要求しておられます。主イエスがご自分に従って来るようにと招かれるとき、私たちはすぐに従わなければなりません。さもなければ遅すぎてしまうでしょう。

私は、一度でも他人の悪口を言い、主を悲しませるよりは、絶えず自分自身が他人の悪口で苦しめられることの方が望ましいと思います。

主なる神のみことばが力強く宣べ伝えられるとき、私たちは最後の決断を迫られます。そして最後の決定は、私たちがキリストに対してどのような態度を取るかによって、いのちか、死か、救いか、滅びかに定められます。

私たちは、私たちの前が真暗で、主の導きもまったく分からなくなってしまうとき、神にあって安らぐことを学びます。たとい、私が主の力を全然感じることができないときでも、主は私を闇の中から目的地に導いて下さいます。

右や左を見たり、いろいろな人を見たりすることなく、主なる神が一人一人に示して下さった道を歩むことが大切です。すなわち、自分の目標や願いを大切にせず、ただ父なる神のみこころに従うことが大切です。ひかえめであるがはっきりとしたものを持ち、自分自身の要求はしない

が妥協せず、謙遜ではあるが目標に対する確実な歩みをすること、そしてまた、あらゆる妨げや困難にもかかわらず、主に従順に従うことが大切です。

私たちは衰えなければなりません。自分を否定しなければなりません。そのとき初めて、主は私たちの主となります。自分自身を正当化しようとせず、ただ神お一人だけが正しいと認めましょう。自分自身を大切にしないことによって、神だけを大切にしましょう。主なる神がお望みにならないことをし続けることをやめましょう。これらのことこそ、信ずることであり、従順に従うことであり、神のみことばを受け入れることです。もし人がイエス・キリストを信じられないと言うならば、それは、その人が本当に信じたいと思っていないからです。事情がどうであれ主を仰ぎ見つつ、信頼し続けましょう。

人が御子イエスに加えた恥、迫害、憎しみを、十字架は、はっきりと示しています。今日、この世と妥協せず、徹頭徹尾主イエスにだけ従い、この世の流れに逆らう者もまた、主イエスと同じ経験をします。

ひとたび主イエスを心の目で見た者は、もはや以前と同じ者ではありません。また目に見えるこの世のものは、私たちに対して、もはや以前と同じ影響力を及ぼすことはできなくなります。

人間に理解できない試練は、神がご自分の目標を達成するために取られた手段です。しかし、そのために主は、いつでも私たちの信頼を必要としておられるのです。従って私たちは次のことを覚えましょう。私たちの完成のための手段がどのようなものであれ、その背後には必ず主が立っておられるということです。これこそ喜びの源であり、「喜びなさい」という主のご命令の、根拠なのです。

主イエスに対して、あれをして欲しい、これをして欲しいとせがんだり、あれこれ要求しないようにして下さい。主がなすべきことは、あなたよりも、主のほうがはるかに良く知っておられます。どうか背後にひかえていて、主が語られるまで待っていて下さい。それから直ちに主のみことばに従って下さい。まことの従順は、必ずしも私たちの行為の中に表われるのではなく、ただ主のみこころだけがなりますようにという態度の中にのみ、見られるのです。

どうか主よ、なにがあっても、あなたが私に要求なさることを私がすることができるように、私を助けて下さい。私が一番気に入ったものを、私が選ぶことのないようにして下さい。私のわがままが入り込まないようにして下さい。主が何かをするように命令なさる時、そのことを行う力を私にお与え下さい。

主イエスに対するまことの献身的な愛は、周囲を尊い香りで満たします。愛は計算しません。

愛は惜しみなく与えます。愛は何が役に立つかを問いません。愛は愛さざるを得ないのです。

あなたが主なる神に従順に従うなら、主があなたに測り知れないほどの平安をお与え下さいます。神と私たちとの間に表われるあらゆる困難は、不従順から生じます。私は従順に従う時、患難をも喜ぶことができます。というのは、私は主がそのことをご存知でいらっしゃるということを知っているからです。また私は、主がすべての複雑な問題をどのように解きほぐして下さるか主の働きを期待をもって待ち望んでいます。

キリスト者の特徴は、主イエスに対する愛です。私たちがキリストを愛する時、すべてはうまくいきます。正しく生きるため、喜んで苦しむため、また希望を持って死ぬため、私たちは主イエスを心から愛さなければなりません。私は生きている限り、主に対する愛からすべてのことをしたいと思います。

人は心から悔い改め、今までの生活と訣別することによって、救いに至る信仰に導かれます。

今は重荷にあえぎ、苦しみに満ち、理解できないことであっても、すべてのことは相働いて、永遠の救いに至らせます。

主の恵みは力の源です。主により頼む者の特徴は、まごころからなる献身、自分を顧みない労苦、そして喜んで苦しむことです。

今日の混乱した世界の中にあっても、私たちは堅く立ち、動かされることなく歩むことができます。なぜなら、私たちは主イエスを知っているからです。この地上では、私たちは常に主イエスに守られており、その主イエスは、まもなく、私たちをみもとに引き寄せて下さいます。しかし私たちが動かされることなく、堅く立つことができるのは、自分自身のカや努力によるのではなく、ただ私たちが主を信頼し、主を見上げつつ、どのような状態の時にも、主により頼むことによってのみ可能なのです。

私たちが自分自身のために生きるのではなく、また自分自身の名誉を求めるのでもなく、ただ主イエスだけが明らかになり、大いなるものとなられることが大切です。キリストの力を体験するのは、ただ自分の弱さを意識している人間だけです。主なる神の恵みは私にとって十分です。ですから、私たちは、私たちの神と神の恵みに信頼しましょう。主は、私たちの思い煩いを、私たちから取り去って下さらない時でも、私たちにその苦しみに耐える力を与えて下さいます。

私たちは、どうしてもっともっと主に頼らないのでしょうか。主は私たちの罪を赦し、私たちを祝福し、慰め、助け、生かし、解放したいと望んでおられます。主により頼むことは、私たち

の絶えざる願いでなければなりません。私たちが人間に頼る時、その人にとって大きな負担となり、捨てられるかもしれません。しかし、主だけを求める者は、主が決して変わることなく、主との交わりこそ、すべてのすべてであるということを体験します。

自分自身の弱さを認識することは、自分自身の能力に信頼するという危険から、私たちを守ってくれます。そして、すべての自己中心と傲慢をあとかたなく打ち砕いてくれます。

私はますます幼な子のようになりたいと思います。私そのものは強くなる必要がありません。なぜなら、私の父なる神は、力に満ちたもうお方であるからです。主イエスのうちにとどまり、安んじたいと思う者は、力を必要としません。ただ主イエスと結びつく時にのみ、実を結ぶことができます。

まもなく私たちはキリスト者として、すべての悩み、苦しみがなくなり、すべての涙がぬぐいとられることを経験するでしょう。私たちが生きているこの世界は、涙の谷です。しかし、この世は過ぎゆきます。将来には新しい天と地が与えられます。小羊の婚姻の時、私たちはもはや人間の堕落とその結果について、泣く必要はありません。限りなき喜びが、私たちの心を満たすでしょう。私たちの人生は、死によって終りになるのではありません。私たちは栄光に満ちた世界に向かって急いでいる者です。

Ⅲ

光を見上げて——宗教から救いへ——

第Ⅲ部は、すでに救いを受けておられるクリスチャンのために書きました。時はせまっており、終末のしるしは、福音的な教会の内部にも現われています。私たちがサタンの惑わし（マルコ13・22）に陥ることがないようにするためには、どのようなことがらに注意して信仰生活をおくる必要があるでしょうか。この問題について、私たちの集会が実際に体験したことがらを通して、考えてみたいと思います。

一　みこころに反する祈り

リンデの手術が終るやいなや、私たちは東京の兄弟姉妹に国際電話をかけました。東京の兄弟姉妹、とりわけ吉祥寺キリスト集会の兄弟姉妹は、リンデの病気のことを忠実に祈り続けていてくださり、私たちは手術の最中も、その祈りの支えを感じていました。

手術のおこなわれた日は、一九八〇年七月二十四日で、ちょうどその日は、吉祥寺キリスト集会において祈り会のもたれる木曜日でありました。そしてその晩、初めて祈り会に加わったひとりの婦人がおりました。その姉妹は、他の教会で信仰に導かれ、その日も、異言といやしが強調されている教会の集会に出席した後、その夜の吉祥寺の祈り会に加わったのです。祈り会には、四、五十人程の人々が集りますので、兄弟と姉妹の二つのグループに分かれて祈りが持たれ、なるべく多くの兄弟姉妹が、限られた時間の中で祈りに参加することができるように、配慮されています。姉妹方の祈りがはじまって間もなく、先ほどの婦人が突然、先に祈っていた姉妹の祈りの途中で、感情的な祈りをはじめました。彼女は、「いやし主である主イエス様、どうかリンデの病気をいやしてください！」と絶叫調で祈りはじめ、「他の人々の祈りは間違っている。不信仰である。いやしを求めて祈らなければいけない」と祈りの中で非難をはじめました。いつも静かに秩序正しく祈っている姉妹たちは、この初めての経験にぼう然として何がはじまったのかと、その

婦人を見つめていました。その婦人の祈りは、とても聖霊の支配下にある様子には見えず、祈りというよりもイエスに命令するという調子で、その日の祈り会が終るまで、いやしを求めて同じことを繰り返し祈り続けました。その結果、集会の姉妹たちは、もはや心を一つにして主に祈ることができなくなりました。みんな驚いてしまって、それまでつぶっていた目を開いて、ぼう然として椅子にすわっていました。

祈り会の後で、そのことに気がついた兄弟たちは非常に驚き、帰ろうとしているその婦人を呼びとめて、集会の責任を持っている二人の兄弟が、聖書に基づいてその婦人に注意を与えました。その婦人は、自分の行動が間違っていたことを認めましたが、その後二、三回集会に集っただけで、離れてゆきました。こうしたことがらを、私たちは数週間後ドイツを訪れた数人の兄弟姉妹たちから聞きました。

この婦人が私たちの群れを離れて行ったことは、私たちにとっては悲しみであり、痛みでありますが、他方において、このことは私たちの祈りの聞き届けであったということもできるのです。というのは、私たちは毎日の祈りの中で、いつも次のように祈っているからです。「主よ。どうかあなたの光のうちを歩みたくないすべての信者を集会から遠ざけてください。そしてまた、あなたによって備えられていないすべての未信者をも来ないようにしてください」と。

パウロは、悪魔が何とかして信者たちを惑わそうとしていること、そして、コリント教会の信者やパウロ自身も気をつけていないと、この悪魔に惑わされてしまうことがあり得るということを手紙の中で警告しています。悪魔に惑わされる者は、多くの場合、自分では気がつかないうちに、

悪魔の策略の中に陥っているのです。

これは、私たちがサタンに欺(あざむ)かれないためです。私たちはサタンの策略を知らないわけではありません。（Ⅱコリント　2・11）

またパウロは、信者が救われた後に、聖霊とは異なる霊を受ける可能性についても書き記しています。パウロは皮肉まじりにこう記しています。

というわけは、ある人が来て、私たちの宣べ伝えなかった別のイエスを宣べ伝えたり、あるいはあなたがたが、前に受けたことのない異なった霊を受けたり、受け入れたことのない異なった福音を受けたりするときも、あなたがたはみごとにこらえているからです。（Ⅱコリント　11・4）

世の終りにおける教会は、悪霊の攻撃をますます強く受けるようになり、これが終末の教会の特徴になってゆきます。

御霊(みたま)が明らかに言われるように、後の時代になると、ある人たちは惑わす霊と悪霊の教えとに心を奪われ、信仰から離れるようになります。（Ⅰテモテ　4・1）

このみことばによってわかるように、私たちはまさに終りの時代の信者であると言うことができるのではないでしょうか。そして、主イエスはしばらくの後に、信者たちをみな天に引き上げるために再び来てくださるのです。

主イエスは、終りの時代について次のように語っています。

にせキリスト、にせ預言者たちが現われて、できれば選民をも惑わそうとして、大きなしるしや不思議なことをしてみせます。（マタイ　24・24）

終りの時代の特徴は「惑わし」です。神に敵対する者である悪魔は時には狡猾な蛇のように、時には光りの天使に変装して、また時には吠えたける獅子のように、主イエスを信じる者たちを攻撃し、惑わそうとしています。このような時代にあっていやしや奇蹟を求めることは、悪魔の策略の中に進んで入ってゆくようなものです。もちろん私たちは、主イエスが今日もなお生きておられ、奇蹟を行なうことがおできになることを少しも疑ってはいません。しかし先ほど引用した聖句にもありますように、悪魔も「惑わし」の好手段として奇蹟をおこなうのです。また、奇蹟を求めることは、霊的に未熟な信者の特徴です。主イエスが私たちに真に望んでいることは、私たちが困難に出会ったときに、その苦しみから一時的に解放されることではなく、その苦しみを通して信者が主イエスに似た者に造り変えられることです。まだ聖霊が注がれていなかった初期の時代には、人々は多くの場合、目に見える奇蹟によって主イエスを信じるようになりました。しかし、今日の聖霊の時代には、人々は神のみことばによって信じ救われるのです。

信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。（ローマ　10・17）

このことを、もう少しくわしく説明するために、次のような問答を考えてみましょう。

問　神は今の時代に、予言とか、幻とかの目に見えるもの、五感に訴えるものを通して、私たちにお語りになるのでしょうか。

答　いいえ、そうではありません。神にはできないことはありませんが、聖書によれば、神はそのようなことを好まないということが、はっきりとわかります。

問　現在、世界中いたるところで、大予言とか、幻とかいったものが人々の関心をひきつけていますが、このことについては、どう考えたらよいのでしょうか。

答　それらの、いわゆる「奇蹟」は、聖書によれば、「偽りの力」「しるし」「不思議」であり、また、「滅びる人たちに対するあらゆる悪の欺き」です。これらのことがらは、間もなく始まろうとしている裁きの日が近いことを示しています。

不法の人の到来は、サタンの働きによるのであって、あらゆる偽りの力、しるし、不思議がそれに伴い、また、滅びる人たちに対するあらゆる悪の欺(あざむ)きが行なわれます。

（Ⅱテサロニケ　2・9、10）

このことを主イエスは、あらかじめはっきりと語っています。

にせキリスト、にせ預言者たちが現われて、できれば選民を惑わそうとして、しるしや不思議なことをして見せます。（マルコ　13・22）

聖霊とは、いったい何でしょうか。聖霊とは、力や影響力や祝福というようなものとは本質的に異なります。聖霊は、父なる神や御子なる神と同じような、「人格的な存在」なのです。人間は

決して聖霊を自分の意のままにすることはできません。反対に、聖霊ご自身こそが、人間を自由にお用いになろうと思っておられるのです。聖霊が単なる力であると考えている人は、それをより多く所有したいと思うでしょう。その結果、人々はしるしと奇蹟とを求めるようになるのです。そのような信者の信仰の土台は、神のみことばである聖書ではなくて、自分自身の感覚と体験を土台としているのです。

聖書のどこを見ても、聖霊のバプテスマを求めるべきであるとは書かれていません。

キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。（ローマ　8・9）

すなわち、キリストの霊を持っている人がキリストのものであり、キリストにつながっているのです。キリストにある新生を体験した人は誰でも、キリストの御霊（聖霊）を持っています。ですから新生と聖霊のバプテスマは一つのものであり、共にたった一回かぎりの経験なのです。

多くのキリスト者は、自分に力がなく、喜びがないのは、何かが欠けているからだと思い込んでいます。しかし、それは悪魔の惑わしです。私たちキリスト者は、何一つ欠けているものはありません。

キリストのうちにこそ、神の満ち満ちたご性質が形をとって宿っています。そしてあなたがたは、キリストにあって、満ち満ちているのです。（コロサイ　2・9、10）

むしろこのようなキリスト者に必要なものは、悔い改め、献身、従順です。すでに与えられて

いるもの以上に求めることは、すでに神によって備えられている道から離れることを意味します。実際、私たちキリスト者が必要としているものは、いわゆる聖霊の賜物でもなければ、様々な経験や熱心な働きでもありません。私たちに必要なのは、悔い改め、献身、従順だけなのです。

主イエスは、私たちを豊かに祝福し用いたいと望んでおられます。しかしそれは、主イエスが私たちに賜物を与えることによってではなく、私たちを十字架のみもとに導くことによってです。パウロは十字架を自ら経験し、次のように証ししました。

> いつでもイエスの死をこの身に帯びていますが、それは、イエスのいのちが私たちの身において、あきらかに示されるためです。（Ⅱコリント　4：10）

聖霊の目標は、いつでも、主イエスだけが栄光をお受けになるべきであるということです。

> あの方は盛んになり私は衰えなければなりません。（ヨハネ　3：30）

キリスト者はどのようにして、聖霊に満たされるのでしょうか。それは、何かを手に入れたり、何か特別の体験をしたりすることによってではなく、主イエスのご支配に自分をゆだねることによってできるのです。

ここで私は、手をおいて祈ってもらったり、異言を語ったり、どうしてもいやされることを催促したりすることを絶対にしないように忠告いたします。なぜならば、そうすることによって、多くの人々は悪魔の支配下に陥ってしまうからです。次にいくつかの実例をあげて、このことを

さらにくわしく説明してみましょう。

ある時、新しく主に導かれた、ひとりの少女がいました。彼女は福音を聞き、罪を告白し、悔い改め、主イエスを救い主として信じ、十字架上で成就された照いのみわきに感謝しました。主イエスが自分を受け入れてくださったこと、そして、それによって自分が救われていることを彼女は確信したのです。こうして彼女が自分の生涯を主イエスに明け渡した後、彼女を導いた伝道者は彼女の頭の上に手をおいて祈りました。しかし、それから約一年後に明らかになったことは彼女の心の中に、このことによって悪霊が入ったということでした。

また、スイスでの話ですが、ある教会で牧師が大変すばらしい聖書的な説教をしました。そしてその説教の終りに、彼は異言で祈りました。会衆は皆、その牧師に与えられているすばらしい賜物を賞讃しました。この牧師は、自分がどこの国の言葉で祈っているのかを知りませんでしたが、ちょうどそこに長い間中近東で商人として働いていた人も同席していました。彼はアラム語を理解することができました。その商人は、祈りの内容を理解することができ、すぐにその牧師に祈りをやめるように求めました。なぜなら、その異言の内容は、神を冒瀆するものであったからです。多くの人は異言は主を賛えるものだと思っていますが、実際は神をのろっているのです。

異言を好んで用いる宗教には、モルモン教、イスラム教、ヒンズー教などがあります。また、霊媒者、魔術を行なう者なども異言を用います。私は、現代の異言は、教会を建てることではなく、むしろ反対に、教会を破壊することに役立っていると確信しています。異言の語られる所にはどこにでも、私たちは分裂と争いを見出します。しかし、神の聖霊は、分裂の霊ではなく、一致の

霊であり、まことの信者たちを一つにする働きをします。私が万が一にも異言を語ることができるようになったとしたら、私は昼も夜も主イエスにこのいわゆる「賜物」を取り除いてくださるように祈り続けることでしょう。なぜならば、そのいわゆる「賜物」は神からきたものか、悪魔からきたものか判断することは非常に困難であるからです。私は異言を語るひとりの婦人を知っています。彼女は、信仰から離れ、主イエスとの交わりがなくなってからも、以前と同じように、上手に異言を語り続けました。

異言を語るときには、語る人の意識が部分的に麻痺したり、まったく無意識状態に陥ったりします。しかし聖書は、消極的、逃避的な生き方を否定しています。人間が消極的、逃避的になると、悪魔は簡単にその人を誘惑することができます。これに対して、聖書が私たちに求めているのは常に積極的な生き方です。「追い求めなさい」「神に近づきなさい」「闘いなさい」「捜しなさい」「願い求めなさい」「立ちなさい」「目を覚ましなさい」などです。神は私たち人間に理性をお与えになりました。ですから、私たちが理性を無視して消極的になることは、神のみこころに反することです。消極的、逃避的な行動、たとえば、座禅、ヨガ、催眠術などは、悪魔に隙(すき)を与える危険性を持っています。また、異言を語る教会ではよくあることですが、突然身体を震わせたり、大声で叫び出したり、床に倒れたりすることは、決して聖霊の働きではありません。また、悪霊の働きである霊媒は、しばしば聖霊の働きと混同されています。

アメリカでは異言の研究が盛んで、異言を専門に研究している人もおります。その一人が、アメリカ国中を調査して回り、多くの教会で語られている異言を録音テープに収録しました。そし

て今度は異言を解き明かすことができると言われている人々に、その異言の解き明かしを試みてもらいました。その結果は果してどうだったでしょうか。異言の解き明かしと言われているものは、各人各様でまったく異なっており、それらの解き明かしの間には、相互に何ら共通点を見出すことができなかったとのことです。

かつて、荒野を旅したイスラエルの民は、神から与えられた食物、すなわちマナに満足することができず、それ以上のものを求めました。彼らは、そのようにして主を捨てたのだと聖書は語っています。

また彼らのうちに混じってきていた者が、激しい欲望にかられ、そのうえ、イスラエル人もまた大声で泣いて、言った。「ああ、肉が食べたい。エジプトで、ただで魚を食べていたことを思い出す。きゅうりも、すいか、にら、たまねぎ、にんにくも。だが今や、私たちののどは干からびてしまった。何もなくて、このマナを見るだけだ」

（民数記　11・4、5、6）

あなたは民に言わなければならない。あすのために身をきよめなさい。あなたがたは肉が食べられるのだ。あなたがたが泣いて、「ああ肉が食べたい。エジプトでは良かった」と主につぶやいて言ったからだ。主が肉を下さる。あなたがたは肉が食べられるのだ。あなたがたが食べるのは、一日や二日や五日や十日や二十日だけではなく、一ヵ月もであって、ついにはあなたがたの鼻から出て来て、吐きけを催すほどになる。それは、あなたがたのうちにおられる主をないがしろにして、御前に泣き、「なぜ、こうして私たちはエジプトか

ら出て来たのだろう」と言ったからだ。（民数記　11・18、19、20）

今日の霊的状況は、かつてのイスラエル人に似ているところがあります。多くの真面目で熱心なキリスト者たちの中には、神のみことばによる啓示だけでは満足することができずに、それ以上のものを求め、異言で語ることや、不治の病がいやされることを求め、奇跡や幻を求めることが少なくありません。しかし、その人たちは、実は悪霊が自分たちを誘惑しているのだということに気がついていません。

信仰は見ることの反対です。

確かに、私たちは見るところによってではなく、信仰によって歩んでいます。

（Ⅱコリント　5・7）

信仰によって歩むことは、生まれつきの性質に逆らうことです。人間の生まれながらの性質は見たり、聞いたり、感じたり、特別な体験をしたりすることを求めます。しかし、このことは、信仰的な堕落を意味しています。私たちの人生を決定づけるものは、私たちの持っている、いわゆる「賜物」にあるのではありません。主イエスこそ、私たちの人生を決定し、支配すべきお方です。私たちの毎日の生活が、砕かれること、自分を明け渡すこと、十字架を担うことによって特徴づけられるとき、主イエスのいのちは私たちを通して現わされ、御霊の実が結実するのです。私たちが、自分の欲のために求めることをしないならば、悪魔は私たちを誘惑しようとしても、何もできません。

現代のキリスト者の特徴は、十字架のみもとにひざまずいて打ち砕かれることよりも、賜物と体験を求めるところにあります。キリスト者にとって一番大切なことは、聖霊に満たされることですが、これは、ただ自我が砕かれることによってのみ与えられるのです。

一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば豊かな実を結びます。（ヨハネ　12・24）

自我が砕かれる以外の方法で聖霊の満たしを求めることは、悪霊に惑わされることを意味します。実際、多くの能力と賜物を持っているといわれている人たちが、単なる悪霊の媒体にすぎなくなっているのではないかということを、私は真剣に心配しています。

リンデの病気をいやすことぐらい、主にとっては全然むずかしいことではなかったことを、私たちは少しも疑ってはいません。また、私たちがもう一度リンデと共に生活することができ、共に主のために働くことができるということは、考えただけでもわくわくするような喜びです。しかし、大切なことは、主のご計画が成就することであって、私たちの願いがかなえられることではありません。主イエスが私たちに望んでおられることは、どうしてもいやされたいと願うことではなく、私たちがどんな状況に置かれても、主のみこころをそのまま受け入れ、従うことなのです。主イエスの切なる願いも、常に次のようでした。

わたしの願うことではなく、あなたのみこころのままをなさって下さい。（マルコ　14・36）

今、私たちにわかることは次のことです。すなわち、リンデは主に召されることによって、彼女が生かされていた時より以上に、主のために、多くの実を結ぶことができるようになったということです。もし彼女の病気がいやされたならば、それはひとつの奇蹟として人々に記憶されたことでしょう。しかし彼女は、自分のために与えられた主のご計画をそのまま素直に受け入れることができ、主のみこころに従順に従うことによって、実を結ぶ者になったのです。また、二十歳そこそこの乙女が、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝のうちに受け入れ、自分の思いは少しも求めずに、ただ主イエスのみこころと栄光だけを求めて召されていったということ自体、彼女がいやされることに優る奇蹟であったと言うことができるのではないでしょうか。

主イエスは復活された後、ペテロに現われてこう言われました。

あなたの行きたくないところに連れてゆきます。（ヨハネ　21・18）

ペテロは、このとき、主のご計画を素直に受け入れました。なぜなら、ペテロは主イエスを心から愛していたからです。こうして、ペテロの生涯は、主のために多くの実を結ぶものに変えられてゆきました。

それでは、実を結ぶための秘訣は、いったい何でしょうか。それは、ぶどうの木である主イエスにより頼むこと、幹としっかりとつながっていること、そして、主なる神である農夫によって刈り込みをしていただく備えができていることです。刈り込みを拒む者は、主のために豊かに実

を結ぶ信仰生活を送ることができません。愛に富みたもう神が、リンデという枝を刈り込むために用いた道具は、「突然襲った不治の病気」というものでした。リンデは、この「刈り込み」を心から感謝して受け入れました。なぜなら主なる神は、常に自分に対して最善をはかっていてくださり、神の赦しなしには病気も存在することができず、神のなさることに決して間違いはない、ということを確信していたからです。リンデの心からの願いは、次のようなものでした。

「まったく主のものとなりたい。自分のためには何もいりません。イエス様、だけが、私のすべての願いを満たして下さいます。天の故郷（ふるさと）につくまで、私はいつも主に忠実に仕えてゆきたい」

主イエスが私たちに望んでおられることは、私たちも、主に似たものとなることです。私たちは苦しみを通して主に似たものと変えられてゆくのです。主イエスも、苦しみや悩みをまっとうして栄光をお受けになりました。主イエスに従う者の歩みについても、同じことが言えるのです。確かに、今日多くの人が奇跡を求めています。しかし、大切なことは、その人自身が奇跡そのものとなることではないでしょうか。リンデは自分が不治の病であることを知らされても、神に対する信仰を動揺させることは少しもありませんでした。自分の病気のために嘆いたり、涙を流したりすることは一回もなく、毎日身近な人々の救いのために、真剣に祈り続けていました。これこそ、主イエスの恵みによる、目立たない隠れた奇跡であるといえましょう。リンデは病床の苦痛の中にあっても、周囲の人々に対する暖かい配慮を絶やしませんでした。また、意識がもうろうとした状態にあっても、主イエスに忠実であり続けたいという願いは薄らぐことはありませんでした。このような彼女の証しを通して、多くの人々は霊的に覚醒し、ある人々は、真剣に主を

求めるようになり、新生を体験しました。こうして彼女は、主のために実を結ぶ枝となったのです。

リンデがこの地上における最後の数週間に体験した様々な苦痛は、私たちには想像しつくすことはできませんが、聖書は彼女のすべての苦しみを担って余りある力を彼女に与え、彼女を通して主イエスの栄光が、現わされました。多くの人々はこれを見て、彼女に奇蹟を与えた主イエスについて知りたいという思いを持ちました。彼女の通っていた看護学校の校長先生は、次のように言いました。「主イエスと共に歩む人生は、虚(むな)しいなどということは、リンデを見る限り、だれも決して言うことができません」

リンデが主イエスのみもとに召されてから、早や半年以上が過ぎ去りました。彼女は今、言葉に尽くすことのできないすばらしい栄光の中に、安らいでいるに違いありません。リンデは、主イエスの救いの御わざのすばらしさを永遠に感謝していることでしょう。そして、主イエスと共にあることの喜びと幸せがあまりにも大きくて、地上にあった二十年間を、ほんの一瞬の出来事のように思っていることでしょう。

二　「宗教」と「啓示」

私はそれを人間からは受けなかったし、また教えられもしませんでした。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。（ガラテヤ　1・12）

人々は、いわゆる「宗教」と「イエス・キリストに対する信仰」とは同質のものであると考えていますが、これは大きな誤解です。「宗教」は人間が作り出したものであり、「イエス・キリストに対する信仰」は、上からの啓示によって与えられたものです。そこで、いわゆる「宗教」とイエス・キリストによって与えられた「啓示」とがどのように本質的に異なるものであるかということを、この章を通して明らかにしてみましょう。

ロシア革命の指導者、レーニンの有名なことばに「宗教は人民にとって阿片（あへん）である」というものがあります。ここでレーニンは「宗教」ということばを使っていますが、彼は、いわゆる宗教信者だけではなく、真の信者をも念頭においてこのことばを用いました。確かにレーニンは、心の支えを持っている人間は、まことの神を礼拝することや真理に従うということに関しては絶対に妥協しないということを知っていました。まことの信仰を持っている人は、主イエスに不従順な道を歩むよりは、喜んで殉教の死を選ぶからです。レーニンは、革命を遂行するために、人間

をあやつり人形のように自分の思う通りに従わせたかったのです。レーニンの必要としたのは、自分自身で考え、行動する人間ではなく、彼の指図通りに動く人間でした。ですからレーニンは心の支えを持った人間を憎まざるを得なかったのです。

同時にこのレーニンのことばは、いわゆる宗教信者に対しても当てはまることばであるとも言うことができます。仏教、神道、儒教、イスラム教などはもちろんのこと、キリスト教でさえ宗教としての側面を考えるとき、このレーニンのことばは、鋭く一面の真理を指摘していると言わざるを得ません。なぜなら、これらの「宗教」の特徴のひとつは、「阿片（あへん）」のように、人々の判断力を麻痺させたり、霊的に盲目にしたりしていることであり、この結果、人々は真の神から目をそらし、永遠の救いに至る道を見失い、本来神でない神、すなわち、偽りの虚しいものに、根拠のない希望を置くようにされてしまっているからです。

いわゆる「宗教」は、キリスト教、仏教、神道、儒教、イスラム教、その他種々の宗教も含めて、すべて人間が作り上げたものです。これに対して「まことの啓示」は、上から与えられるものです。「宗教」は人間を永遠のいのちに導き入れることはできません。「上からの啓示」だけが私たちを滅びから救い出し、他の何ものによってもゆるがされない「喜び」と「希望」と「平安」を与えることができるのです。聖書も語っているように、すべての人間には、例外なくまことの神を慕い求める思いがあり、（伝道者の書 3・11）この思いを、多くの人々は、種々の「宗教」を通して満たそうとしています。人間の側から神に近づこうとすること、これが「宗教」の本質です。これに対して、「啓示」とは、まことの神が、ご自分の側から人間に対してご自身を現わして下さ

り、人間が体験的に神を知ることができるようにして下さることを言います。このことを具体的な例をもって考えてみましょう。

インドは世界中で最も貧しい国のひとつであると言われています。六億の人口をかかえ、子供たちの五十パーセントから七十パーセントは、慢性的な栄養失調に陥っているのが実状です。インドは世界各地から毎年莫大な小麦を輸入しています。ところがある学者によれば、インドは本来十分な食糧を自給できる国であり、さらに、それを輸出することさえできるはずであるとのことです。それでは、一体何がインドをこのような貧困に陥れているのでしょうか。それはほかならぬ「宗教」なのです。インドには約五十億匹のドブネズミがいます。つまり、インド人ひとりに対して八匹のドブネズミがいるという勘定になります。ですから、インドのドブネズミは、すべてのインド人よりもたくさんのものを食べていると言うことが言えるのです。インドの宗教によれば、ドブネズミは神聖なものであり、殺してはならないとされています。ですから、インドのドブネズミは撲滅されずに増える一方です。そしてその代償として多くのインド人の子供達が餓死してゆくのです。私たちはここに「宗教は人民にとって阿片(あへん)である」ということの一例を見ることができます。

また、インドでは、他の東アジアの国々と同様に偶像礼拝すなわち誤った祖先礼拝も広くおこなわれています。聖書は死者を礼拝したり、香をたいたりすることを固く禁じております。（死者を礼拝してはならない＝出エジプト20・2～6、申命11・16、17、26、27、28。死者に香をたいてはならない＝出エジプト30・34～38、レビ10・1、2）それらは、死者を葬っているのではな

く、悪霊を礼拝しているのだと、聖書は警告しています。（Ⅰコリント10・19～22）死者の霊は神のもとに帰っているのであり、私たち生きている者が死者の運命を左右することなどできません。（伝道者の書12・7）それをあえてしようとすることは、神に対する冒瀆にほかなりません。人々はこうして、真の神から隔たった存在になってしまうのです。数々の、いわゆる宗教の特徴はそれを信じる人々をまことの救いから遠ざけ、さらには、人々が自分で気付かぬうちに、悪霊の支配下に置いてしまうところにあります。

ところが、現代の私たちの周辺には、宗教と名の付かない宗教がはびこっています。それは、仕事であり、趣味であり、慣習であります。仕事に関して言えば、聖書は怠惰を禁じています。「働かざる者は食うべからず」と最初に語ったのは、聖書です。（Ⅱテサロニケ 3・10）しかし、仕事や会社が人生のすべてになり、それによって支配されてしまうなら、これは神の喜ぶことではありません。よき趣味を持つことは、すばらしいことです。しかし、趣味や遊びによって、自分が支配されるというなら、これも不幸なことです。また、自分の判断を持たずに、ただ、多くの人がするから自分も行ない、それで正しいと考えている人も不幸です。これらの人々は、私たちの身辺にも意外と多いものです。これらの人々の特徴は、人を恐れて神を恐れないということであり、その原因はまことの神を知らないところにあります。人々の顔色をうかがうことに一生懸命になっている人は、生けるまことの神との結びつきを持っていません。

主イエスは次のように言われました。

わたしは、人からの栄誉は受けません。互いの栄誉は受けても、唯一の神からの栄誉を

求めないあなたがたは、どうして信じることができますか。（ヨハネ　5・41、44）

私たちは、あわれな「人間の奴隷」となるか、または、何物にも束縛されない「神の僕（しもべ）」となるかのどちらかの道を選び取る必要があるのです。

私の書斎にはかなり部厚い聖書大辞典がありますが、ある時思い立って「宗教」という項目を探してみました。この本には、聖書に出てくるすべての項目が網羅されていますが、「宗教」という項目はついに見出すことはできませんでした。つまり聖書は「宗教」と全然関係がないということがいえるのです。それでは、聖書はまことの神について、また、上からの「啓示」について何をいったい私たちに教えてくれるのでしょうか。このテーマで次に考えてみることにします。

私たちは科学的な方法によっては、神を完全に把握することはできません。人間の理性には限界があり、無限の存在である神を百パーセント理解することは不可能なのです。人間の努力によって、すなわち、「下から上へ（地上から天へ）」という方法では、神に到達することは決してできないのです。それにもかかわらず、人間が有史以来試みてきたことは、何とかして人間の側からの努力によって神に到達しようとする試みでした。

人間が神に近づこうとするとき、ふつう次の三つの方法を試みます。第一の方法は、理性による方法で、哲学の目的はここにあります。第二は、感性によって、神をとらえようとする方法です。これは神秘主義と言われます。第三は人間の意志によって神に到達しようとする試みです。ところが第一の方法である「哲学」は必ず乗り越えることのできない大きな壁に突き当り、第二の方

法である「神秘主義」は方向性を見失なった自己満足に陥ってしまい、そして第三の方法である「修行」は人間の尺度による間違った希望を目標としがちであります。つまりこれらの三つの方法によっては、神に到達することはできないのです。確かに人間はこのような方法をもって自分自身の神概念をつくりあげることはできるかも知れませんが、それでは生けるまことの神に到達したことにはなりません。

「下から上へ」すなわち人間の努力によって神に到達し、神を理解しようとする試みは、結果的には、人間を偶像礼拝へと導いてしまいます。偶像礼拝とは、唯一のまことの神以外のものを神とすることであり、偶像は人間が造り出したものにほかなりません。「下から上へ」という方法に基づく宗教や世界観は、私たちを真理へ導くものではありません。まことの神は人間によって造られたのではなく、人間が神によって造られたのです。ですから、人間が造った神は、まことの神ではなく、偶像にすぎません。偶像にはいのちがなく、私たちに永遠のいのちを与えることもできません。

これに対して、生けるまことの神は、ご自分のほうからご自身を「啓示」してくださり、人間に求める心さえあれば、神に出会うことができるように道を備えて下さいました。まことに神は人間がご自身に出会われることを切に望んでおられるのです。神が愛をもってご自身を現わしてくださること、これを「啓示」と言います。

この「啓示」には三種類のものがあります。第一に、神は自然界の中にご自身を現わして下さいました。

なぜなら、神について知りうることは、彼らに明らかであるからです。それは神が明らかにされたのです。神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。（ローマ　1・19、20）

このように、私たちは、自然界の中に創造主なる神を見出すことができるのです。いかなる人間も、自分から新しいものを創造することはできません。人間が発明・発見と呼んでいることがらは、すでに神によって創造されているものを発見すること、また、それを活用することにほかなりません。たとえば、今世紀になって発明されたとされている電気や原子力なども、この例にもれません。大自然を見て、私たちがなすべきことはただひとつです。すなわち自然界の個々の被造物を通して、それらを創られた創造主である神を認めるということです。神は被造物の中に、神ご自身、神の力、神の知恵、神の配慮、神の真実、そして神の限りない愛などを「啓示」しておられます。また一方、罪を決して見すごしにはされない神の峻厳さも、同時に「啓示」されています。被造物は罪のゆえにのろいのもとにあるということも事実だからです。被造物は、こぞって神を証ししています。自然科学者は、自然を研究すればするほど、自然の背後にある創造主の存在について認めざるを得ないと言います。自然を知ることは、神を知ることにつながるのです。正しい自然科学は、私たちを神への礼拝へと導きます。

しかし人間は、この神からの「啓示」に対して、どのような反応を示してきたのでしょうか。

大部分の人間は神の作品である自然を認めていながら、その造り主である神を認めようとはしませんでした。その結果、神に対する畏れも知らず、神を礼拝しようともしませんでした。神を認めないということは、神の裁きのもとにあるということを意味しています。

愚か者は心の中で、「神はいない」と言っている。（詩篇 14・1）

つまり、神を認めないことは、自らを愚か者に定めていることにほかなりません。彼らに弁解の余地はないのです。人間は、神を認めることを拒否した結果、自らを霊的な盲目状態に陥れてしまい、神について何も理解することができなくなってしまい、その結果、「神はいない」と主張するようになってしまったのです。しかし人間は、この盲目の状態から回復され、霊的ないのちを再び与えられなければなりません。そしてそのための道をも、神は私たちに与えて下さっています。

以上でおわかりのように、神は自然界を通してご自身を「啓示」しておられます。

第二に、神は御子イエス・キリストを通してご自身を「啓示」して下さいました。私たちが自然界を通して知ることのできる神は、「全知全能なる神」、「裁き主としての神」であり、この神の前に私たちは畏れおののかなければなりません。しかし、一方で、神は、私たちの罪の問題を解決して恵みを与えて下さる方であり、主イエスの贖(あがな)いのゆえに、私たちの状態をのろいから祝福に変えて下さる方であり、私たちの霊の父となって下さる方です。ですから神がご自身を御子イエス・キリストのうちに「啓示」して下さることがどうしても必要なのです。

神は昔、先祖たちに、預言者たちを通して、多くの部分に分け、また、いろいろな方法で語られましたが、この終りの時には、御子によって、私たちに語られました。神は、御子を万物の相続者とし、また御子によって世界を造られました。御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現われであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。また罪のきよめを成し遂げて、すぐれて高い所の大能者の右の座に着かれました。

（ヘブル　1・1〜3）

自然界は神の造られた作品ですが、御子イエス・キリストは、「神の本質の完全な現われ」です。これこそ、上から与えられた神の偉大なる啓示です。主イエスについて知ることによって、私たちは神を知ることができるのです。これこそ、神の側から私たち人間に与えられた「上から下へ」の道であります。主イエスは「ヨハネによる福音書」の中で、次のように語っています。

あなたがたが来たのは下からであり、わたしが来たのは上からです。

（ヨハネ　8・23）

神の本質がどういうものであるかということを、私たちは主イエスを通して知ることができます。

いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。（ヨハネ　1・18）

御子イエスは神ご自身の完全な現われです。私たちはイエスを通して、主イエス・キリストの

父なる神、愛と正義の神、生けるまことの神、また聖なる神を知ることができます。これは、主イエスを救い主として受け入れた者だけに与えられる特権です。神の愛をとらえるのは、人間の理性ではなく、感情でもなく、霊です。この霊によって私たちは、御子イエス・キリストを通して現わされた神の愛を知ることができるのです。イエス・キリストを通して、主なる神は、私たち人間ひとりひとりに、個人的にご自身を現わしたいと願っておられるのです。

神はこのように御子イエスを通してご自身を「啓示」しておられるのですから、人間にはこのイエスを受け入れるか拒むかという決断をする責任があります。イエスを受け入れる者は、新しい生れ変わりを体験します。聖霊によって、その人には、新しい人生の目的と価値観が与えられます。またこの聖霊は、日々救いを受け入れた者と共にあって、真理に導いて下さいます。ところがイエスを拒む者は神の愛をも救いをも拒むことになり、その結果、自ら滅びの責任をとらなければならなくなります。私たちは、御子イエスを通して、贖(あがな)いを成就して下さる方としての神をはっきりと認めることができるのです。

それでは、一体どうしたら私たちは主イエスを知ることができるのでしょうか。これはみことばを通してです。私たちはみことばを通して主イエスをはっきりと知ることができます。これが第三の「啓示」です。主イエスはこの地上におられたときは人間の目に見えるかたちでご自身を現わしてくださいましたが、今日では、聖書を通してご自身が全人類の救い主であり贖(あがな)い主であることを明らかに示して下さっています。聖書は、聖霊によって記された神のみことばであり、私たちはこの聖書によって、主なる神のみこころを知ることができ、贖(あがな)いの意味について知るこ

とができ、万物の存在の目的について知ることができるのです。神が人間に望んでおられることはみことばを通して人間が神のみこころを明らかに知ることができ、自分のわがままな意志に従って生きる生き方を捨てて、神のみこころに従って生きるようになることです。神のみことばを拒む者は、神とのあらゆる交わりを閉ざしてしまうことになります。

神は第一に自然界の被造物を通して、第二に御子イエス・キリストを通して、第三にみことばを通して、ご自身を「啓示」して下さいました。しかしこの神の「啓示」も人間がそれを信じなければ、何の意味をも持ちません。信仰がなければ、神を知ることはできません。信じたいと願う人には、神は助け主である聖霊を送って信仰を与えて下さいます。この信仰によって私たちは被造物に現わされた創造主なる神を知ることができます。またこの信仰によって、私たちは御子イエス・キリストに現わされた、神ご自身の本質を知ることができます。またこの信仰によって私たちは聖書に現わされた神のみこころについて知ることができます。これらは、上から、つまり神の側から人間に与えられた三種類の啓示であり、人間はこの啓示を幼子のような素直な心で受け入れるならば、神ご自身を体験的に知ることができるのです。神の力は被造物に現わされており、神の愛は御子イエスに現わされており、神の義はみことばのうちに現わされています。

神を知りたいと思う者は、神に近づく必要があります。そして、神に近づくためには、自分が神の前に罪人であることを認め、その罪を悔い改めることが必要です。しかし、聖霊が働かれなければ、人は自分の罪を認めることも悔い改めることもできません。そして、悔い改めには信仰が伴なわなければなりません。罪を悔い改め、イエスを救い主として信じた者の心には聖霊が宿

り、新しい生まれ変わり「新生」を体験するのです。聖霊は理性に光を与え、魂に喜びを与え、人間に正しい判断力を与えてくれます。こうしてイエスを救い主として受け入れた人は、今までとはまったく違う新しい人生を歩むようになるのです。そして、真理に対して心を開く者は、必ず次のように言うことができるようになります。

私はつまらない者です。あなたに何と口答えできましょう。（ヨブ　40・4）

私は自分で悟りえないことを告げました。自分でも知りえない不思議を。（ヨブ　42・3）

私はあなたのうわさを耳で聞いていました。しかし今、この目であなたを見ました。それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます。（ヨブ　42・5、6）

私はそれを人間からは受けなかったし、また教えられもしませんでした。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。（ガラテヤ　1・12）

しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。（ピリピ　3・7、8）

三　仰げ主を

この本を著わすに当って、どうしても読者に誤解していただきたくないことがらが二つあります。一つは、この本は私たちの娘リンデの追悼のために書かれたのではないということです。ましてや、彼女を賛美するために書かれたのではないことは、いうまでもありません。もう一つはこの本がいわゆる「キリスト教」の宣伝のために書かれたのではないということです。このことは、前章の「宗教」と「啓示」を読まれた方々には十分おわかりいただけたことと思います。

この本は、いかなる意味においても、人間に栄光を帰すことを目的としてはいません。娘リンデは同年輩の少女と比べて特別に変わったところがあるわけではありませんでした。また彼女自身にも、自分が何か人並以上のものになりたいなどと考えるようなところは、まったくありませんでした。彼女の願いはただひとつ、主イエスだけが栄光をお受けになっていただきたいということでした。彼女は、次のような確信を持っていました。

「父なる神が、すべてのことをご存じです、ということを知っているだけで、私は十分に満足しています。私の信仰にかげりを与えるものは、何ひとつありません。主は、ご自身を愛する者には、いつでも最善を約束していて下さいますから」

リンデは主イエスにすべての重荷をゆだねること、主の平安の中に憩うこと、そしてどのよう

な環境に置かれても主を喜ぶことを学びました。彼女には、ゆるがない平安がありましたから、いつも平静でいることができました。主イエスと結びついている者には、静かな平安があります。しかし、彼女は一方で大きな苦痛と疲労困憊と戦っていたのです。彼女は、しばしば次のように語りました。

「私は、祈ることができません。ほとんど考えることすらできません。しかし、私は主イエスに信頼しています」

人間にとって一番大切なことは、生ける神との正しい関係を持つということではないでしょうか。リンデはその意味で、平凡な娘ではありましたが、神との正しい関係を持ち続けました。

今から約二千六百年前、預言者イザヤは、当時病気だったユダ王国のヒゼキヤ王に、次のように告げました。

主はこう仰せられます。「あなたの家を、整理せよ。あなたは死ぬ。直らない」

（Ⅱ列王記　20・1）

アモス書には、こうあります。

あなたはあなたの神に会う備えをせよ。（アモス　4・12）

別の個所で、神のみことばは次のように宣告しています。

人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている。（ヘブル　9・27）

主イエスの救いを拒む者は禍いです。なぜなら、死はすべての終りでなく、死後に恐るべき現実がやってくるからです。神のみことばは、こう告げています。

生ける神の手の中に陥ることは恐ろしいことです。（ヘブル　10・31）

私たちの神は焼き尽くす火です。（ヘブル　12・29）

主イエスは本当のキリスト者をすべて栄光のうちにみもとに引き寄せるため、まもなく再び来られます。もはやいいかげんな、自己中心的な生活を送っている時ではありません。あらゆる妥協は自己否定からの逃避であり、したがって、十字架からの逃避です。人にどう思われるかばかりが気になって、神に対する畏れを知らない者は禍いです。今までこの地上に見られなかったような大変なことが間もなく始まります。主イエスの救いを受け入れていない者にとっては、将来に希望はありません。ですから、どうか生けるまことの神との正しい関係を、回復して下さい。「あなたはあなたの神に会う備えをせよ」との呼びかけは、私たちひとりひとりに与えられています。

また、この本は、いわゆる「キリスト教」の宣伝のために書かれたのでは決してありません。今日のキリスト教は、カトリック教会（旧教）であれ、プロテスタント教会（新教）であれ、残念ながら、多くの点で、神のみことばである聖書から離れてしまっています。キリスト教は、単なる組織化された一宗教になってしまいました。教会は、魂の救いのことを第一にしなくなり、

他の宗教団体と同じように、会員数を増やすことや、献金集めに一生懸命になってしまっています。宗教は商売になっており、何百万もの人々が、宗教によってだまされているのです。

主イエスを救い主として信じることは、宗教とは無関係です。イエス・キリストは、キリスト教の教祖などではなく、全人類の救い主であり、贖い主であります。主イエスの救いにあずかるために必要なのは、教会の会員になることでもなければ、洗礼を受けることでもありません。また聖書全体を研究する必要もありません。聖書は次のように言っています。「主イエスのみもとに行き、あなたの罪と債務をイエスさまに打ち明けなさい」打ち明けるとは、自分の罪を認め、告白し、憎み、捨てて離れ、正しい状態に戻ることを意味しています。

自分のそむきの罪を隠す者は成功しない。それを告白して捨てる者はあわれみを受ける。
（箴言　28・13）

このように罪を悔い改める者には、次のことを信ずる特権が与えられています。「私の罪は赦されました。主イエスは私を受け入れてくださいました」というのは、主イエスは「わたしのところに来る者を、わたしは決して捨てない」と約束しておられるからです。このような幼な子のような信仰の特徴は、感謝に満たされた生活です。

「イエス様、私はあなたが私の債務を赦して下さったことを、感謝します。なぜなら、あなたは偽り者ではないからです。私は、たとえそれを正しく理解することができなくても、あなたのみことばがそう語っており、あなたのみことばは真理ですから、感謝します。私は、あなたのものとされましたことを感謝します。どうか私を導いて下さい。あなたが今、私の全生涯の

主となって下さい。主よ、私は何をしたらよいのでしょうか」

主のみこころを常に尋ね求め、主をよりよく知りたいと願い、主を喜ばせたいという願いだけを持っている者の全生涯は、喜んですぐ従うということによって特徴づけられ、その結果主イエスのために実を結ぶことができるのです。そのことによって、あなたの信仰が本物であるか、またあなたが心から主に従っているかがわかります。しかし、犠牲なき従順はありません。主イエスに忠実に従うとともに、主イエスのために犠牲をはらう時に、実が結ばれます。

一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。（ヨハネ 12・24）

私たちは、自分自身や周囲の人々を見るか、それとも主イエスを仰ぎ見るかのどちらかです。「われわれはイエスを見る」実はこのことが一番大切なのです。主イエスを見上げる者にとっては、目に見えるもの、過ぎゆくものはすべて、枝葉末節のこととなるのです。主イエスを見上げる者は、ただ主イエスに喜ばれたい、主に気に入られたいという切なる願いを持っています。主イエスのために生きること、主イエスを喜ばせることこそ、リンデの切なる願いでした。リンデはいまや、主イエスを実際に見ることが許されているのです。しかし、この地上に残された私たちにとっては、闘いはまだ続きます。私たちはみな、目に見えるものすべてから目をそらし、主イエスを見上げるように召されています。またさらに、私たちは主イエスのために仕え、実を結ぶように召されています。私たちがきょう、自分自身をことごとく主に明け渡し、何があって

も主のために実を結びたいという切なる願いを持って、主イエスに願い求めることができれば、幸いです。

アイドリンゲン姉妹会の本部であるムッターハウスで、リンデの記念会が持たれた時歌われた歌は、次のものでした。

主は来たりたもう。みな叫び声をあげよ。
まもなく人類は、ため息をつくことをやめる。
だから私たちはあらたなる生きがいを持って、
大いに喜ぶことができる。
今はまだ、主よ、あなたを大部分の人は崇拝していない。
しかしやがてすべての者が、主なるあなたの前にひざをかがめる。
今は、われわれはまだ旅人であり、主を信じるがゆえに恥を担う者である。
しかしやがてわれらは、天国の住民となる。
聖なる希望、幸いなこの身、
すばらしい福音を宣べ伝えよう。
口から口へと、主の再臨を宣べ伝えよう。
主は来たりたもう。主をほめよ！平和の神、主よ！
来て下さい、主よ！そして地上には、ただあなたのほめうただけが響きわたる。

闇の頂に、輝かしい朝やけが見える。
もう少しで、われわれも、神の栄光の前に立つ。
きれいなみぎわで、われわれは主の御顔を拝する。
あらゆる霧は消え去った。光をさえぎるものもない。
夜と闇の時も過ぎ去った。
苦しみも、悩みもない。
言い表わせない喜びだけだ。
熱い砂漠の旅のあと、新鮮な泉と幸いな憩い。
われわれは霊の糧を見い出し、いのちの泉が流れ出る。
全能なる主のもとには、重苦しさも、疲労もない。
天国の栄光を見るとき、この地上における苦しみと危険の時の思い出は、永遠に消える。
困難と困窮の代わりに、喜ばしいほめ歌だけだ。
天国で、われわれは、主と顔と顔とを合わせて見る。
それは、主のみ約束ゆえ、われわれは希望に満ちている。
多くの闘いと激しい格闘にもかかわらず、
われわれは目的地に達する！

生けるまことの神に対してまだ自分の債務が支払われていない人は、喜んで将来に向かうこと

ができません。その結果は、心の支えがない状態であり、いつも何かに追われている状態です。私は読者のみなさんに、心からお願いします。どうかイエス様に祈って下さい。自分の債務と悩みをイエス様に打ち明けて下さい。そしてイエス様が贖(あがな)いの代価として、ご自身の尊いいのちを捧げて下さったことに対して、イエス様に感謝して下さい。どうかご自分の生活の支配権をイエス様に明け渡して下さい。そしてただ神のみことばにのみ、より頼んで下さい。

あとがき

最後に、この本を読んで下さった皆さまに、私が特に申し述べたいことがあります。

それは、リンデの生涯の終りの時におけるあかしにより、神のみが第一にご栄光をお受けになるということ、また皆さまが、永遠の世界に対して興味を持ち、真理を求めるようになり、さらにイエス・キリストを通して真理を見い出すことができるようになっていただきたい、ということであります。この本の中の一部には、あるいはその主旨からはずれていると思われるところがあるかもしれません。しかし、そうではないのです。

私が、なぜ、いわゆる「宗教」の批判をせざるを得なかったかと言いますと、神の最も嫌われているものが、ほかならぬ「宗教」だからです。もし、リンデが、いわゆる「宗教」を持っているだけでしたら、自分ががんという病気に倒れたとき「運命だ……」と思い、打ちのめされ、あきらめる以外に道はなかったことでしょう。しかし、彼女は、いまもなお現実に生きておられる主イエスに頼ったからこそ、喜んで死を迎えることができたのです。

今日の現代人は、いわゆるキリスト者もそうでない人も、目に見える「しるし」、感覚的なものを求める傾向があります。しかし、長い目で見ますと、そのような人々は、惑わされ不幸に陥らざるをえないのです。

ここで繰り返し申し述べておきたいことは、奇跡を経験することよりも、人間そのものが神の恵みによって奇蹟となることです。すなわち、死の病とわかって苦しみながらもなおかつ主イエスを喜ぶことができる、ということこそが、奇蹟以外の何ものでもないと確信するからです。

この本には、表現上の点で不完全なところが少なくなかったことと思いますが、先に述べましたような筆者の真意をくんでいただきたいとお願いする次第です。

また、愛する吉祥寺キリスト集会の兄弟姉妹方の献身的なご協力に心から感謝申しあげます。

願わくば、栄光が神のみにあらんことを！

ゴットホルド・ベック

一九八一年復活節（イースター）の日に

基礎的なみことば

救いに至らせる信仰は、人間の理性や感情に基づくのではなく、ただ神のみことばに基づくのです。理解したいという意欲や、何かを感じたいという意欲ではなく、ただ幼な子のように神のみことばを信頼することだけが誘惑の危険からあなたを守ってくれます。

その助けとなるように、いくつかのみことばを次にご紹介いたします。聖書を開いて、そのみことばを考えながら読んでください。そして与えられたみことばの内容のために、イエス様に感謝してください。そうすれば主はあなたを祝福してくださるでしょう。なお海外にもキリスト集会、よろこびの集いが広がっていますので、英語とドイツ語を入れました。ご活用ください。

1　みことばの大切さ

真理によって彼らを聖め別ってください。あなたのみことばは真理です。

（ヨハネ　17・17）

私はあなたのみことばを見つけ出し、それを食べました。あなたのみことばは、私にとって楽しみとなり、心の喜びとなりました。万軍の神、主よ。私にはあなたの名がつけられているからです。

（エレミヤ　15・16）

私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです。
（Ⅰヨハネ　5・13）

あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく、朽ちない種からであり、生ける、いつまでも変わることのない、神のことばによるのです。（Ⅰペテロ　1・23）

あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。（詩篇　119・105）

みことばのすべてはまことです。あなたの義のさばきはことごとく、とこしえに至ります。（詩篇　119・160）

私は、大きな獲物を見つけた者のように、あなたのみことばを喜びます。（詩篇　119・162）

2　悔い改めと信仰

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、

すべての悪から私たちをきよめてくださいます。（Ⅰヨハネ　1・9）

自分のそむきの罪を隠す者は成功しない。それを告白して、それを捨てる者はあわれみを受ける。（箴言　28・13）

幸いなことよ。そのそむきを赦され、罪をおおわれた人は。幸いなことよ。主が、咎をお認めにならない人、心に欺きのないその人は。私は黙っていたときには、一日中、うめいて、私の骨々は疲れ果てました。それは、御手が昼も夜も私の上に重くのしかかり、私の骨髄は、夏のひでりでかわききったからです。

私は、自分の罪を、あなたに知らせ、私の咎を隠しませんでした。私は申しました。「私のそむきの罪を主に告白しよう。」すると、あなたは私の罪のとがめを赦されました。（詩篇　32・1～5）

主を求めよ。お会いできる間に。近くにおられるうちに、呼び求めよ。

悪者はおのれの道を捨て、不法者はおのれのはかりごとを捨て去れ。主に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してくださるから。（イザヤ　55・6、7）

父がわたしにお与えになる者はみな、わたしのところに来ます。そしてわたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。（ヨハネ　6・37）

3　私たちの身代わりとなられたイエス

まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。

しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。

私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。（イザヤ　53・4～6）

そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。（Ⅰペテロ　2・24）

神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあって、神の義となるためです。（Ⅱコリント　5・21）

4　血潮の価値

「さあ、来たれ。論じ合おう。」と主は仰せられる。「たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。」
（イザヤ　1・18）

ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。
神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現わすためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもって見のがして来られたからです。　（ローマ　3・24、25）

しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。
（Ⅰヨハネ　1・7）

私たちは、この御子のうちにあって、御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているのです。これは神の豊かな恵みによることです。（エペソ　1・7）

ご承知のように、あなたがたが先祖から伝わったむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。（Ⅰペテロ　1・18、19）

兄弟たちは、小羊の血と、自分たちのあかしのことばのゆえに彼に打ち勝った。彼らは死に至るまでもいのちを惜しまなかった。（黙示　12・11）

5　確信の根拠

だが、今、ヤコブよ。あなたを造り出した方、主はこう仰せられる。イスラエルよ。あなたを形造った方、主はこう仰せられる。「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。」（イザヤ　43・1）

わたし、このわたしは、わたし自身のためにあなたのそむきの罪をぬぐい去り、もうあ

なたの罪を思い出さない。（イザヤ　43・25）

わたしは、あなたのそむきの罪を雲のように、あなたの罪をかすみのようにぬぐい去った。わたしに帰れ。わたしは、あなたを贖ったからだ。（イザヤ　44・22）

そして女に、「あなたの罪は赦されています。」と言われた。（ルカ　7・48）

なぜなら、わたしは彼らの不義にあわれみをかけ、もはや、彼らの罪を思い出さないからである。（ヘブル8・12）

わたしは、もはや決して彼らの罪と不法とを思い出すことはしない。（ヘブル　10・17）

東が西から遠く離れているように、私たちのそむきの罪を私たちから遠く離される。（詩篇　103・12）

金銭を愛する生活をしてはいけません。いま持っているもので満足しなさい。主ご自身がこう言われるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」そこで、私たちは確信に満ちてこう言います。「主は私の助け手です。私は恐れません。

人間が、私に対して何ができましょう。」（ヘブル　13・5、6）

6　思いわずらうな

また、いばらの中に蒔かれるとは、みことばを聞くが、この世の心づかいと富の惑わしとがみことばをふさぐため、実を結ばない人のことです。（マタイ　13・22）

だから、わたしはあなたがたに言います。自分のいのちのことで、何を食べようか、何を飲もうかと心配したり、また、からだのことで、何を着ようかと心配したりしてはいけません。いのちは食べ物よりたいせつなもの、からだは着物よりたいせつなものではありませんか。

空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養っていてくださるのです。あなたがたは、鳥よりも、もっとすぐれたものではありませんか。

あなたがたのうちだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。

なぜ着物のことで心配するのですか。野のゆりがどうして育つのか、よくわきまえなさい。働きもせず、紡ぎもしません。

しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。

きょうあっても、あすは炉に投げ込まれる野の草さえ、神はこれほどに装ってくださるのだから、ましてあなたがたに、よくしてくださらないわけがありましょうか。信仰の薄い人たち。

そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。

こういうものはみな、異邦人が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。

（マタイ　6・25〜32）

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。

そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。

（ピリピ　4・6、7）

あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。

身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。
堅く信仰に立って、この悪魔に立ち向かいなさい。ご承知のように、世にあるあなたがたの兄弟である人々は同じ苦しみを通って来たのです。（Ⅰペテロ　5・7～9）

あなたの重荷を主にゆだねよ。主は、あなたのことを心配してくださる。主は決して、正しい者がゆるがされるようにはなさらない。（詩篇 55・22）

7 試練の時

試練に耐える人は幸いです。耐え抜いて良しと認められた人は、神を愛する者に約束された、いのちの冠を受けるからです。（ヤコブ　1・12）

ですから、神に従いなさい。そして、悪魔に立ち向かいなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります。
神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます。罪ある人たち。手を洗いきよめなさい。二心の人たち。心を清くしなさい。（ヤコブ　4・7、8）

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。

（Ⅰコリント　10・13）

身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。

堅く信仰に立って、この悪魔に立ち向かいなさい。ご承知のように、世にあるあなたがたの兄弟である人々は同じ苦しみを通って来たのです。

あらゆる恵みに満ちた神、すなわち、あなたがたをキリストにあってその永遠の栄光の中に招き入れてくださった神ご自身が、あなたがたをしばらくの苦しみのあとで完全にし、堅く立たせ、強くし、不動の者としてくださいます。

（Ⅰペテロ　5・8～10）

あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており、終わりのときに現わされるように用意されている救いをいただくのです。

そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいます。いまは、しばらくの間、さまざまの試練の中で、悲しまなければならないのですが、

信仰の試練は、火を通して精練されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであって、イエス・

キリストの現われのときに称賛と光栄と栄誉に至るものであることがわかります。
（Ⅰペテロ　1・5〜7）

しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。
ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。
（Ⅱコリント　12・9、10）

それればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。
この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。
（ローマ　5・3〜5）

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。（ローマ　8・28）

疲れた者には力を与え、精力のない者には活気をつける。若者も疲れ、たゆみ、若い男

もつまずき倒れる。しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れない。（イザヤ　40・29～31）

ist ausgegossen in unsere Herzen durch den Heiligen Geist, der uns gegeben worden ist. (Römer 5, 3-5)

Wir wissen aber, daß denen, die Gott lieben, alle Dinge zum Guten mitwirken, denen, die nach ‹seinem› Vorsatz berufen sind. (Römer 8, 28)

Er gibt dem Müden Kraft und dem Ohnmächtigen mehrt er die Stärke.
Jünglinge ermüden und ermatten, und junge Männer straucheln ‹und› stürzen.
Aber die auf den HERRN hoffen, gewinnen neue Kraft: sie heben die Schwingen empor wie die Adler, sie laufen und ermatten nicht, sie gehen und ermüden nicht. (Jesaja 40, 29-31)

Dem widersteht standhaft durch den Glauben, da ihr wißt, daß dieselben Leiden sich an eurer Bruderschaft in der Welt vollziehen.
Der Gott aller Gnade aber, der euch berufen hat zu seiner ewigen Herrlichkeit in Christus, er selbst wird <euch>, die ihr eine kurze Zeit gelitten habt, vollkommen machen, befestigen, kräftigen, gründen. (1. Petrus 5, 8-10)

. . . die ihr in der Kraft Gottes durch Glauben bewahrt werdet zur Errettung, ‹die› bereit ‹ist›, in der letzten Zeit geoffenbart zu werden.
Darin frohlockt ihr, die ihr jetzt eine kleine Zeit, wenn es nötig ist, in mancherlei Versuchungen betrübt worden seid,
damit die Bewährung eures Glaubens viel kostbarer erfunden wird als die des vergänglichen Goldes, das aber durch Feuer erprobt wird, zu Lob und Herrlichkeit und Ehre in der Offenbarung Jesu Christi; . . . (1. Petrus 1, 5-7)

Und er hat zu mir gesagt: Meine Gnade genügt dir, denn ‹meine› Kraft kommt in Schwachheit zur Vollendung. Sehr gerne will ich mich nun vielmehr meiner Schwachheiten rühmen, damit die Kraft Christi bei mir wohne.
Deshalb habe ich Wohlgefallen an Schwachheiten, an Mißhandlungen, an Nöten, an Verfolgungen, an Ängsten um Christi willen; denn wenn ich schwach bin, dann bin ich stark. (2. Korinther 12, 9-10)

Nicht allein aber das, sondern wir rühmen uns auch in den Trübsalen, da wir wissen, daß die Trübsal Ausharren bewirkt,
das Ausharren aber Bewährung, die Bewährung aber Hoffnung;
die Hoffnung aber läßt nicht zuschanden werden, denn die Liebe Gottes

. . . indem ihr alle eure Sorge auf ihn werft; denn er ist besorgt für euch. Seid nüchtern, wacht! Euer Widersacher, der Teufel, geht umher wie ein brüllender Löwe und sucht, wen er verschlingen könne.
Dem widersteht standhaft durch den Glauben, da ihr wißt, daß dieselben Leiden sich an eurer Bruderschaft in der Welt vollziehen. (1. Petrus 5, 7-9)

Wirf auf den HERRN deine Last, und er wird dich erhalten; er wird nimmermehr zulassen, daß der Gerechte wankt. (Psalm 55, 23)

7. Bei Glaubensprüfungen

Glückselig der Mann, der die Versuchung erduldet! Denn nachdem er bewährt ist, wird er den Siegeskranz des Lebens empfangen, den er denen verheißen hat, die ihn lieben. (Jakobus 1, 12)

Unterwerft euch nun Gott! Widersteht aber dem Teufel, und er wird von euch fliehen.
Naht euch Gott, und er wird sich euch nahen. Säubert die Hände, ihr Sünder, und reinigt die Herzen, ihr Wankelmütigen! (Jakobus 4, 7-8)

Keine Versuchung hat euch ergriffen als nur eine menschliche; Gott aber ist treu, der nicht zulassen wird, daß ihr über euer Vermögen versucht werdet, sondern mit der Versuchung auch den Ausgang schaffen wird, so daß ihr sie ertragen könnt. (1. Korinther 10, 13)

Seid nüchtern, wacht! Euer Widersacher, der Teufel, geht umher wie ein brüllender Löwe und sucht, wen er verschlingen könne.

die Sorge der Zeit und der Betrug des Reichtums ersticken das Wort, und er bringt keine Frucht. (Matthäus 13, 22)

Deshalb sage ich euch: Seid nicht besorgt für euer Leben, was ihr essen und was ihr trinken sollt, noch für euren Leib, was ihr anziehen sollt. Ist nicht das Leben mehr als die Speise und der Leib mehr als die Kleidung?
Seht hin auf die Vögel des Himmels, daß sie nicht säen noch ernten, noch in Scheunen sammeln, und euer himmlischer Vater ernährt sie ‹doch›. Seid ihr nicht viel vorzüglicher als sie?
Wer aber unter euch kann mit Sorgen seiner Lebenslänge eine Elle zusetzen?
Und warum seid ihr um Kleidung besorgt? Betrachtet die Lilien des Feldes, wie sie wachsen: sie mühen sich nicht, auch spinnen sie nicht.
Ich sage euch aber, daß selbst nicht Salomo in all seiner Herrlichkeit bekleidet war wie eine von diesen.
Wenn aber Gott das Gras des Feldes, das heute steht und morgen in den Ofen geworfen wird, so kleidet, ‹wird er das› nicht vielmehr euch ‹tun›, ihr Kleingläubigen?
So seid nun nicht besorgt, indem ihr sagt: Was sollen wir essen? Oder: Was sollen wir trinken? Oder: Was sollen wir anziehen?
Denn nach diesem allen trachten die Nationen; denn euer himmlischer Vater weiß, daß ihr dies alles benötigt. (Matthäus 6, 25-32)

Seid um nichts besorgt, sondern laßt in allem durch Gebet und Flehen mit Danksagung eure Anliegen vor Gott kundwerden;
und der Friede Gottes, der allen Verstand übersteigt, wird eure Herzen und eure Gedanken bewahren in Christus Jesus. (Philipper 4, 6-7)

dich bei deinem Namen gerufen, du bist mein. (Jesaja 43, 1)

Ich, ich bin es, der deine Verbrechen auslöscht um meinetwillen, und deiner Sünden will ich nicht gedenken. (Jesaja 43, 25)

Ich habe deine Verbrechen ausgelöscht wie einen Nebel und wie eine Wolke deine Sünden. Kehre um zu mir, denn ich habe dich erlöst! (Jesaja 44, 22)

Er aber sprach zu ihr: Deine Sünden sind vergeben. (Lukas 7, 48)

Denn ich werde ihren Ungerechtigkeiten gnädig sein, und ihrer Sünden werde ich nie mehr gedenken. (Hebräer 8, 12)

. . . und: »Ihrer Sünden und ihrer Gesetzlosigkeiten werde ich nicht mehr gedenken.« (Hebräer 10, 17)

So fern der Osten ist vom Westen, hat er von uns entfernt unsere Vergehen. (Psalm 103, 12)
Der Wandel sei ohne Geldliebe; begnügt euch mit dem, was vorhanden ist, denn er hat gesagt: »Ich will dich nicht versäumen noch verlassen«, so daß wir zuversichtlich sagen können: »Der Herr ist mein Helfer, ich will mich nicht fürchten. Was soll mir ein Mensch tun?« (Hebräer 13, 5-6)

6. Sorgen verboten!

Wo aber unter die Dornen gesät ist, dieser ist es, der das Wort hört, und

. . . und [alle] werden umsonst gerechtfertigt durch seine Gnade, durch die Erlösung, die in Christus Jesus ist.
Ihn hat Gott dargestellt zu einem Sühneort durch den Glauben an sein Blut zum Erweis seiner Gerechtigkeit wegen des Hingehenlassens der vorher geschehenen Sünden unter der Nachsicht Gottes; . . . (Römer 3, 24-25)

Wenn wir aber im Licht wandeln, wie er im Licht ist, haben wir Gemeinschaft miteinander, und das Blut Jesu, seines Sohnes, reinigt uns von jeder Sünde. (1. Johannes 1, 7)

In ihm haben wir die Erlösung durch sein Blut, die Vergebung der Vergehungen, nach dem Reichtum seiner Gnade, . . . (Epheser 1, 7)

. . . denn ihr wißt, daß ihr nicht mit vergänglichen Dingen, mit Silber oder Gold, erlöst worden seid von eurem eitlen, von den Vätern überlieferten Wandel,
sondern mit dem kostbaren Blut Christi als eines Lammes ohne Fehler und ohne Flecken. (1. Petrus 1, 18-19)

Und sie haben ihn überwunden um des Blutes des Lammes und um des Wortes ihres Zeugnisses willen, und sie haben ihr Leben nicht geliebt bis zum Tod! (Offenbarung 12, 11)

5. Über die Heilsgewißheit

Aber jetzt, so spricht der HERR, der dich geschaffen, Jakob, und der dich gebildet hat, Israel: Fürchte dich nicht, denn ich habe dich erlöst! Ich habe

Alles, was mir der Vater gibt, wird zu mir kommen, und wer zu mir kommt, den werde ich nicht hinausstoßen; . . . (Johannes 6, 37)

3. Jesus als Stellvertreter

Jedoch unsere Leiden — er hat ‹sie› getragen, und unsere Schmerzen — er hat sie auf sich geladen. Wir aber, wir hielten ihn für bestraft, von Gott geschlagen und niedergebeugt.
Doch er war durchbohrt um unserer Vergehen willen, zerschlagen um unserer Sünden willen. Die Strafe lag auf ihm zu unserm Frieden, und durch seine Striemen ist uns Heilung geworden.
Wir alle irrten umher wie Schafe, wir wandten uns jeder auf seinen ‹eigenen› Weg; aber der HERR ließ ihn treffen unser aller Schuld. — (Jesaja 53, 4-6)

. . . der unsere Sünden an seinem Leib selbst an das Holz hinaufgetragen hat, damit wir, den Sünden abgestorben, der Gerechtigkeit leben; durch dessen Striemen ihr geheilt worden seid. (1. Petrus 2, 24)

Den, der Sünde nicht kannte, hat er für uns zur Sünde gemacht, damit wir Gottes Gerechtigkeit würden in ihm. (2. Korinther 5, 21)

4. Vom Wert des vergossenen Blutes

Kommt denn und laßt uns miteinander rechten! spricht der HERR. Wenn eure Sünden rot wie Karmesin sind, wie Schnee sollen sie weiß werden. Wenn sie rot sind wie Purpur, wie Wolle sollen sie werden. (Jesaja 1, 18)

2. Über Buße und Glauben

Wenn wir unsere Sünden bekennen, ist er treu und gerecht, daß er uns die Sünden vergibt und uns reinigt von jeder Ungerechtigkeit. (1. Johannes 1, 9)

Wer seine Verbrechen zudeckt, wird keinen Erfolg haben; wer sie aber bekennt und läßt, wird Erbarmen finden. (Sprüche 28, 13)

Glücklich der, dem Übertretung vergeben, dem Sünde zugedeckt ist!
Glücklich der Mensch, dem der HERR die Schuld nicht zurechnet und in dessen Geist kein Trug ist!
Als ich schwieg, zerfielen meine Gebeine durch mein Gestöhn den ganzen Tag.
Denn Tag und Nacht lastete auf mir deine Hand; verwandelt wurde mein Saft in Sommergluten.
So tat ich dir kund meine Sünde und deckte meine Schuld nicht zu. Ich sagte: ich will dem HERRN meine Übertretungen bekennen; und du, du hast vergeben die Schuld meiner Sünde. (Psalm 32, 1-5)

Sucht den HERRN, während er sich finden läßt! Ruft ihn an, während er nahe ist.
Der Gottlose verlasse seinen Weg und der Mann der Bosheit seine Gedanken! Und er kehre um zu dem HERRN, so wird er sich über ihn erbarmen, und zu unserem Gott, denn er ist reich an Vergebung! (Jesaja 55, 6-7)

BIBELVERSE

1. Gottes Wort als einziges Fundament

Heilige sie durch die Wahrheit: dein Wort ist Wahrheit. (Johannes 17, 17)

Fanden sich Worte von dir, dann habe ich sie gegessen, und deine Worte waren mir zur Wonne und zur Freude meines Herzens; denn dein Name ist über mir ausgerufen, HERR, Gott der Heerscharen. (Jeremia 15, 16)

Dies habe ich euch geschrieben, damit ihr wißt, daß ihr ewiges Leben habt, die ihr an den Namen des Sohnes Gottes glaubt. (1. Johannes 5, 13)

. . . denn ihr seid wiedergeboren nicht aus vergänglichem Samen, sondern aus unvergänglichem durch das lebendige und bleibende Wort Gottes. (1. Petrus 1, 23)

Eine Leuchte für meinen Fuß ist dein Wort, ein Licht für meinen Pfad. (Psalm 119, 105)

Die Summe deines Wortes ist Wahrheit, und jedes Urteil deiner Gerechtigkeit ‹währt› ewig. (Psalm 119, 160)

Ich freue mich über dein Wort wie einer, der große Beute macht. (Psalm 119, 162)

into our hearts by the Holy Spirit, whom he has given us. (Romans 5:3-5)

And we know that in all things God works for the good of those who love him, who have been called according to his purpose. (Romans 8:28)

He gives strength to the weary and increases the power of the weak.
Even youths grow tired and weary, and young men stumble and fall;
but those who hope in the Lord will renew their strength. They will soar on wings like eagles; they will run and not grow weary, they will walk and not be faint. (Isaiah 40:29-31)

Resist him, standing firm in the faith, because you know that your brothers throughout the world are undergoing the same kind of sufferings.

And the God of all grace, who called you to his eternal glory in Christ, after you have suffered a little while, will himself restore you and make you strong, firm and steadfast. (I Peter 5:8-10)

... who through faith are shielded by God's power until the coming of the salvation that is ready to be revealed in the last time.

In this you greatly rejoice, though now for a little while you may have had to suffer grief in all kinds of trials.

These have come so that your faith-of greater worth than gold, which perishes even though refined by fire-may be proved genuine and may result in praise, glory and honor when Jesus Christ is revealed. (I Peter 1: 5-7)

But he said to me, "My grace is sufficient for you, for my power is made perfect in weakness." Therefore I will boast all the more gladly about my weaknesses, so that Christ's power may rest on me.

That is why, for Christ's sake, I delight in weaknesses, in insults, in hardships, in persecutions, in difficulties. For when I am weak, then I am strong. (II Corinthians 12:9-10)

Not only so, but we also rejoice in our sufferings, because we know that suffering produces perseverance;

perseverance, character; and character, hope.

And hope does not disappoint us, because God has poured out his love

Be self-controlled and alert. Your enemy the devil prowls around like a roaring lion looking for someone to devour.
Resist him, standing firm in the faith, because you know that your brothers throughout the world are undergoing the same kind of sufferings. (I Peter 5:7-9)

Cast your cares on the Lord and he will sustain you; he will never let the righteous fall. (Psalms 55:22)

7. Times of trial

Blessed is the man who perseveres under trial, because when he has stood the test, he will receive the crown of life that God has promised to those who love him. (James 1:12)

Submit yourselves, then, to God. Resist the devil, and he will flee from you.
Come near to God and he will come near to you. Wash your hands, you sinners, and purify your hearts, you double-minded. (James 4:7-8)

No temptation has seized you except what is common to man. And God is faithful; he will not let you be tempted beyond what you can bear. But when you are tempted, he will also provide a way out so that you can stand up under it. (I Corinthians 10:13)

Be self-controlled and alert. Your enemy the devil prowls around like a roaring lion looking for someone to devour.

choke it, making it unfruitful. (Matthew 13:22)

"Therefore I tell you, do not worry about your life, what you will eat or drink; or about your body, what you will wear. Is not life more important than food, and the body more important than clothes?

Look at the birds of the air; they do not sow or reap or store away in barns, and yet your heavenly Father feeds them. Are you not much more valuable than they?

Who of you by worrying can add a single hour to his life?

"And why do you worry about clothes? See how the lilies of the field grow. They do not labor or spin.

Yet I tell you that not even Solomon in all his splendor was dressed like one of these.

If that is how God clothes the grass of the field, which is here today and tomorrow is thrown into the fire, will he not much more clothe you, O you of little faith?

So do not worry, saying, 'What shall we eat?' or 'What shall we drink?' or 'What shall we wear?'

For the pagans run after all these things, and your heavenly Father knows that you need them. (Matthew 6:25-32)

Do not be anxious about anything, but in everything, by prayer and petition, with thanksgiving, present your requests to God.

And the peace of God, which transcends all understanding, will guard your hearts and your minds in Christ Jesus. (Philippians 4:6-7)

Cast all your anxiety on him because he cares for you.

"I, even I, am he who blots out your transgressions, for my own sake, and remembers your sins no more. (Isaiah 43:25)

I have swept away your offenses like a cloud, your sins like the morning mist. Return to me, for I have redeemed you. (Isaiah 44:22)

Then Jesus said to her, "Your sins are forgiven." (Luke 7:48)

For I will forgive their wickedness and will remember their sins no more. (Hebrews 8:12)

Then he adds: "Their sins and lawless acts I will remember no more." (Hebrews 10:17)

... as far as the east is from the west, so far has he removed our transgressions from us. (Psalms 103:12)

Keep your lives free from the love of money and be content with what you have, because God has said, "Never will I leave you; never will I forsake you."
So we say with confidence, "The Lord is my helper; I will not be afraid. What can man do to me?" (Hebrews 13:5-6)

6. Worries are forbidden

The one who received the seed that fell among the thorns is the man who hears the word, but the worries of this life and the deceitfulness of wealth

He did this to demonstrate his justice, because in his forbearance he had left the sins committed beforehand unpunished- (Romans 3:24-25)

But if we walk in the light, as he is in the light, we have fellowship with one another, and the blood of Jesus, his Son, purifies us from all sin. (I John 1:7)

In him we have redemption through his blood, the forgiveness of sins, in accordance with the riches of God's grace .... (Ephesians 1:7)

For you know that it was not with perishable things such as silver or gold that you were redeemed from the empty way of life handed down to you from your forefathers,
but with the precious blood of Christ, a lamb without blemish or defect. (I Peter 1:18-19)

They overcame him by the blood of the Lamb and by the word of their testimony; they did not love their lives so much as to shrink from death. (Revelation 12:11)

5. Certainty of salvation

But now, this is what the Lord says-he who created you, O Jacob, he who formed you, O Israel: "Fear not, for I have redeemed you; I have summoned you by name; you are mine. (Isaiah 43:1)

3. Jesus as representative

Surely he took up our infirmities and carried our sorrows, yet we considered him stricken by God, smitten by him, and afflicted.

But he was pierced for our transgressions, he was crushed for our iniquities; the punishment that brought us peace was upon him, and by his wounds we are healed.

We all, like sheep, have gone astray, each of us has turned to his own way; and the Lord has laid on him the iniquity of us all. (Isaiah 53:4-6)

He himself bore our sins in his body on the tree, so that we might die to sins and live for righteousness; by his wounds you have been healed. (I Peter 2:24)

God made him who had no sin to be sin for us, so that in him we might become the righteousness of God. (II Corin-thians 5:21)

4. Value of Jesus's blood

"Come now, let us reason together," says the Lord. "Though your sins are like scarlet, they shall be as white as snow; though they are red as crimson, they shall be like wool. (Isaiah 1:18)

... and [all] are justified freely by his grace through the redemption that came by Christ Jesus.

God presented him as a sacrifice of atonement, through faith in his blood.

2. Repentance and faith

If we confess our sins, he is faithful and just and will forgive us our sins and purify us from all unrighteousness. (I John 1:9)

He who conceals his sins does not prosper, but whoever confesses and renounces them finds mercy. (Proverbs 28:13)

Blessed is he whose transgressions are forgiven, whose sins are covered.
Blessed is the man whose sin the Lord does not count against him and in whose spirit is no deceit.
When I kept silent, my bones wasted away through my groaning all day long.
For day and night your hand was heavy upon me; my strength was sapped as in the heat of summer.
Then I acknowledged my sin to you and did not cover up my iniquity. I said, "I will confess my transgressions to the Lord"-and you forgave the guilt of my sin. (Psalms 32:1-5)

Seek the Lord while he may be found; call on him while he is near.
Let the wicked forsake his way and the evil man his thoughts. Let him turn to the Lord, and he will have mercy on him, and to our God, for he will freely pardon. (Isaiah 55:6-7)

All that the Father gives me will come to me, and whoever comes to me I will never drive away. (John 6:37)

BIBLE VERSES

1. God's word as the only true guide

Sanctify them by the truth; your word is truth. (John 17:17)

When your words came, I ate them; they were my joy and my heart's delight, for I bear your name, O Lord God Almighty. (Jeremiah 15:16)

I write these things to you who believe in the name of the Son of God so that you may know that you have eternal life. (I John 5:13)

For you have been born again, not of perishable seed, but of imperishable, through the living and enduring word of God. (I Peter 1:23)

Your word is a lamp to my feet and a light for my path. (Psalms 119: 105)

All your words are true; all your righteous laws are eternal. (Psalms 119: 160)

I rejoice in your promise like one who finds great spoil. (Psalms 119: 162)